



第18回

三遠南信サミット 2010 in 南信州

テーマ

地域主権時代における県境地域連携モデルの推進
— 融合に向けた自発的な地域づくりの実践 —

事業報告書

平成22年11月12日（金）

飯田文化会館・シルクホテル

第18回 三遠南信サミット 2010 in 南信州

- **テーマ** 地域主権時代における県境地域連携モデルの推進
ー融合に向けた自発的な地域づくりの実践ー
- **日時** 平成22年11月12日(金)
- **会場** 飯田文化会館(長野県飯田市高羽町5-5-1)
シルクホテル(長野県飯田市錦町1-10)
- **主催** 三遠南信地域連携ビジョン推進会議(SENA)
- **共催** 三遠南信地域交流ネットワーク会議
三遠南信地域経済開発協議会
三遠南信地域整備連絡会議
- **後援** 国土交通省、経済産業省、農林水産省、長野県、静岡県、愛知県
- **参加者** 450名
- **日程**
 - 1 全体会(13:00~15:00) [場所:飯田文化会館]
 - あいさつ
 - ・主催者あいさつ
三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木康友
 - ・開催地域代表あいさつ
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 飯田市長 牧野光朗
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 飯田商工会議所会頭 柴田忠昭
 - ・来賓祝辞
国土交通省中部地方整備局長 富田英治 様
経済産業省関東経済産業局総務企画部長 佐々木 正 様
長野県副知事 和田恭良 様
 - トップ対談
 - テーマ : 「地域主権時代における三遠南信地域の目指すべき姿」
 - パネラー : 浜松市長、豊橋市長、飯田市長、
浜松商工会議所会頭、豊橋商工会議所会頭、飯田商工会議所会頭
 - コーディネーター : (社)東三河地域研究センター 常務理事 戸田敏行 氏

2 分科会 (15:45~17:30) [場所：シルクホテル]

○「道」分科会

テーマ : 「地域基盤整備による地域活性化への期待」

コーディネーター : 飯田市長 牧野光朗 氏

アドバイザー : 飯田商工会議所会頭 柴田忠昭 氏

○「技」分科会

テーマ① : 「産学官連携・農商工連携の推進と地域全体への拡大に向けて」

テーマ② : 「地域が大学に求めるものと三遠南信地域大学フォーラムの姿」

コーディネーター : 静岡大学 イノベーション共同研究センター長 木村雅和 氏

コーディネーター : 愛知大学経済学部 教授 岩崎正弥 氏

アドバイザー : 三遠南信クラスター推進会議 地域連携マネージャー 松島信雄 氏

○「風土」分科会

テーマ : 「三遠南信の地域資源を活かした連携事業の推進と歴史風土の保全」

コーディネーター : (財) 阿智開発公社 理事長 羽場睦美 氏

アドバイザー : NPO 法人三遠南信アミ 理事 三宅淳子 氏

○「山・住」合同分科会

テーマ : 「流域定住の推進に向けた体制の構築と安全・安心な地域づくりの実現」

コーディネーター : 豊橋技術科学大学 建設工学系教授

地域協働まちづくりリサーチセンター長 大貝 彰 氏

アドバイザー : (社) 東三河地域研究センター 常務理事 戸田敏行 氏

3 報告会 (18:00~18:30) [場所：シルクホテル]

- ・各分科会の報告 : 各分科会コーディネーター
- ・サミット宣言 : 飯田市長 牧野光朗
- ・次回開催地域代表あいさつ : 浜松市長 鈴木康友

4 交流会 (18:30~20:00) [場所：シルクホテル]

5 関連事業

< 11月12日(金) >

- ・三遠南信地域住民セッション (10:00~12:00) [場所：飯田文化会館]
- ・三遠南信地域経済開発協議会役員会 (10:30~12:30) [場所：シルクホテル]
- ・三遠南信地域市町村議会議長協議会役員会 (9:45~10:00) [場所：ビーラクスマツカワ]
- ・三遠南信地域市町村議会議長協議会総会 (11:00~12:00) [場所：ビーラクスマツカワ]
- ・三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会総会 (11:00~11:00) [場所：飯田県文化センター]
- ・三遠南信地域市町村議会議長協議会意見交換会 (12:00~13:00) [場所：ビーラクスマツカワ]

< 11月13日(土) >

- ・三遠南信(8信金)しんきんサミット (11:00~16:00) [場所：飯田市公民館]
- ・三遠南信グルメサミット (11:00~16:00) [場所：飯田市中央公園]

目 次

1	全体会 主催者等あいさつ・来賓祝辞	1
2	全体会 トップ対談 要旨	9
3	「道」分科会 要旨	22
4	「技」分科会 要旨	35
5	「風土」分科会 要旨	49
6	「山・住」合同分科会 要旨	61
7	三遠南信地域住民セッション 要旨	74
8	報告会 要旨	79
9	交流会	86
10	参考資料	
	・開催プログラム	88
	・開催チラシ	89
	・三遠南信サミット開催概要一覧	90





1 全体会 主催者等あいさつ・来賓祝辞

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

○主催者あいさつ

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木康友



皆様、こんにちは。ご紹介を賜りました三遠南信地域連携ビジョン推進会議、通称SENAの会長の浜松市長、鈴木康友でございます。

本日は、第18回となります「三遠南信サミット2010 in 南信州」へ、国の関係の皆様始め、ご来賓の皆様、そして、この地域の関係者の皆様、多数ご参加をいただきまして本当にありがとうございます。

また今回、開催に当たりましては、飯田市の牧野市長を始め、飯田市の皆様、そして開催地域の関係者の皆様に、ご尽力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

さて、この三遠南信サミットも平成5年度から毎年開催をされ、今回で18回目となるわけでございますけれども、これまで地域一帯となった発展に向けて、さまざまな議論や取り組みがなされてまいりました。平成20年度には三遠南信地域連携ビジョンが合意をされまして、推進会議事務局の設置や具体的な取り組みが進んでいるところでございます。

昨年の東三河サミットにおきましては、連携から融合へと宣言がなされ、新たなステップへ入ったという感がいたします。今、地域主権改革が大きく進展をする中で、地域が自発的に県を跨いだ格好で、これだけ広域の県境連携が進

んでいるという例は全国には見当たりません。まさに県境連携を先導するすばらしい取り組みであると確信をいたしております。

今年の3月には、産業連携に関する三遠南信地域の広域基本計画が国のご同意をいただきました。県境を越えた同意というのは全国で2例目ということでございます。

また、本年度から浜松市で運用を開始いたしました消防ヘリコプターでございますけれども、この航空消防の分野におきまして、関係地域の皆様と応援協定も結ばせていただきました。

そして何よりも、この後、牧野市長からご報告があると思っておりますけれども、国の国土交通省交通政策審議会の中央新幹線小委員会におきまして、懸案のリニア中央新幹線のルートについては、南アルプスルートが最適だろうという報告がなされました。これは飯田市並びにこの南信州の皆様だけではなくて、三遠南信地域の我々にとっても非常に大きなニュースではないかと思っております。

本年度につきましては、「地域主権時代における県境地域連携モデルの推進～融合に向けた自発的な地域づくりの実践～」ということテーマとして掲げました。今回もこの後の全体会、そして分科会と駒を進めてまいりますけれども、全体会におきましては、「地域主権時代における三遠南信地域の目指すべき姿」につきまして、飯田市、豊橋市、そして浜松市の3市長と3商工会議所の会頭で対談を行ってまいりたいというように思います。そして、各テーマに分かれまして、その後、分科会でこれまでの取り組み、あるいは今後の取り組みにつきまして、皆様から忌憚のないご意見をいただくことになっております。

ぜひ、この南信州におけます第18回のサミットが大いに盛り上がり、成功に終わりますこと

を心から期待するとともに、このサミットを通じまして、全国に三遠南信地域の広域連携の試みというものが発信できることを期待いたしまして、冒頭のごあいさつに代えさせていただきます。

本日はよろしく願い申し上げます。

○開催地域代表あいさつ

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 飯田市長 牧野光朗



皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました飯田市長の牧野でございます。開催地域を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げますさせていただきます。

本日は三遠南信圏域内外から大変多くの皆様にご参加いただきまして、18回目を迎えます三遠南信サミットが私どものこの南信州におきまして開催されますことを大変喜ばしく思いますとともに、大変ご多忙にもかかわらず、この南信州にお集まりいただきました東三河、遠州地域の皆様に感謝と歓迎の意を表させていただきたいと思っております。本当によろしくお越しいただきました。

また、平素から三遠南信地域の振興発展に格段のご尽力をいただいておりますご来賓の方々におかれましては、大変ご多忙の中、ご臨席をいただき、会に花を添えていただいておりますことに御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、この三遠南信サミットであります、先ほど会長からもお話がありましたが、平成5

年度以来、三遠南信地域の交流と連携の強化や振興、そして発展を目指しまして、関係市町村と商工会議所、商工会が一堂に会しまして、国や県、あるいは地域の住民の皆様のご協力とご参加により、ここまで開催されてきたところであります。今回は新しく駒ヶ根市からオブザーバー参加をいただきまして、当地での開催は6回目となるところでございます。

関係する皆様的一方ならぬご尽力によりまして、全国的に見てもたぐいまれな、この強力な県境を越えた結びつきをここまで築いてこられましたことに重ねて感謝を申し上げます次第であります。

さて、昨今の地方を取り巻く情勢を鑑みますと、少子高齢化が進む我が国の総人口はこれから急速に減少し、地方圏のみならず三大都市圏の人口も減少していくという大変厳しい情勢にあるわけでありまして。

こうした状況下、国と地方の有り様も大きく変わろうとしておりまして、これまで大都市圏に集中してきた人材を地方圏に誘導する取り組み、私はこれを「人材のサイクルの構築」と申し上げておりますが、この人材のサイクルの構築を積極的に展開して、地方圏の活力を維持・再興するとともに、将来にわたって持続可能な地域をつくっていくことが必要不可欠と考えているところであります。

そのためには、地方の側から地域発のビジネスモデルを創造し、また、住民に最も近いところで行政を行っております基礎自治体、市町村が政策立案の主体となって広域的に連携し、そしてこれを全国モデルとして国を始め、全国に向けて提案・発信していくことが必要と思うところであります。

こうした考えの下、私たち南信州地域は一昨年以來、圏域を構成する1市3町10村が一体となりまして、総務省の提唱いたします定住自立圏構想に全国に先駆けて取り組んできているところであります。これは、生活圏、経済圏を一

にします南信州圏域の14市町村が行政区画を越えて役割分担と連携をし、定住と自立を目指して、それぞれの都市機能、生活機能を確保していこうという試みであります。

例えば、当圏域の中核病院であります飯田市立病院は、利用者の3割が周辺の13町村の皆様という状況を踏まえて、現在の規模と質を維持し、圏域を挙げた病病連携、病診連携の中核を担っているところであります。

また、産業振興におきましても、経済圏を一にするこの14市町村の行政と産業界などで構成いたします飯伊地域地場産業振興センターを拠点として、圏域全体の経済自立度70%を目指す地域経済活性化プログラムの取り組みを進め、航空宇宙や環境などの分野で成果を上げつつあるところであります。

ところで、こうした定住自立圏の取り組みにつきましても、基本的な生活機能を有する定住自立圏が高次な都市機能を有する定住自立圏と連携することも想定されているところであります。南信州定住自立圏の取り組みが県境をまたいだ定住自立圏の連携モデルとして、この高次の定住自立圏へと拡大し、天竜川、豊川流域の上流と下流が一体となって定住と自立を目指すような取り組みになっていくことを期待するところであります。

このように見ていきますと、まさにこの定住自立圏と三遠南信地域連携ビジョンというものは、その方向性を一にしておりまして、相互に極めて深い関係に位置づけられていると思うわけであります。まさに250万流域都市圏の創造につながっていくものと考えているところであります。

最近の具体的な動きといたしましては、過日、国立大学法人豊橋技術科学大学が飯田工業高校同窓会館にサテライトラボを開設いたしまして、三遠南信の流域全体を視野に入れたモデル的な教育研究活動を始めていらっしゃいます。

また、本日午前中に行われました住民セッ

ションにおきましては、南信州の住民の立場から、三遠地域との連携に積極的にかかわっていくため、「南信州交流の輪」の設立が宣言されたところであります。既にあります遠州、東三河の住民団体のプラットフォームとともに、今後の交流の深まりが期待されるところであります。

また、第3回の三遠南信しんきんサミットも、明日、当市におきまして開催されることになっております。少子高齢化、人口減少が進む一方で、リーマンショック後の世界同時不況を経て、産業構造の転換を迫られている当圏域の中におきまして、自立を目指す地域経済をサポートする地域金融機関の役割というものはますます高まっていると考えております。

もちろん、三遠南信地域連携ビジョンを強力にしていくためには、後ほどの3市長、3商工会議所会頭の対談でも触れていければと思っておりますが、平成20年代後半に全線開通を目指しております三遠南信自動車道、また、2027年に開通が予定されておりますリニア中央新幹線といった大規模な交通体制の整備が必要不可欠であります。

こうした交通インフラを基軸にして、各地域、各界、各層におけるさまざまな構想、ビジョン、取り組みが有機的に結合され、そのことが本サミットのテーマである融合に向けた自発的な地域づくりの実現につながっていくと確信しているところでございます。

平成20年度に連携ビジョンを推進していくため、三遠南信地域連携ビジョン推進会議「SENA」が発足しましたが、このように、さまざまな面から三遠南信地域のつながりが強まっていく中、SENAは平成24年度には新しい連携組織に移行することが予定されております。融合に向けた自発的な地域づくりを目指す本サミットが、より強力な組織体制づくりに踏み出させるステップになることを切に望むところであります。

本日のサミットには、行政のみならず、議会、

産業界、NPO、そして住民の皆様等、さまざまな立場の方々が数多く参加されておりますので、ぜひ活発な議論を展開していただき、今後の三遠南信の取り組みが一層力強いものになりますようご祈念申し上げ、ご参加いただいている皆様方のご活躍、ご健勝をご祈念申し上げまして、開催地域代表としてのあいさつとさせていただきます。

本日はよろしくお願いいたします。

**■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
飯田商工会議所会頭 柴田忠昭**



皆さん、こんにちは。

本日、ここに、たくさんのご関係の方々にお集まりをいただき、また、国あるいは各地からご来賓もたくさんお招きをいたしまして、「地域主権時代における県境地域連携モデルの推進」をテーマに、第18回目の三遠南信サミット2010 in 南信州が盛大に開催できますことを大変うれしく思います。また、皆様にお集まりいただきましたことに対しまして心より歓迎申し上げます。

飯田商工会議所では、今回、役員改選が行われ、私が宮島八束会頭の後を受けまして、これから先3年間、飯田商工会議所の会頭として務めさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

三遠南信地域の連携につきましては、大変長い歴史がございますが、この県境を越えた取り組みは、先ほど、鈴木、牧野両市長さんからもお話がありましたが、全国的に大変珍しい先進

的な活動と言われております。平成5年度に第1回のサミットが浜松で開催されて以来、今日で18回目を迎えることになったわけであります。

平成20年には三遠南信地域連携ビジョン推進会議、通称「SENA」が発足をいたしまして、「三遠南信250万流域都市圏の創造」を将来像として、さまざまな住民活動、あるいは経済活動、行政活動を行っているところであります。

具体的なプロジェクトでは、中部圏の中核となる地域基盤の形成、あるいは持続発展的な産業の集積などをテーマに掲げて活動が進む中、今回は、この後のトップ対談、さらには分科会において、各テーマに沿った熱き討議がなされるものと思っております。

特に「道」というテーマにつきましては、この南信州地域に国家的なプロジェクトでありますリニア中央新幹線の駅が実現しようとしております。本日午前中に第11回目になります国土交通省交通政策審議会中央新幹線小委員会が開催されております。午前中のことですので内容については十分に承知をしておりますが、徐々にリニア中央新幹線南アルプスルートでの開通に向けた具体的な協議が進むと思えます。

また併せまして、三遠南信自動車道につきましても着々と工事が進んでおりますが、何と申しましても、様々な事情で予算がつきにくい状況です。行政の方々はもちろんですが、私ども経済界といたしましても十分なる予算づけを行っていただくよう、これからも陳情を重ね、一日も早い開通に向けて頑張っていきたいと思っております。

いずれにいたしましても、本日これから、長時間になりますが、皆様と議論を深めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

○来賓祝辞

■国土交通省中部地方整備局長

富田英治 様



改めまして、皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました中部地方整備局の富田でございます。

今日は、この三遠南信サミット2010 in 南信州が、このように大変盛大に開催されましたこと、心よりお喜びを申し上げます。また、この素晴らしい場にお招きをいただきましたことを御礼申し上げたいと思います。さらに、今日ご参集の皆様方には、常日頃から国土交通行政、そして、整備局の各種事業に大変深いご理解とご協力をいただいておりますことを、この場をお借りして御礼を申し上げたいと存じます。

先程、ご紹介がございましたように、この三遠南信サミットも18回目という歴史を積み重ね、そして、その間に着々と成果を積み重ねられてこられているわけでもあります。これはもう本当に関係者の皆様方の並々ならぬご尽力、ご努力の賜物だろうと深く敬意を表したいと思う次第でございます。

そして何よりも、これは、この三遠南信地域の連携という必然性があったのだということのまさに証明だろうと思うわけでもあります。今さら申し上げるまでもなく、この三つの地域、それぞれ自動車産業、あるいは電子工業という産業の集積があり、また、豊川、天竜川の豊かな自然に恵まれた大変大きなポテンシャルを持っている地域であるわけです。先程から、お話がございましたリニアのことも含めて、将来が大

変楽しみな地域ということでもあります。

一方で、中山間地域における少子化、あるいは人口減少によるコミュニティをどう維持していくかという、また共通の悩みも併せ持っている地域ということでありまして、この3地域の連携を深めながら、こういう問題を克服して地域の発展を図っていこうということで、一昨年、会長からもご紹介ございました三遠南信地域連携ビジョンがつけられたわけでもあります。

このビジョンのキーワードは連携と交流、そしてさらなる融合ということでありまして、例えば、産官学あるいは農商工の連携でもって新しい産業クラスターをつくっていこう。あるいは三つの地域それぞれのメディアが連携をして、それぞれの地域を紹介し合いながら、人の交流、あるいは企業の連携を後押ししていこうとか、観光資源のネットワーク化を図っていこうとか、そういう斬新な考え方、アイデアというのが盛り込まれているビジョンであるわけです。そして、何より素晴らしいのは、それが一つずつ、一つずつ実現化されているということだろうと思います。

実はこのビジョン、昨年の夏につくられました中部地方の広域地方計画の中でも、この中部地域の中におけます数少ない主要なリーディングプロジェクトの一つとして位置づけられているわけでありまして、中部地域全体から見ても大変重要なプロジェクトだという位置づけになっているわけがございます。私ども中部地方整備局といたしましても、このビジョンの実現に最大限、お手伝いをしていきたいと思っております。

私ども中部地方整備局の役割というのは大きく二つございまして、一つは、地域の安心と安全の確保、そして、もう一つが地域の活力を支えるための、いわゆる交流基盤の整備、この二つが大きな役割としてあるわけでもあります。

先程からお話が出ております三遠南信自動車道は全長100キロメートルにわたる自動車専用

道であります。現在のところ供用は、まだその約1割という状況ではございます。

今、この各地域におけます工事、あるいはその工事のための準備作業に、全力で取りかかっており、一日も早く供用を目指して頑張っていきたいと思っております。

また、もう一つの役割は、安心と安全だと思っております。今年7月半ばに、この地方を集中豪雨が襲いまして、がけ崩れ等で道路が22カ所も通行止めになり、1,200世帯、2,400人の方が孤立するという大きな被害が起きました。そういう際にも、極力、あらゆる形でご協力を申し上げ、この安全の確保にも努めていきたいと思っております。

実は、少しご紹介させていただきますと、その後、9月に台風9号が非常に変則的なルートで日本を襲ったわけではありますが、その際に、静岡の一番東の端にあります小山町という山間地の町で大規模な災害が発生いたしました。その際に、私どもも県と協力をして、TEC-FORCEという支援部隊を派遣いたしまして、数十人の職員が何日か、そこで泊り込んで復旧作業に向けてのいろいろなお手伝いをさせていただいております。何か事が起こったときには、そういう形のご協力も決してやぶさかではないと思っております。

いずれにいたしましても、このサミットを契機にして、ますますこの3地域の交流と連携が深まり、地域の発展に向けて強力に進んでいきますことを心からお祈り申し上げまして、今日のお祝いのごあいさつとさせていただきます。

今日はおめでとうございます。

■経済産業省関東経済産業局総務企画部長 佐々木 正 様

ただいまご紹介いただきました関東経済産業局の佐々木でございます。局長が他用にて出席できませんので代理でまいりました。よろしくお願いたします。

本日は、三遠南信サミット2010 in 南信州が関係各位のご協力により、かくも盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。また、ご臨席の皆様には、日頃より経済産業行政に多大なるご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。



さて、昨今の日本経済は、皆様ご承知のとおり、急速な円高の進展や、依然として高水準の失業率など先行き懸念が強まっております、依然として厳しい状況にあると認識しております。

こうした中で、政府といたしましては、本年9月には円高およびデフレへの緊急対応策といたしまして、新成長戦略実現に向けた三段構えの経済対策というものを閣議決定いたしまして、9,200億円の予備費を使って、現在、支援事業を展開中でございます。また、10月26日には補正予算を含む円高およびデフレ対応のための緊急総合経済対策というものを閣議決定しております、スピードを重視した雇用、景気の維持ということで、切れ目のない政策を展開しようとしております。

他方、地域に対する国民の意識といたしまして、所得水準や雇用情勢といった点で地域格差の拡大を感じる割合が増加しているといった調査結果がありまして、地域の活力向上というのは喫緊の課題であると認識しております。

こうした中で、県境を隔てた3地域の皆様が一堂に会しまして、この三遠南信地域の連携・発展に向けて取り組んでおられるというのは大変有意義なものであるかと思ひまして、関係者

のご努力に心から敬意を表するところでございます。

また、平成20年には、連携の明確な指針となる三遠南信地域連携ビジョンが策定されております。さらにはビジョンの重点項目の進捗などを総合的に管理する三遠南信地域連携ビジョン推進会議が設立されまして、内閣府の地域社会雇用創造事業の採択を受けるなど意欲的に活動されております。より高い実効性を目指しましたこのような取り組みは、冒頭の鈴木浜松市長のごあいさつにもありましたが、全国でも類を見ないものでございまして、極めて高い評価を得るというものでございます。経済産業省としても、今後この大きな取り組みがますます発展されますことを注目するとともに、期待をしているところでございます。

経済産業省におきましては、産学官の連携により広域的なネットワークを形成し、地域から新事業、新製品を次々と生み出していくという産業クラスター計画を推進してまいりました。平成22年度からは企業立地促進法に基づく基本計画にのっとり、地域発のイノベーションを支援しております。

この計画に基づきまして、三遠南信地域では三遠南信地域基本計画を策定していただき、三遠南信クラスター推進会議が事業実施主体になり、浜松商工会議所、豊橋商工会議所、株式会社サイエンス・クリエイト、財団法人飯伊地域地場産業振興センターの4機関が地域における新産業、新事業の創出に取り組んでおられます。

最近では飯田地域における航空宇宙分野の海外販路開拓への積極的な活動、浜松地域では次世代環境車社会実験など次世代輸送機器分野の取り組み、豊橋地域では植物工場の展示会出品等の農商工連携の動きなど、それぞれのポテンシャルを生かした3地域の有機的な連携が加速しており、地域における新産業の創出に向けて、こうした動きが今後ますます活発化することを期待しております。

三遠南信地域は経済産業省の所管では関東、中部の両経済産業局に跨りますが、私どもとしましては、両経済産業局及び国土交通省さんを始め、他省庁とも緊密に連携をしながら、これらの関係の諸施策を総動員しまして、地域産業の活性化に向けて皆様方の取り組みを一生懸命応援させていただきたいと考えております。

今後とも皆様方のご理解、ご協力をお願いする次第でございます。

最後になりましたが、本サミットの開催に当たりまして、多大なご尽力をいただきました牧野飯田市長を始め、関係の皆様にご心から敬意を表しますとともに、三遠南信地域のますますの発展、及び本日ご参集の皆様方の一層のご活躍、ご発展をご祈念しまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日はどうもおめでとうございます。

■長野県副知事 和田恭良 様



ただいまご紹介いただきました長野県副知事の和田恭良でございます。

本日、第18回三遠南信サミット2010 in 南信州がこのような盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げたいと思います。

三遠南信という言葉は、このサミットの開催が始まりましたころは、私ども県の中におりましても耳新しい言葉でありましたけれども、今や、すっかり三遠南信という言葉は一般社会にも定着したということございまして、これまでこの三遠南信地域の交流や連携に大変ご尽力いただいてきた皆様のご努力の賜物と心より敬

意を表したいと思う次第でございます。

ご承知のように、長野県は「信濃の国」という県歌がございますけれども、その中に、江戸時代には10州に囲まれていたとありますが、現在は8県でございます。その8県と長野県は、それぞれ県境を挟み、いろいろ工夫をされながら、お互いにさまざまな交流をされております。

ただ、やはり何と申し上げましても、この三遠南信地域の交流というものは一番突出しているといえますか、際立っているというように思っております。文化的にも、経済的にも、昔からそういう非常に強い絆があったものが、今ここに来て大変生きているという、そういう感じを抱いているところであります。

また、そうしたものを非常に象徴しているものが三遠南信自動車道の建設であろうと思っております。先般も私、その建設中の姿を視察させていただきましたけれども、一日も早く完成することを県としても大変強く望んでいるところでございます。

また、先程から皆様のお話にありましたように、リニア中央新幹線、こういった話がここ一、二年の間に急速に私たちの目の前に、現実味を帯びて現れてきているということでございます。自動車道あるいは新幹線、いずれも私どもにとりまして大変期待の大きいものでありますけれども、沿線地域のみならず、その地域の周辺の地域も巻き込んで、その地域にとって非常に役立つもの、地域の振興や発展に資するものになることを大変私も期待しております。

県といたしましても、今後、これらについて、積極的に対応してまいりたいと、このように考えております。

また、皆様には何かとご協力、また、いろいろお願いする場面もあろうかと思っておりますが、ぜひよろしくお願ひしたいと思っております。

結びではございますけれども、本日のサミット、実りあるものとなりますことを、また、この三遠南信地域がますます発展されますことを

心より祈念申し上げまして、簡単ではございますが、私のごあいさつといたします。

本日は誠にありがとうございました。

2 全体会 トップ対談 要旨

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

■ テーマ「地域主権時代における三遠南信地域の目指すべき姿」



<コーディネーター>

社団法人東三河地域研究センター
常務理事 戸田敏行 氏

<パネリスト>

浜松市長 鈴木康友 氏
豊橋市長 佐原光一 氏
飯田市長 牧野光朗 氏
浜松商工会議所会頭 御室健一郎 氏
豊橋商工会議所会頭 吉川一弘 氏
飯田商工会議所会頭 柴田忠昭 氏

平成20年3月に「三遠南信地域連携ビジョン」が策定され、この地域では、これまで以上に交流・連携事業が推進されています。

今回のトップ対談では、こうした三遠南信地域の活動を確認し、今後、目指すべき地域の将来像を地域の皆様と共有するために、三遠南信地域の行政及び経済界を代表して、浜松、豊橋、飯田の市長及び商工会議所会頭が対談します。

コーディネーター／社団法人東三河地域研究センター 戸田常務理事



今回、進行をさせていただきます東三河地域研究センターの戸田と申します。

3年前、第15回三遠南信サミット2007in 南信

州がこの会場で開催され、この場で「三遠南信地域連携ビジョン」が発表されましたが、大変な熱気であったことを覚えています。

翌年5月に豊橋市で、浜松、豊橋、飯田の市長および会頭のみなさんによるトップ対談が開催されました。

それから3年経ちましたが、平成24年度にSENAは新連携組織への移行を予定しています。そこで、「地域主権時代における三遠南信地域の目指すべき姿」というテーマで、もう一度、トップ対談を持って、その方向性を確認するために、今日の機会が設けられています。

それでは早速、トップ対談を始めさせていただきます。

三遠南信地域連携ビジョンは、ご承知のようにインフラにかかわる「道」、産業にかかわる「技」、観光にかかわる「風土」、中山間地・防災の「山・住」と、大きく四つに分かれています。

今回は、この四つの分野について、まず、各市長、会頭から、これからの方向性、あるいはご提言を伺います。

それから、新連携組織に関連する部分ですが、このビジョンをどのように進めるか、そのあり方などについてお伺いをします。

それでは早速、三遠南信地域の核となる「道」の部分に関するインフラ整備、今後の三遠南信の姿をどうお考えかについてご意見をいただきます。

パネリスト／飯田市 牧野市長



三遠南信地域連携ビジョンを「絵に描いた餅」にしないためには、その軸になる道路インフラ、あるいは鉄道インフラの整備が非常に重要と考えます。

東西軸としては、既に東海道新幹線あるいは東名高速道路が整備されていますが、それに新東名高速道路を加えれば、今のところ、東西軸は非常に整備が進んできていると思います。

また、山側の東西軸としては、いよいよリニア中央新幹線が現実のものとなり、2027年に開通が予定されており、三遠南信の連携ビジョンの中でしっかりと位置づけられているリニア中央新幹線飯田駅が、まさに三遠南信の北の玄関口、また、長野県の南の玄関口として機能することが期待されます。

さらに、これらの東西軸を結び、圏域の南北軸となる三遠南信自動車道が、何よりもこの三遠南信地域の一体的な発展のため、また圏域の中央に広く位置する中山間地域における「住民の命をつなぐ道路」として、早期に開通するよう関係機関へ働きかける必要があります。

それには3つの地域が、さらに力を合わせて、一つになることが大切と考えます。

パネリスト／飯田商工会議所 柴田会頭



「道」は、インフラの基本です。この南信州地域では、三遠南信自動車道とリニア中央新幹線という二つの大きな懸案事項があります。

早期開通を目指すものの、開通はまだ先で、リニア中央新幹線は17年後、三遠南信自動車道は予算次第という状況で、情勢により開通が長引くことが懸念されています。

今、飯田市民の間では両者の開通を目指して、様々な団体が開通に向け、どのようなまちづくりをするか、どのようなまちにするかをそれぞれの立場で活発に議論されています。

いずれにせよ、このインフラの整備が数年あるいは十数年後に完成することで、この地域は大きく変わる事となり、この二つの機会を有効に使うことによって、当地域のみならず、この三遠南信地域全体が大きく飛躍できると期待しています。

また、リニア中央新幹線のルート問題については、事実上、南アルプスルートということで決着がついたようですので、あとは各県一駅と言われている中間駅として、この南信州地域に飯田駅をどういう形で設置していくのかということが、喫緊の課題となっています。

いずれにいたしましても、三遠南信自動車道の早期開通とリニア中央新幹線飯田駅の設置に向け、引き続き働きかけを行うとともに、地域において大いに議論をしながら新しいまちづく

りを進めることが、たいへん重要と思います。

パネリスト／浜松市 鈴木市長



今、リニアに対する大変熱い思いが語られましたが、実は、このリニアの中央新幹線については、私どもも大変関心を持って見えています。

というのは、直接的には、この南信州の皆様にとって、大変重要な東西交通となってくる訳ですが、私ども東海道新幹線を抱えている地域から見ても良い影響があります。

今、東海道新幹線というのはほとんど通過交通であり、「のぞみ」が主体です。豊橋駅でも同様と思いますが、今、1時間に「こだま」が2本と「ひかり」が1本、たった3本しか浜松駅には停車しません。しかし、このリニア中央新幹線ができることにより、東海道新幹線における「のぞみ」の役割をリニア中央新幹線が担うこととなり、東海道新幹線のダイヤが「ひかり」や「こだま」中心へとシフトしてきます。

これは、私ども浜松市にとっても、豊橋市さんにとっても大変に喜ばしいことですので、ぜひ、この地域挙げて、このリニア中央新幹線の推進をしっかりと応援をしていきたいと思えますし、ぜひ南アルプスルートとなり、飯田に駅ができるように応援をしていきたいと思えます。

また、道路に関しては、私どもの地域では、いよいよ第二東名高速道路、いわゆる新東名の静岡県内における供用開始が迫っています。

この供用が開始されれば、さらに三遠南信自動車道の必要性や重要性が高まることとなります。今、新東名の引佐JCT（仮称）から一部

供用開始に向けて、三遠道路の建設が進んでいますが、やはりこれは飯田まで一体的に整備をしていかないと十分な効果が発揮されません。

今後、国の投資的経費はどんどん縮小されていくため、当然その中で選択と集中をしていくこととなり、地域がその重要性をしっかりと説明していくことが求められます。

昨年、新しく政権が交代をしましたので、国土交通省の政務三役にも三遠南信自動車道の必要性をしっかりと説明をしました。三遠南信地域の連携から始まり、全国でも稀に見る県境連携の中で骨格となる道路であることについて、国としても、しっかり認識してもらえたと思っておりますので、厳しい予算の中ですが、何とかこの整備だけは推進されるよう、みなさんと頑張っていきたいと思えます。

パネリスト／浜松商工会議所 御室会頭



平成23年度中に鳳来IC（仮称）から引佐JCT（仮称）の区間が供用開始される予定となっています。

これにより東三河地域と遠州地域が県境を越えて結ばれ、人、物の動きにも今後、新しい変化が出てくるのが期待されます。

ただ、三遠南信道路全線開通には、まだまだ時間を要します。今後、経済情勢や産業構造が激しく変化していく中で、完成までの間に、その変化に追いついていけるかどうか心配されることから、やはり、なるべく早い開通を望みます。

2年前から、三遠南信地域内の八つの信用金

庫で「三遠南信（8信金）しんきんサミット」を開催しています。それぞれの地域の様々な地場産品、特産品を一堂に会して物産展をしていますが、大変な人気で、あっという間に商品が完売する状況です。今年は明日、11月13日に第3回三遠南信しんきんサミットとしんきん物産展が、飯田市公民館で開催されますので、皆様方もご来場いただければと思います。

こうした相互の交流が密接に行われていくことで、新たなニーズの開拓あるいは産業振興が確実に推進されますが、その効果を高めるためには、やはり移動時間を短縮して、利便性を高める交通インフラの整備が必要です。

なお、先ほどからリニア中央新幹線の話が出ていますが、これは我が国にとって久しぶりの大型プロジェクトとなります。将来の展望に想像力を働かせて、開通したらどうなるのか、開通に備えて各地域は今からどんな対応をしなければよいかなど、夢を持ちながら、しっかり検討しなくてはならないと思います。

パネリスト／豊橋市 佐原市長



皆様方からお話がありましたリニア中央新幹線、そして新東名高速道路、三遠南信自動車道ができますと、この地域の東西、そして南北の基軸ができ上がることとなります。

私どもは、常日ごろから、こういった道がどうして必要なのかを考えると、幾つかの切り口を持って考えています。

一つは産業経済を支えている「力の道」、そし

てもう一つは生活や人の命を支える「命の道」、最後に地域の文化、お祭り、人などを支える「絆の道」といった側面を持って道を語り、道の整備を考えていかなければならないと思っています。

私たちのこの地域においては、陸の道が今の道路ですが、併せて海の道、空の道があります。

海の道では、東三河にある三河港や遠州にある御前崎港といった地域の窓口があり、空の道では、遠州にある富士山静岡空港という地域の窓口があります。こういったものをきちんと結びつけ、地域の力を外に向けて発揮していくということも道の大事な姿だと思います。

また、三遠南信自動車道と引佐連絡路の南北軸についても、三ヶ日で止まることなく、国道1号、名豊道路まできちんとつながり、伊良湖岬まで到達して完結するのではないかと思います。

世界に四つしかない大きな自動車港湾の一つの三河港など、地域が持つインフラの力を最大限生かすためにも、この道がつながってこそ初めてその結果が残していけると思います。

私たちは、そのミッシングリンクをなくして、つながり、さらに三つの地域がまたつながって、そして一緒になって力を上げていく。そのために努力していきたいと思っています。

パネリスト／豊橋商工会議所 吉川会頭



三遠南信自動車道や新東名高速道路の整備が進み、三遠南信地域を取り巻く広域的な道路のネットワークが形成されつつありますが、それ

らの道路網と各地域を結び、市民生活や産業活動を支える地域道路の整備も不可欠になっていると考えます。

東三河地域の国道23号バイパスについては、ミクロ的な視点では、三河港臨海部と周辺工業都市をつなぐ道路ですが、三遠南信地域全体で見れば、新東名高速道路や東名高速道路と併せて、環状道路が形づくられるため、豊橋、浜松を中心とした三遠地域の産業循環を大きく変える可能性を秘めた道路ではないかと考えます。

また、渥美半島と鳥羽を結ぶ航路を運航する伊勢湾フェリーですが、愛知、三重両県と田原市、鳥羽市の出資によって航路が存続されましたが、こちらも道路と同様に広域観光を推進する重要なインフラであると認識しています。

一方、三遠南信地域にはJR飯田線という重要な社会インフラがあります。

三遠南信地域を縦断する中山間地域の貴重な住民の足ですが、残念ながら、現在は利用数が減少傾向にあると伺っています。川沿いや山際を走るすぐれた景観を誇る鉄道で、鉄道そのものが観光資源となり得ると感じています。JR東海さんでは「そよ風トレイン117」や「飯田線秘境駅ツアー」などを企画され、営業努力を積み重ねていますので、地域側としても、将来的にはリニア中央新幹線と併せて、ハイスピードな時間とスローな時間の両方を体験できる貴重な地域の宝として、飯田線の活性化も進めていく必要があると考えます。

リニア中央新幹線の飯田駅が設置されると、長野県以北も三遠南信地域の背後圏に加わってきます。三遠南信地域連携ビジョンには、三遠南信地域が日本の中央回廊として役割を持つことが示されていますが、太平洋から日本海までを展望できることは、観光のみならず、産業全体として大いに魅力を感じるどころです。

この広がりを持って三遠南信自動車道、そして、浜松三ヶ日・豊橋道路の整備を進めることが、リニア中央新幹線が開通する17年後を展望

する上でも重要と考えます。

コーディネーター



新東名高速道路が、2014年に引佐から御殿場まで開通予定、それから、リニア中央新幹線が2027年に東京から名古屋まで開通予定ということで、東西の高速交通がしっかりとできてきます。ここにやはり高速移動をしっかり支える南北軸ができることで三遠南信の高速移動時代が明示されてくるという印象を強く持ちました。そのために、三遠南信自動車道を集中的に整備することが非常に重要と感じます。

次に、この道をどう使うかということになりますが、産業面から三遠南信をどう考えるかについて、ご意見をいただきます。

パネリスト／豊橋市 佐原市長

平成22年3月に国から同意をいただいた三遠南信地域基本計画の概要について、ご説明します。

三遠南信地域の県、市、そして経済団体、産業支援機関などの12機関で構成します三遠南信地域産業活性化協議会が主体となりまして、今後、この地域において国際優位性の高まりが期待される5つの広域的な産業クラスタープロジェクトについて、その形成、関連する人材の育成、事業環境整備を推進するというものです。

5つのクラスタープロジェクトですが、まず一つ目が、次世代輸送機器産業クラスタープロジェクトで、ホンダ、ヤマハ、スズキと大変大

きな集積を抱え、知的財産もたくさんある遠州地域が中心となって取り組みます。

二つ目が、航空宇宙産業クラスタープロジェクトで、航空計器等を中心に、精密機器分野を得意とする南信州地域が中心となって取り組みます。

三つ目が、健康医療産業クラスタープロジェクトで、医工連携、健康医療産業が盛んな遠州地域が中心となって取り組みます。

四つ目は、新農業クラスタープロジェクトで、農業算出額が日本一の東三河地域が中心となって取り組みます。

そして五つ目が、光電子産業クラスタープロジェクトで、ノーベル物理学賞につながったカミオカンデの計器が作られた浜松地域で取り組みます。

それぞれの地域は、特色ある産業、そのための知的財産と人的財産を持っている地域ですが、その地域に限らず、三遠南信地域の様々な地域がそれぞれ特色ある技術を持ち寄り、地域が一緒になって新産業集積と基幹産業化を目指します。それぞれの地域がプロジェクトを進める中でますます連携を深め、さらなる国際的優位性を高めていくための計画にしていきたいと思えます。

パネリスト／浜松商工会議所 御室会頭



この三遠南信地域が持つ産業の技術力、あるいはノウハウ、またマンパワーを生かして新たな産業を生み出そうという取り組みが進められていきます。プロジェクトは、電気自動車、電

動バイク、また、鉄道車両などのコア技術に取り組む次世代輸送用機器クラスターや航空宇宙産業、比較的景気変動の波を受けにくい健康医療産業、農業、それから光電子産業、こういったものを形成して新たな付加価値を創造し、当該企業集積の拡大を進めていくもので、いずれのテーマにしても、これまで地道に取り組みが行われ、既に相当なノウハウが蓄積されており、技術的な研究などもかなりのレベルに達しているという認識を持っています。

ただ今後、こうした取り組みからさらに一歩進んで新たな市場を生み出していくことや、あるいはいかかにして企業の直接的な売上に結びつけていくのが求められます。

また、新たな産業創出と併せて考えるべきことは、既存産業の構造転換で、産業革命への対応という認識をしています。

これは、いわゆる脱化石燃料への対応ですが、浜松市において次世代環境車社会実験協議会が今年の10月から電気自動車あるいは電動バイクの走行実験を始めています。

次世代エコカーの普及を視野に入れ、産学官の連携により地域としてどう対応するかを検討していくことから、今後の展開に商工会議所としても大変期待をし、注目をしているところで

す。特に浜松は自動車、オートバイ部品の製造に携わる企業がたいへん集中しており、まだ電気自動車が普及する時代は当分先のこともかもしれませんが、今のうちから先を見て手を打っていないと手遅れになるという危機感を持っています。

ちょっと乱暴な試算ですが、ある統計を見ると、ガソリン車が全くなくなると浜松地域の自動車関連産業の出荷額は半分に減るという試算があります。商工会議所としては、これらを踏まえ、既存の技術をこうした分野にどう生かしていったらいいのか、また次世代エコカーに対応して、新たな研究開発をしてみたらどうかと

いった選択肢を地域企業のみなさんにぜひお示ししていければと思っています。さらに、こうした取り組みをぜひ三遠南信地域全体へ向け、横展開をしていくことができれば、可能性がもっと広がると思います。

パネリスト／豊橋商工会議所 吉川会頭



三遠南信地域は、農業分野においても我が国有数の実績を誇っている地域です。産出される農産物は、野菜、畜産、果樹、花卉、米など多彩で、古くから革新的な農業経営に取り組んでいる地域という特色を持ち、農業を取り巻く産業集積や、関連の製造業、流通業、外食産業、食品加工業なども展開されています。

こうした食と農を扱う業種を連携させながら新たな価値を創造し、地域産業を生み出そうということで、平成19年6月より、東三河の支援機関や民間企業が主体となり、食農産業クラスター推進協議会が発足しました。この協議会においては、地域産品を活用した商品開発、輸出拡大事業など、様々なプロジェクトを展開しています。豊橋商工会議所でも、関連ベンチャー企業の創出を微力ながらお手伝いしています。

また、設立以来の考え方として、三遠南信地域に広域展開する視点を持って取り組んでおり、浜松商工会議所や飯伊地域地場産業振興センターなどの支援機関のほか、遠州や南信州からも意欲ある企業に参画いただいているところです。

三遠南信地域は、輸送機器や精密機械などを

中心として、優秀な技術を持ったものづくり産業の集積地域ですので、ITや品質管理など、製造業の技術やノウハウを生かした農商工連携の取り組みが今以上に進むものと考え、会議所として積極的に、そのお手伝いをしていきます。

植物工場に関する技術開発や地域産品を活用した三遠南信ブランドの創出などには広域的に取り組む時期に入っていると思います。こちらでも会議所として積極的にお手伝いし、地域の活性化に一役買っていきたいと考えます。

コーディネーター

三遠南信地域は、歴史、文化、自然など、多様で魅力ある地域資源があります。つづいて「風土」の分野についてのご発言をいただきます。

パネリスト／飯田市 牧野市長



この三遠南信地域は、たいへん地域資源が豊かなところだと思います。

例えば、南信州地域の観光をけん引する南信州観光公社は、年間2万5千人の方々をこの地域にお迎えして農家民泊を行っています。約500軒もの農家が受入先となり、農業と観光をミックスさせた体験教育旅行やワーキングホリデーといった取り組みをしています。また、一本桜が多いという地域の資源を生かし、春にはそれらの桜をめぐる「桜守の旅」というツアーを実施していますが、年々人気が高まっているほか、JR東海さんと連携した飯田線の秘境駅ツアー、名勝天龍峡の再生プロジェクトも注目を集めて

います。

伝統的な民俗芸能では、12月1日からシーズンとなる遠山郷の霜月祭りが傳承されていますが、遠州や東三河から観光に訪れていただいていることから、三遠南信地域の中で、こうした風土に根差した取り組みが注目されていると感じています。

パネリスト／飯田商工会議所 柴田会頭



三遠南信「街道浪漫」クイズラリーを今年の7月から11月末まで実施しています。

この三遠南信地域の観光スポット30カ所を回って、それぞれ観光スポットに関するクイズにお答えをいただくというラリーですが、かなりたくさんの方が挑戦をされ、たくさんのご応募をいただいています。

こういった地域資源を活用した取り組みを推進することがとても大切だと思います。また、活用することが保全にもつながり、各地域での情報を集約して、それを発信することで連携や支援の可能性がさらに深まっていくと考えます。

コーディネーター

風土に関する人材の育成ということで、コミュニティビジネスなど地域社会を支える雇用創造、また、多様な風土を生かして住む魅力をつくるという点で、流域圏の定住についてご発言いただけます。

パネリスト／豊橋市 佐原市長

三遠南信地域連携ビジョンの基本方針の一つ

に、「自然資源の循環や流域での定住化等の推進を図り、中山間域を活かした新しい地域発展のための流域モデルの形成を目指す」とあります。

東三河地域では、現在、中山間地域における移住・定住促進、そして、中山間地域の活性化に貢献できる取り組みとして「東三河シニアリフレッシュ事業」を実施しています。

この事業は、東三河全8市町村で組織する東三河広域協議会が平成19年度から行っています。都市部の団塊の世代を中心としたシニア層を東三河の中山間地域に呼び込んで、地域体験や職業体験といった滞在型の体験プログラムを通じて心身ともにリフレッシュし、新たな生きがいを感じていただくとともに、第二のふるさとを持っていただく事業で、将来的には、就業に意欲的なシニアを発掘して、二地域居住、移住・定住に結びつけていきたいと考えています。

具体的には、平成19年度と20年度の2カ年で準備をし、21年度に調査モニター事業として3泊4日程度の短期滞在型の地域体験プログラムをまず実施しました。

プログラムでは、奥三河の伝統産業の林業、酪農、炭焼き等において、多彩なスキルや技術を持った名人と時間を過ごし、地域の魅力を堪能しながら、伝統ある産業に触れていただきました。この調査モニターには、愛知県だけでなく、静岡、長野、兵庫から、定員いっぱいの47名にご参加いただきました。

今年は、新たに1週間から1カ月以上の長期滞在型の地域産業支援プログラムを開始します。既に、地域産業支援プログラムにも数名の参加があるなど、こうした取り組みを展開する中で、都市部から中山間地域へと人が集まっています。

しかし、中山間地域での生活に関しては、道路や高度医療体制の整備の遅れや、働く場所が少ないなど、まだまだ多くの課題も抱えていることは事実です。

今後さらにこのような事業を拡大していくためにも、中山間地域のインフラ整備、そして、

雇用創出に向けた取り組みに力を入れていく必要があると強く感じています。

いずれにしても、こうした取り組みを東三河だけでなく、広がりを持って実施していくことが三遠南信地域における中山間地域の活性化につながっていくと考えます。



パネリスト／飯田市 牧野市長

南信州地域においては、全国に先駆けて定住自立圏構想を進めていまして、ちょうど10月28日と29日に定住自立圏の全国市町村サミットがこの飯田で開催されました。この取り組みは全国的にも注目をされているところですが、やはり、この生活圏、経済圏というものを一にする地域が一緒になって、地域医療や産業振興を考えていくことが必要な時代だと思います。

また、この流域圏でも、上流域と下流域が一緒になった形でこの役割分担していくことについて、三遠南信地域連携ビジョンの中で議論し、それを実践していくことが重要になると思います。

防災における一つの例ですが、当地域は、7月に集中豪雨の影響でかなり被災し、大きな傷跡を残しました。このときには、この三遠南信災害時相互応援協定のおかげで、圏域内から応援として、給水車の派遣をいただきました。

やはり、地域で暮らしていくためには、こうした安全・安心をいかに確保していくかが重要で、広域においてもこうした安全・安心の確保について、考えていくことが大切と痛感したと

ころです。

パネリスト／浜松市 鈴木市長



やはり広域連携の中で、大きな威力を発揮するのは、防災の協力だと思います。当市は5月から消防ヘリの運用を開始しましたが、浜松市内だけの運用に留めることなく、広域にカバーをしていくこととしました。年中、山火事や海難事故が起こるわけではないので、日常的には医療を支える点がヘリの活用において最も重要な部分ではないかと考えます。消防ヘリという名前はつけていますが、救急搬送用のヘリとして大いに活用してほしいという思いがあります。

特に、この三遠南信地域は中山間地域がとても広いことから、救急医療、何か起こったときの対応が大きなポイントとなります。

各地域に立派な病院をつくっていくことは、難しい状況ですので、各地域からスピーディーに患者を搬送することが重要となり、そのときにヘリがたいへん役立つと思います。

浜松の聖隷病院では、全国でいち早くドクターヘリを導入していますので、まず一義的にはこのドクターヘリが頑張ってくれていますが、それを補完するものとして、浜松から三遠南信地域で協定を結んだ自治体へ20分で到着するこのヘリが、特に高度医療が必要な場合に大きな威力を発揮すると思います。ぜひ、この三遠南信地域の連携の一つのシンボルになればと思います。

ただし、ヘリが運用されても最終的にはやはり一体的な道路が重要ですから、三遠南信自動

車道の整備がとても大事だと改めて感じます。

コーディネーター

「道」あるいは「技」「風土」「山・住」の政策を、地域主権時代の中でどうやって進めていくかが次の話題です。これはたいへん重要です。県境地域連携のモデルである三遠南信が、これをブレークスルーすることで全国の県境地域がこれに続く可能性があります。県境に接した市町村数は全国の市町村の38%であることから、全国的に注目を浴びているところです。

最初に、経済界からご意見をいただきます。

パネリスト／浜松商工会議所 御室会頭



三遠南信自動車道建設促進期成同盟会が設立されたのは昭和59年ですので、私たちが道路建設に取り組んで26年、四半世紀以上が経過し、このサミットも6巡をして18回目の開催となりました。

この間、三遠南信の交流や連携の取り組みとして、三遠南信地域連携ビジョンの作成とか、あるいはSENAの設置が行われ、体制は着々とつくられてきましたが、ただ、本当に目に見える結果または成果として、地域のみなさんに実感していただけるものは、まだちょっと少ないのではないかと思います。

今年の春に、私は中国へ行ってきましたが、日本と中国で決定的に違う点は、道路関連でもやはり開発のスピードが違うことです。当然、日本と中国では政策決定のプロセスが大きく違

いますので単純に比較することはできませんが、時間を費やすことはコストがどんどん積み重なって、「機会のロス」が発生します。そのため、我々はこれからも政府への働きかけを徹底して積極的にいき、道路整備はもちろん、産業振興についても、三遠南信地域が一丸となって、次々と提案あるいは提言をしていくことが今後の方策としては必要ではないかと強く感じています。



パネリスト／豊橋商工会議所 吉川会頭

三遠南信地域連携ビジョンに掲げた重点プロジェクトについては、インフラの整備、あるいは中山間地域の振興について、みなさんから意見が多かったことから、行政のリーダーシップを期待しながら、商工会議所、産業界としても、連携しながら力強く進めていくことが肝要と考えています。特に、産業分野での連携の実現につなげて新産業を創出するためには、我々民間の力を生かすことも重要ではないかと考えます。

私自身も豊橋信用金庫の理事長をしていますので、手前みそになって恐縮ですが、三河地域の五つの信用金庫が連携をして、豊橋技術科学大学への農業関連寄附講座を4年間開催していますが、ここに来て、農業に従事する方、新しい農業に取り組む方が生まれるなど、成果に結びつく形になっており、今後が期待されています。

明日は、第3回目の三遠南信地域の8つの信用金庫による三遠南信しんきんサミットが開催

されますが、こちらも、先ほどの農工商連携と同様に、産業界から広域的に地域の皆様のお手伝いをしながら連携していくという形ではないかと考えます。こうした取り組み以外にも、三遠南信地域においては多様で優秀な技術力を持った企業が地域の枠組みを越えて連携を進めていることはご承知のとおりですが、こうした取り組みがさらに加速し、有効に機能する体制が今後必要ではないかと考えます。そのためには、行政や経済界だけではなく、大学などのあらゆる主体を巻き込んだ体制づくりを進めていく必要があると考えています。大学との連携については、地域産業に人材を供給するという側面もありますので、若年人口が減少に向かう中において重要な位置づけにあると考えています。

ここ数年、経済、行政など、あらゆる分野で劇的な変化が起きてきていますので、それが地域に与える影響も大きいものがあります。スピード感を持って連携事業を実行できる新しい体制づくりを望みます。

パネリスト／飯田商工会議所 柴田会頭

これからの三遠南信地域の歩み方を考えていく場合に、この地域では、三遠南信の道路、リニア中央新幹線の話題を抜きに考えることはできません。これらの一日も早い開通を願うところですが、これらによる東西の高速移動時代を見据えた地域づくりをしていく必要があると考えます。

最近、当地域に豊橋技術科学大学のラボができましたが、今後も大学との連携を進めていくことがたいへん大事だと思います。また、当地域の特色ある産業である航空産業など、三遠南信地域の特色ある産業を世界に発信して、三遠南信地域を世界にアピールしていくことが大切だと思います。この地域は、三遠南信「街道浪漫」クイズラリーで取り上げられたように、たくさんの観光資源がありますが、それらの観光資源をどう生かしていくかをこの三遠南信地域

全体で考えていくこともたいへん大事だと思います。さらに企業誘致においては、現在の経済状況などを鑑みるとなかなか難しいところですが、行政に一層ご尽力をいただく中で取り組んでいきたいと思えます。

いずれにしても、この三遠南信地域の将来を見据え、南信州地域でも役割をしっかりと果たして、みなさんと協力して地域づくりを進めていきたいと考えます。



コーディネーター

官と民の連携の中で、2年後に新連携組織への移行という計画を踏まえて、行政からご発言いただきます。

パネリスト／豊橋市 佐原市長



18年間、三遠南信サミットを続けてきている中で、行政の連携だけではなく、議会、そして経済界、大学、それからしんきんサミットを開催する信用金庫等金融機関、さらにNPO法人等と様々な機関によって多岐にわたる連携が進展してきたと思えます。その中で、今年度に

一つの成果が出たと思う事業が、三遠南信地域社会雇用創造事業です。SENAは、内閣府が全国から募集した事業実施団体に選ばれ、7億円という多額の交付金を受ける中で、社会的企業分野での雇用創出と人材育成を目指して事業に取り組んでいます。この事業をSENAが実施できるのも、これまで三遠南信地域で積み重ねてきた連携、県境を越えたビジョンの策定、そしてビジョン推進をする取り組みを続けてきたことに対して評価されたものもあり、たいへん価値がある成果だと考えます。

私たちは、2年後の新連携組織への移行を目指して、SENAの具体的な強化策をしっかりと立て、取り組んでいかなければいけないと思います。そうすることで我々の連携のさらなる強化、そして融合に向けたステップを踏み出していくことができると思います。そして、各分野の事業でそれぞれの連携を進めていく中で、その習熟度により国の機関から直接仕事を受けていく、また国の肩代わりもしていき、そんな方向も一つの方向としてあり得るのではないかと考えます。いずれにしても、本日お集まりの皆様方のお力添えがなくては三遠南信地域のさらなる発展はありませんので、ぜひ、皆様方のお力添えをお願いいたします。

パネリスト／飯田市 牧野市長



今回の三遠南信サミットは、テーマを「地域主権時代における県境地域連携モデルの推進」、「融合に向けた自発的な地域づくりの実践」と

して議論が進められていますが、やはり、平成24年度に予定しているSENAの新連携組織への移行については、今からしっかりと議論をしていかなければいけないと思います。この県境地域の連携モデルは、全国でも類まれな取り組みであると思いますが、一方、いわゆる県レベルにおいては、関西地域における関西広域連合の設立、あるいは九州における新しい機構についての考え方が打ち出されている状況の中で、住民に最も近いところで行政を行っている市町村が、県境を越えて一体どのように連携し、その連携を強めていくかを真剣に考えていく必要があると思います。ちなみに、まだ県境を越えた市町村レベルでの広域連合は全国でも例がありません。私はそれも視野に入れながら、これからの議論を進めていくことが一つ有力な選択肢と考えます。そして、そうした考え方をもとに、この産業界や大学、あるいは住民と一緒に、この地域の新しい連携モデルをつくっていくことができればと思います。

コーディネーター

官民が一体となった組織体、それから、国を肩代わりして事業が実施できる組織体、そして、関西は7県の広域連合ができましたが、市町村で新たな地域主権時代の受け皿になる広域連合をつくりあげるなど、順次ご提示をいただきました。最後となりますが、SENA会長の鈴木浜松市長からご意見をいただきます。

パネリスト／浜松市 鈴木市長

地域主権時代の中で、我々がこの広域連携を今後どうしていくかを考えるため、今回、地域主権を強く打ち出しています。現在、国においても地域主権改革が推進をされていますが、この究極の図柄は、基礎自治体を中心とした国ですので、基礎自治体、いわゆる市町村に最大の権限と財源が移譲され、我々が自らの力と自らの意思で地域をつくり、自立することが必要に

なります。つまり、都道府県の枠組みに捉われず、ここをどうやってブレークスルーしていくかが大事だと思います。

いろいろと都道府県の成り立ちを調べてみましたが、この枠組みが一番変化をしていません。江戸時代から明治時代が変わるときに75の府県ができましたが、その後、大久保利通公らが半ば強制的な合併政策を行い、中央集権国家をつくる支障にならないように地方政府を38まで減らしました。

しかし、その後に分離運動が置き、最終的には明治23年に香川県が愛媛県から独立し、47府県ができたと思いますが、それ以来、戦争があっても社会の変化が起こっても、人口が移動しても、47都道府県の枠組みは一切動いていません。

今、国の出先機関の話もいろいろありますが、究極の国の出先機関が都道府県ですから、ここをどうブレークスルーしていくかがとても大事になります。



平成18年に、道州制が実現をした場合には、三遠南信地域の自治体は同じ道州を目指すという決議をしたことは大変に重要なことだったと思います。また、中部圏広域地方計画の中に、この三遠南信地域の位置づけがしっかりされているのは、我々が今後、大きな変化の中で一体となって動いていくことの意味合わせをしたと言ってもいいと思います。そういう意味でも、この県境を越えた広域連携としては特筆すべき連携であり、平成24年度からの新連携組織へどう移行していくのか、さらに、どういう連携を

して、また、どういう組織とするかがたいへん重要になります。ぜひ、みなさんからいろいろなご意見、お知恵をいただきながら、しっかりと議論をしていきたいと思っています。

コーディネーター

前半では、三遠南信地域連携ビジョンのテーマごとの方向性、そして後半では、新連携組織に向けた方向付けについて意見をいただきました。これから官、民、大学等を加えて、新しい連携組織の方向性を議論していく段階に我々はいることを確認できたと思います。

後ほどの分科会で、このトップ対談の中で出ましたご発言を深化いただき、サミット宣言にまとまっていけば、今回のトップ対談の結果がさらに生きることになると思います。

3 「道」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

「道」分科会では、「地域基盤整備による地域活性化への期待」をテーマに、「平成 22 年 7 月豪雨が住民生活に与えた影響について」、「リニア中央新幹線飯田駅を見据えた地域づくり」、「三遠南信地域の物流拠点港湾」の 3 つの報告を踏まえて意見交換がなされた。

三遠南信地域内での情報共有により、三遠南信自動車道をはじめ、浜松三ヶ日・豊橋道路や名豊道路、港湾へのアクセス道路など、この地域に不可欠なインフラ整備が地域全体を捉える中で有機的につながるように、国や国会議員へ働きかけをしていくことが重要といった意見が出された。

コーディネーター	飯田市	市長	牧野 光朗
アドバイザー	飯田商工会議所	会頭	柴田 忠昭
報告者	国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所	所長	盛谷 明弘
	飯田市企画部	参事	木下 悦夫
	豊橋市	副市長	野崎 智文
行政	豊川市	市長	山脇 実
	東栄町	町長	森田 昭夫
	阿南町	町長	佐々木暢生
	下條村	村長	伊藤 喜平
	喬木村	村長	大平 利次
議会	浜松市議会	副議長	黒田 豊
	豊橋市議会	副議長	岩瀬 篤
	飯田市議会	議長	中島武津雄
経済界	天竜商工会	会長	平賀丈太郎
	豊橋商工会議所	会頭	吉川 一弘
	渥美商工会	会長	渡会 一昭
	新城市商工会	会長	本多 克弘
	駒ヶ根商工会議所	会頭	山下 善廣
住民	姫街道連絡協議会 姫街道未来塾	会長	上嶋 裕志
	特定非営利活動法人てほへ	理事長	伊藤 静男

(敬称略)

■はじめに

事務局

「道」分科会を開会いたします。

この分科会の運営ですが、コーディネーターを牧野飯田市長に、アドバイザーを飯田商工会議所柴田会頭をお願いして進めさせていただきます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長



本日の予定ですが、最初に 3 名の方から報告

をいただきます。まず、国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所の盛谷明弘所長から、「平成22年7月の豪雨が住民生活に与えた影響について」ご報告をいただきます。続いて、飯田市企画部の木下悦夫参事から「リニア中央新幹線飯田駅を見据えた地域づくり」についての報告をいただきます。最後に、豊橋市の野崎智文副市長から、「三遠南信地域の物流拠点港湾について」ご報告をいただきます。

いずれも、この「道」分科会の議論のベースとなる報告になると思います。三遠南信地域の一体的な地域づくりをどのように進めていくか、この報告を聞きながら考えていただければと思います。

なお、この「道」分科会においては、議会の皆様、経済界の皆様、そして住民、行政、さまざまな立場の方にご議論をいただくこととなります。これまで積み重ねてきました「道」分科会の議論が継続され、後戻りしないように、最初に前回出されたご意見について、もう一度ここで確認をしておきたいと思います。それでは、事務局からこれまでの議論のまとめをご紹介します。



事務局

三遠南信自動車道の実現、そしてリニア中央新幹線の早期建設と飯田駅設置を目指していく中で、重点プロジェクトの実現に向けては、国や国会議員に理解してもらうために現場を見てもらう機会を設けていくべきである、ということが1点です。

次に、三遠南信自動車道整備においては、国直轄となっていない現道活用区間について課題がある。

三つ目には、蒲郡から浜松につながる名豊道路も三河港などを活用した物流や人の交流を促し、地域の活性化につながり重要。四つ目としたしまして、この地域のポテンシャルを具体的なデータを示しアピールすべき。

また、生活道路がきちんと残されていくためにも幹線道路の整備が重要。

以上4点でございます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

それでは早速、報告をいただきます。

まず、国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所長盛谷明弘様、よろしくお願ひします。

■報告

「平成22年7月豪雨が住民生活に与えた影響について」

国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所 盛谷明弘所長

ただいまご紹介をいただきました、国土交通省浜松河川国道事務所、事務所長の盛谷でございます。平素から、この場にお集まりの皆様方には国土交通行政、特に三遠南信自動車道の整備促進につきましてご理解とご協力をいただいております。この場を借りまして御礼を申し上げます。それでは、「平成22年7月豪雨が住民生活に与えた影響について」と題しまして、最初は「豪雨の影響」について、それから後半では「三遠南信自動車道の整備状況」についてご報告をさせていただきます。

トップ対談でもございましたとおり、7月13日から15日にかけて、この地域でも局地的な豪雨による大きな被害が発生しております。国土交通省では、この地域の自治体職員、事業者、また救急医療の関係者に対して聞き取り調査を行いました。

被災状況については、土砂崩れにより22カ所で通行止めが発生し、応急復旧には3億円を要する見込みということです。また、集落の孤立化も発生し、地域全体で約1,200世帯、2,400人が影響を受けたという回答をいただきました。飯田市、天龍村、泰阜村と愛知県の豊根村で孤立化したと伺っていますが、当該地域の人口が約11万人で、その2%に当たる方が孤立化の影響を受けたということです。今回の豪雨の経験、また過去の経験を踏まえて、「大雨による通行止めによって通勤や日常生活、事業に影響を受けたことがあったか」を伺ったところ、約6割の方が7月の豪雨、あるいは過去に影響を受けたことがあるという回答でした。地域別には、南信州では約7割、遠州では約6割、三河地方では約4割の方が影響を受けたことがあるということです。



影響の事例としては、通勤の経路が断られたために迂回を余儀なくされ、通常45分の所要時間が100分かかったという事例。また、7月の豪雨においては、学校が休校、あるいは始業時間の変更を余儀なくされた事例。そして、遠山郷では生徒さん3名が帰宅困難になったという事例がありました。

さらに、それぞれの地域で「大雨による土砂崩れや通行止めの発生に対する不安があるか」を質問したところ、69%の方が不安に思うと回答いただきました。救急搬送についての不安については、約4割の方が「不安に思う」と回答しています。また消防や医療関係機関の方からの回答にあっては、すべての方が「不安である」

と回答しています。それから、「狭い道路を危険だと思ったことがあるか」については、約4割の方が「不安である」と回答いただきました。

続いて、長野県内においては飯田国道事務所、愛知県と静岡県内においては浜松河川国道事務所が整備を進めています三遠南信自動車道の事業の現状について、説明させていただきます。

三遠南信自動車道の国直轄整備事業は、飯喬道路の1工区から3工区と青崩峠道路を飯田国道事務所が、佐久間道路と三遠道路の二区間を浜松河川国道事務所が実施しており、この整備によって、浜松市から遠山郷までの所要時間を90分短縮するなどの効果が期待されています。

長野県側ですが、平成20年4月13日に供用開始した飯喬道路第1工区の飯田山本ICから天龍峡IC間では、地域の方やこの天龍峡を訪れる方に活用いただき、観光客が増加傾向を示すなどの効果が現れています。飯喬道路の第2工区では、千代IC（仮称）をはじめ、工事用道路、橋梁の工事等、鋭意施工を進めています。また、それぞれの道路や構造物の設計についても完了し、今後の予算の状況に合わせ、工事の発注を実施したいと考えています。同じく飯喬道路の第3工区ですが、今後、地元の皆様への説明に入っていく予定です。

次に青崩峠道路ですが、長野県、静岡県の両県の条例に基づく環境影響評価の手続きを平成21年度に終えることができました。現在、測量、地質調査、設計等を実施しています。続いて愛知県、静岡県内に入り、佐久間道路の工事の状況ですが、佐久間道路においては、国道151号とのタッチの東栄IC（仮称）での連絡路や土工などの工事を進めています。また、途中の浦川地区でもボックスカルバート（鉄筋コンクリートで作られた四角い箱型のトンネルのようなコンクリート製品で通路、水路などに利用）の工事を実施しています。

次に、三遠道路の事業の状況ですが、東栄IC（仮称）から引佐JCT（仮称）の間のうち、

鳳来IC（仮称）から新東名とタッチする引佐JCT（仮称）までの間の13.9キロメートルについて、平成23年度の供用を目指し、現在、全面的に工事を実施しています。

以上、長野県内あるいは愛知県内、静岡県内において三遠南信自動車道の整備を進めています。引き続き、みなさまのご支援とご協力をお願いいたしまして、報告とさせていただきます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

ただいま報告にありましたように、豪雨が与えた影響について知ることで、災害に強い三遠南信自動車道の重要性が確認できたと思います。

それでは、報告を続けさせていただきます。続きまして、「リニア中央新幹線飯田駅を見据えた地域づくり」について、リニア中央新幹線の現状を交えて、飯田市企画部の木下悦夫参事から報告いただきます。

■報告

「リニア中央新幹線飯田駅を見据えた地域づくり」

飯田市 木下企画部参事



飯田市のリニア推進担当をしています木下と申します。

先ほどのトップ対談の中でも、リニア中央新幹線の話に随分触れられていましたが、改めて現状と今後の地域づくりについてご説明いたします。

リニア中央新幹線は、東京－大阪間を時速500kmで走行するリニアモーターカーによって結ぶ新たな新幹線で、全国新幹線鉄道整備法に基づいて諸手続が進められています。

現在、国土交通省の交通政策審議会で議論がされていますが、平成22年10月に審議会の中でルートに関するデータが公表されたことで、NHKをはじめ、全国紙でも、ルートは南アルプスルートに決定という報道がされました。これは、需要予測だとか費用対効果、それから環境調査についてのデータすべてにおいて、南アルプスルートの優位性が示されたことを受けたものです。

しかし、現在ルートについては審議中で、平成22年12月に中間報告がされる予定です。

交通政策審議会では、リニア中央新幹線の必要性和意義について、東京－大阪間を約60分で結ぶことの経済効果、それから新技術の開発、日本の閉塞状態の打破、災害の代替交通網、東海道新幹線の大規模改修への影響の低減、基幹鉄道のリダンダンシー、二重系化などが挙げられていますが、最大の効果は、時間の短縮です。

現在、大阪－東京間の所要時間は150分ですが、リニア中央新幹線ができれば、この間の所要時間は約60分になります。この時間の短縮によって、7,000万人のリニア都市圏ができ、その経済効果は16.8兆円と言われていることから、地域として、このリニア都市圏をどう生かすかが問われます。

リニア中央新幹線は、昭和48年に計画決定されました。一時、計画が幻となりそうな時期がありました。平成19年にJR東海が全額自己負担での実現を表明したことで、現実的になってきました。現在、交通政策審議会でこの営業主体、建設主体、ルートも含めて、整備計画を検討していますが、完成は今から17年後の2027年の予定です。

この地域では、期成同盟会が発足して37年になります。平成22年5月には総決起大会を開催す

るなど、地域づくりの議論を進めています。また、リニア中央新幹線が現実味を帯びてきたことから、リニア中央新幹線開通後の社会経済の影響を調査し、プラス面の効果を最大限に生かしてマイナス面の影響を最小限に抑えるまちづくりの必要性を確認する中で、その準備として、南信州広域連合の枠組みでリニア将来構想の検討会議を始めました。その中の有識者会議では、12人の有識者のみなさんに、30年後の社会がどうなっているか、どんなリニアインパクトがあるか、またこれから何をしたいのかなどの提案をいただき、4つのワーキンググループにおいて検討を重ね、今後、南信州広域連合の広域計画へ反映させる予定です。

当地域では、リニア中央新幹線飯田駅の設置により、三遠南信地域の北の玄関口として、また、長野県の南の玄関口としての役割を果たすとともに、「グローバル化による小さな世界都市」、「地域ブランド確立による高付加価値都市圏」を目指していきます。また、多様な主体により自らが、「守るべきもの、備えるべきもの」として、日本の原風景を始めとした地域のよさを知り、地域の誇りに基づく地域づくりを目指します。なお、リニア中央新幹線を生かした地域振興のためには、リニア中央新幹線飯田駅の設置にあたり、既存のインフラを活用すべきで、高速道路とのアクセス、既存鉄道との接続、まちづくりの観点などから、JR飯田線飯田駅併設が好ましいと考えます。

一方で、リニア中央新幹線の開業による影響としては、東海道新幹線「ひかり」の役割をリニア中央新幹線が担うこととなり、東海道新幹線「ひかり」の停車数の増加、「ひかり」の利便性の向上による移動時間の短縮が見込まれます。今後、これらを縦に結ぶ三遠南信自動車道の全線開通など、圏域全体の活性化にとって大きな役割を担う三遠南信圏域の東西、南北の連携軸の形成が強く望まれます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

リニア中央新幹線の開通により、三大都市圏との距離が大幅に短縮されることが確認できました。

続いて、「三遠南信の物流拠点港湾」について、豊橋市の野崎智文副市長からご報告いただきます。

■報告

「三遠南信地域の物流拠点港湾」

豊橋市 野崎副市長



ご紹介いただきました豊橋市の副市長の野崎と申します。豊橋市として、また三河港振興会の事務局として発表させていただきます。

この三遠南信地域は形状的に見ると、伊良湖岬と御前崎で物理的に支えているような形状に見えます。機能的に見ると、港という側面で、三河港と御前崎港の両端の港で支えているということも言えると思います。今回、これらの港が、地域にとっての港、ゲートウェイというだけではなく、国にとってのゲートウェイということも強調しながらお話をしたいと思います。

今の政府になって特に強調されて進められている政策にコンテナ戦略、バルク戦略があります。これらは、現時点で法的整備はされていませんが、地方港湾、重要港湾、特定重要港湾、スーパー中枢港湾といった港湾区分は法的な整備がされ、階層構造の中でより重点化されています。三河港と御前崎港は、全国で126港しかない重要港湾に選定され、さらに、その重要港湾の中で特定重要港湾23港を除く103港の中から、

重点港湾43港にも選定されています。今後、新規の直轄事業の着手は重点港湾に限定されることから、厳しい絞込みに残ったと言えます。

ここからは、箇所に様々な特徴を持つ三河港の紹介をさせていただきますが、蒲郡地区は、特に三菱自動車岡崎方面から運び込まれて積み出しがされています。また、ラグーナ蒲郡というプールを中心にした大規模なレジャーランドやマリナー等もあります。それから御津地区は、東名高速道路へ比較的容易にアクセスできるところで、良好な工業地域になっています。神野地区は三河港の物流拠点の一つで、コンテナターミナルがあります。明海地区は、フォルクスワーゲンジャパン(株)の本社があるほか、海外の輸入車両が多く入港しています。そして、三河港の心臓部の一つの田原地区は、トヨタ「レクサス」を中心に生産する工場があり、その積み出し拠点となっています。また、東京製鐵の田原工場が大規模に操業を開始しています。

三河港の全体の港勢については、取扱貨物量が100の重要港湾の中で11位、3,110万トン。貿易額は、自動車を取り扱うことから1位。コンテナ取扱数でも8位という状況で、23ある特定重要港湾を含めても遜色ありません。特に自動車を取り出すと、輸出では国内で第1位の名古屋に次いで、台数、輸出額とも第2位です。輸入については、17年連続、国内第1位の地位を保っており、世界的に見ても第5位の実績を誇っています。

また、平成10年にコンテナターミナルの供用を開始しており、それ以降、日韓定期航路、日中韓、日中といった航路を次々に開設しています。平成20年2月には、2基目のコンテナターミナルを据えつけ、供用を開始しています。同年4月にはコンテナターミナル会社を株式会社として立ち上げ、港湾の管理者の愛知県から指定管理を受けています。コンテナの取扱量については、経済成長力に伴って、平成19年までは4万TEU（20フィートコンテナ1個分が1T

EU）に迫る勢いでしたが、経済情勢が急激に落ち込んだため、21年は2万9,761TEUとなっています。ただ、最新データの22年は、おおむね19年の最大値かそれを超える見込みです。

コンテナの航路については、基本的に中韓の巨大な港との間で定期的な外航航路を開設しています。港にとって外国貿易の航路開設はたいへん重要で、管理者の愛知県を中心に、自治体や港を支える振興会も協力する中で、新規輸出入コンテナへの助成や入港料、岸壁使用料を一定期間の助成をするなど、誘致に向けたインセンティブ制度を実施し、スタートラインのハードルを下げる取り組みをしています。

ただ、このような運用面のサービスなどは、本日のテーマにもある道路整備とセットでなければ十分に機能しません。

港は、人間に例えるなら、酸素を取り入れ、二酸化炭素を出す肺に当たるといいます。しかし、その肺がしっかり機能しても、そこから体の隅々に血管が行き渡っていなければ、酸素や二酸化炭素が流れません。

特に動脈や静脈は重要で、それらにあたる三遠南信自動車道などの基幹道路が三河港につながってこない、ゲートウェイとの距離や時間の短縮などの効果も発揮されません。今日の全体トップ対談の中でもありましたが、やはり港までの道路整備を早期に進めることがたいへん重要です。また同時に、東三河地域内においても、線形の悪い路線が多いことから、東三河縦貫の縦軸や工業が集積している渥美半島の幹線道路の整備も必要と考えます。

続いて、効果がたいへん発揮された道路整備の事例を紹介します。名豊道路、正確には自動車専用道路の国道23号バイパスですが、川を渡る際のたった1本の信号機のために、たいへんな渋滞が発生していた箇所がありましたが、平成22年10月下旬から11月上旬にかけて、やっと直接高架でつながり、驚くほど円滑に流れるようになりました。ミッシングリンクとよく言わ

れますが、たった1ヶ所が繋がらないだけで、せっかく造ったものの効果が現れず、つないだことで、初めて大きな効果が出たという事例です。

そのような中で、今後も新規コンテナ航路の誘致や自動車戦略港湾づくりに向けて取り組んでいきますが、日本で1番という地位にあぐらをかくことなく、地域の発展はもちろん、国の経済発展を支えていきたいと考えます。国に帰属している自治体という立場ではなくて、国を構成している自治体としてやるべきことは最善を尽くして行うとともに、国や各県の協力の下、今後とも三河港が各地域の企業のお役に立てるよう、地域ともに成長することをお誓いしながら報告を終わります。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

この地域における物流拠点の港湾機能の重要性、三河港の重要性について確認ができました。

それでは、これから今日ご参加いただいている皆様からご意見をいただきます。まず、三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会の活動状況をお聞きます。また、併せて、三遠南信自動車道の東名高速道路から南側への延伸により、三遠南信自動車道の効果を一層高める道路として計画されている浜松三ヶ日・豊橋道路の建設促進について、飯田市議会の中島議長からご報告いただきます。



■議論・意見交換

飯田市議会 中島議長

それでは、報告をさせていただきます。

実は、午前中に浜松市や豊橋市の議長さんをはじめ、三遠南信地域の各市町村の議長さんにお集まりいただき、これまで浜松、豊橋、飯田市の議長とそれ以外の市町村議長のオブザーバー参加により開催してきた議長協議会を改め、本日より、東三河、遠州及び南信州地域の市町村議会の議員で構成する三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会が発足をいたしました。

これにより、国、県に対して働きかけていくこととなりますが、先ほどのトップ対談でも触れられたように、三遠南信自動車道から浜松三ヶ日・豊橋道路を一体的に整備することで、東海道の東西物流軸と三遠南信の南北軸を一体化することができることから、やはり議会としてもこの縦軸、横軸を生かしながら、この中山間地を含めた圏域をどうにか盛り上げていこうと考えています。

私見ですが、トップ対談において、空の道、あるいは海の道、川の道、また鉄道の話がありましたが、命をつなぐ道ということでは、地域の縦軸となる三遠南信自動車道以外に、もう一つの縦軸として国道151号もあります。将来的に、この道路の整備も地域活性化にとってたいへん重要と考えます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

このほかにも、三遠南信自動車道早期開通期成同盟会など、様々な団体の皆様が積極的に活動されています。それぞれの立場から、三遠南信自動車道をはじめ、連携する各道路等について、自分たちの地域ではその実現に向けて何を行い、どういう努力をしているか、あるいはどのような提言活動をしていくべきか、そういった視点からご発言をいただきたいと思います。

浜松市議会 黒田副議長

浜松市議会副議長の黒田と申します。実は、今朝6時15分に浜松を出発して車で飯田へ向かったところ、東名高速道路の事故渋滞に巻き込まれ、9時半頃に到着する予定が11時になってしまいました。改めまして、三遠南信自動車道の重要性を実感しました。

浜松市域では現道活用区間として国道152号、473号の整備を行います。経費的、また技術的に大きな課題を抱えており、改めて国、県の協力を求めている状況です。本市地域のみならず、中山間地域の命を守る道路ということからも、引き続き建設促進に向けて多方面から要望活動等を継続していく必要があると強く感じます。

そこで、昨年サミットの発言要旨に国会議員の方に現地視察の機会を設けるべきという意見が出ていましたが、ぜひ実現をさせて、お越しいただいた国会議員と公開による討論の場を設けてみてはどうかと考えます。国会議員のみならずには、飯田市長、豊橋市長、そして本市の浜松市長などとの討論により、三遠南信自動車道の必要性や重要性をしっかりと認識していただいた上で、国会の予算委員会等でしっかりと予算の確保をしていただきたいと思います。

また、リニア中央新幹線は、2027年に名古屋まで開業するという一つのゴールが見えているように、三遠南信自動車道についても完成がいつになるのか明確に示していただくことが必要ではないかと思えます。

これらのことから、サミットの次期開催日は、国会議員が参加しやすい日曜日とか祭日に開催していただきたいということが1点。また、もう1点として、今ようやく議員による横の連携が本格的になってきましたが、これからは国会議員と地方議員との縦の連携もしっかりと構築しながら、地方議員から国会議員へ現状を訴え、早期開通を目指していくことも必要です。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

これから国会議員との縦の連携も強化していくというご提言をいただきました。

それでは、そのほかにいかがでしょうか。

豊橋市議会 岩瀬副議長

豊橋市議会副議長の岩瀬でございます。

浜松三ヶ日・豊橋道路については、将来的に新たな連携軸となる道路として地元の期待が非常に大きく、浜松、湖西、田原、豊橋の4市の行政、また商工会、そして農協が一体となって期成同盟会を設置し、建設促進に向けた活動を行っています。

平成20年度からは、愛知県と静岡県、浜松市の2県1市が主体となり、三遠地域連携支援調査として、三遠地域における県境を越えた連携交流の実態把握や将来動向の推計により、地域整備上の課題を抽出して整理し、新たな連携軸の提案を行うための調査をしています。関係する行政や三遠地域の企業団体へのアンケート調査によりまとめた現況調査や課題整理の中間報告会を今月末の11月30日に、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進期成同盟会の主催で豊橋市役所講堂において開催します。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

現状の活動について、ご報告をいただきました。そのほか、この三遠南信自動車道の早期開通に向けた取り組みについて、ご発言をお願いします。

豊川市 山脇市長

豊川市長の山脇でございます。道に関する活動状況について、お話をさせていただきます。

豊川市は、平成22年2月に宝飯郡小坂井町と合併し、人口18万人の大きな市となりました。これで宝飯郡の4町すべてと合併し、北は本宮山という大きな山を抱え、南には三河湾を望む、海、山、川の均衡が取れた都市になりました。

この地域は東日本、西日本の中間に位置していることもあり、国道1号線、東名高速道路、今建設中の新東名、それから名豊道路といった東西軸は比較的整備が進んでいますが、やはり南北軸が非常に弱いと感じます。まさに飯田から浜松、豊橋を結ぶ三遠南信自動車道を早く整備しないと、三遠南信の一体化がなかなかできないと考えます。また、豊川市では、国道151号一宮バイパスの整備促進を国へお願いしていますが、今年度は予算が全くつかないという大変厳しい状況で、南北軸の整備の遅れにより、この地域の一体感が損なわれることを非常に危惧しています。一刻も早く南北軸をきちんと整備して、この三遠南信の一体化に向けて、みなさんとともに頑張りたいと思います。

今日は、先ほどお話があったように、東名高速道路が事故で大渋滞とお聞きしたので、私は一般道の国道151号、257号、153号を通過して飯田へ来ましたが、その道中、この地域のすばらしい紅葉を目にしました。このすばらしい観光資源を使わない手はないと感じたところで、地域の自然を大切にしながら観光客を取り込むために、高速道路はもちろん、地方道路の整備も重要と感じました。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

中山間地の自然のすばらしさというようなお話も出ましたが、関連づけていかがでしょうか。

渥美商工会 渡会会長

愛知県が一番南、渥美半島の先端にあります渥美商工会の会長の渡会でございます。

当地域は、南北軸の必要性を強く感じている典型的な地域で、高速道路に乗るまでに最低1時間半、通勤時間帯にあっては2時間から2時間20分ほどの時間を要します。また、渥美半島の主要道路の国道は、歩道がないところが多いなど、インフラ整備が進んでいないことから、ウォーキング大会なども開催できず、地域のす

ばらしい観光資源が生かし切れない状況があります。浜松三ヶ日・豊橋道路や伊勢湾口道路といった道路整備を田原市内まで、できるだけ早く進めていただきたいという思いでいっぱいです。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

渥美半島は、とてもきれいなところですが、道路の整備がまだこれからだというお話をいただきました。NPO法人の皆様、いかがですか。

NPO法人てほへ 伊藤理事長

東栄町からまいりましたNPO法人てほへの伊藤と申します。和太鼓集団「志多ら」が東栄町を拠点に活動して20年が経過します。長年、地元のみなさんに協力いただいた感謝と、今後一緒に地域おこしに取り組みたいという思いから、今回、「志多ら友の会てほへ」を「NPO法人てほへ」に移行しました。

当地域では、三遠南信自動車道の整備に対して、たいへん大きな期待を寄せています。道路が整備されることで、確実に移動が便利になり、当地域を往来する車両が増加します。単なる通過点になってしまう可能性や人の流出、犯罪の増加などは心配されますが、多くのみなさんが観光拠点として東栄町を訪れ、泊まっていたくことを期待し、観光客といっしょに楽しめるような交流会を企画していきたいと考えています。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

続けて、姫街道連絡協議会の上嶋さん、お願いします。

姫街道連絡協議会 上嶋会長

磐田の見附から、豊川の御油まで約60キロメートルを結ぶ姫街道の連絡協議会の上嶋と申します。

姫街道は、奈良時代ぐらいから二見の道と言

われ、昔から国府と国府を結ぶ道として使われていた歴史があります。遠州と東三河でも、古くから文化交流があったと考えられますが、かつて静岡県と愛知県境の本坂の峠が街道の難所であったように、最近まで浜松側と、豊川・豊橋側では、同じ姫街道に関わる住民団体でもお互いのことをあまり知らない状況でした。

そんな中、姫街道を複数の点から一つの線に結ぼうということで、磐田から豊川までそれぞれの地域で活動している13団体のみなさんに声を掛けて、連絡協議会を立ち上げたわけですが、地域のいろいろな情報を掲載したかわら版を年に4回ほど発行するほか、姫街道検定を実施しており、姫街道という三遠南信地域の横軸のつながりで住民の連携が取れてきたと感じています。



三遠南信自動車道を考えたときに、今、それぞれの地域でいろいろな交流活動がされていますが、全体でこれから三遠南信地域をどうしていくかについては、十分に考えられていません。三遠南信自動車道が完成したときに、道をどのように生かし、どのように地域を売り出していくかを経済界や住民団体でも考え、一つの地域としてアピールしていけばいいかなと感じています。

私たちの活動は、この歴史ある道を次の世代にどう残していくかというのが大きなテーマです。三遠南信自動車道についても新しくできる道として、これからどう生かして、発展させていくかを提案できればと思います。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

やはり、全体でこの道をどう生かしていくかということ、これを三遠南信圏域全体でやはり議論していくことが重要であるというお話をいただきました。

そのほか、三遠南信自動車道関係で、ご意見をお願いいたします。

天竜商工会 平賀会長

天竜商工会長および西遠地区商工会連絡協議会長の平賀と申します。

三遠南信自動車道は、平成23年度に引佐 J C T（仮称）から鳳来 I C（仮称）までが開通する予定と聞いています。また、東栄町から佐久間までのトンネル等の約6キロメートルは、ほとんど用地買収は済んでいると思います。これらの区間は国直轄事業となっていて、難しい問題はないと思われませんが、佐久間 I C（仮称）から水窪北 I C（仮称）までは、現道活用区間のため指定都市の浜松市が整備することになっていますが、これは非常に大変な工事になると考えられます。

新しいトンネルや道路が整備されることで、佐久間から水窪までの現道の交通量はかなり増加しますが、現状の道路は、急なカーブや道幅が狭い場所が多いため、早期に拡幅等が必要です。整備の時間や予算面から考慮して、やはりこの区間は国の直轄事業により早期に事業化していただけるよう、市長さんたちに粘り強く要望していただきたいと思います。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

今の課題は、非常に大きな課題として捉えています。行政のみならず、やはり地域を挙げて、議会あるいは経済界、住民のみなさんと一緒になって粘り強く運動していくことがとても重要だと思います。

何より、来年度の予算についてもまだ全く予断を許さない状況ですので、しっかり提言活動

をしていきたいと思いをします。

浜松市議会 黒田副議長

今の件で少し補足をさせていただきます。道路の整備費用については、浜松市が全額負担するわけではありません。8キロメートルのトンネル区間の工事費は約360億円で、その3分の1を浜松市が負担します。国道152号の現道活用区間の工事費は約100億円ですが、交付金等があることから、浜松市がその半分の約50億円を負担し、460億円の工事費のうち170億円を浜松市が負担しなければならない状況のため、国の直轄事業化を望んでいます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

それでは次に、リニア中央新幹線について議論をしたいと思いをします。



下條村 伊藤村長

リニア中央新幹線の話題になりましたが、下條村における道路整備効果も併せて、お話させていただきます。

下條村は、この飯田市から国道151号を17キロメートルほど南下したところにあります。平成20年4月に三遠南信自動車道の飯田山本ICから天龍峡ICまでの7.2キロメートルが供用開始になりましたが、この天龍峡ICがちょうど村境に位置していることから、村もたいへん活気づきました。

この供用開始により、誘致していた企業の進

出が決まり、従業員60人の工場ができたことで、人口4,200人の村に60人の雇用が創出されました。また、地域振興の拠点とすべく、国道151号沿いに道の駅信濃路下條「そばの城」を運営して12～13年になりますが、低調が続いていた売り上げが、天龍峡ICの活用で大型バスが利用しやすくなったことから、このところへ来て売り上げが伸びています。まさに道は、我々の地域にとっては本当に命の綱、活性化のもとです。

リニア中央新幹線においては、直線ルートが有力という状況ですが、完成すれば東京から南信州まで30分ほどで移動できるようになり、南信州がちょうど八王子圏内に入る距離感となります。完成は今から17年後の予定ですが、ぜひみなさんにもご協力いただいて、とにかく早くつくって早く運行をして、地域が大いに活性化されることを期待します。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

リニア中央新幹線について、議会のみなさんはいかがですか。

浜松市議会 黒田副議長

私は、浜松市の南区という遠州灘に一番近いところ、ある意味リニア中央新幹線飯田駅から一番遠いところに住んでいますが、地元では、リニア中央新幹線は本当に夢の世界というか、全く自分たちとは関係がないという雰囲気、話題にならない状況です。

しかし、リニア中央新幹線が開通することで、東海道新幹線の浜松駅の停車本数が、現在の1時間に「こだま」が2本、「ひかり」が1本という状況から、その本数が増加する見込みとなっているようなので、住民にそういった情報をしっかり伝えて共通認識を持ち、三遠南信地域で機運を高めながら、私たち浜松市民も含めて希望を持って取り組んでいくことが重要だと感じました。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

中島議長さん、いかがですか。

飯田市議会 中島議長

飯田市と下伊那郡のすべての市町村で組織する南信州広域連合に上伊那地域も含めて、いよいよ現実のものとなるリニア中央新幹線を生かした地域づくりを進めていきたいと思えます。

守るべきものと備えるもの、そして育てるものを認識し、水や日本の原風景などを大事に育てながら守っていかなければなりません。こういった時代だからこそ、この地域の自治の仕組みが日本や世界のモデルになるよう、地域のみなさんと話し合いながら地域をつくっていく作業を始めていきたいと感じます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

そのほかにいかがでしょうか。

新城市商工会 本多会長

空気がきれいで湿度が少ない南信州は、リニア中央新幹線が開業すれば、東京と大阪の真ん中に位置することもあって、多分、地価が高騰するかもしれませんが、いろいろな企業、特に精密機械関連企業からかなり注目されると思えます。

また、要望活動については、しっかり国会議員にお願いする中で、どうやって実現させるかということをおなさんと考えていくことが大切と思えます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

物流拠点港湾の話も少しさせていただきたいと思えます。三河港を抱える豊橋商工会議所の吉川会頭からお願いします。

豊橋商工会議所 吉川会頭

豊橋商工会議所会頭の吉川です。道路と港は二つとも重要であるという認識で、改めて申し

上げます。



ここ数年の港湾行政が、選択と集中という流れになっていることは、ご承知のとおりです。もともと港湾の世界は、経済原則にかなうかどうかという競争の中で動いているのが現実です。その中で、三河港は重点港湾に指定されましたが、今後もサービスを向上させ、利用を伸ばしていかなければ、さらなる飛躍ができないと考えています。そのため、地元の官民による港湾振興団体の三河港振興会を組織しており、複数の地元自治体や豊橋商工会議所からも専従の職員を派遣して事務局体制を整え、ポートセールス事業や要望活動等を積極的に展開しています。港湾は、背後圏の荷主にどれだけ利用メリットをお届けできるかがポイントですので、港湾施設の整備拡充はもちろん、さらなるアクセス道路の整備促進、あるいはインセンティブ制度の充実など、取り組む課題は少なくないと考えています。

三遠南信という枠組みで捉えれば、地域内にある三河港と御前崎港の二つの港は隣り合わせということですので、周辺の荷主の立場に立ち、港湾施設やアクセス道路等に関する要望や地域外へポートセールス等の分野で連携していけば、相乗効果が期待できると考えます。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

そのほか、ご発言をお願いします。

豊川市 山脇市長

今日からAPECが始まりました。菅総理が先日、環太平洋戦略的経済連携協定、TPPに参加したいと表明したことで、日本は、国を二分するような議論になっていますが、この三遠南信地域はどういう対応をするか、議論したらどうかと考えます。

やはりこの地域は、ものづくり、そして農業もたいへん盛んなところですので、非常に大きな影響があると思います。今後の課題ですので、ぜひこの三遠南信地域で議論をしていただけたらと思います。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

恐らく、いろいろな議論が百出しそうな話ですが、そういったご提言として受けとめさせていただきます。いろいろな意見をいただきましたが、アドバイザーの柴田会頭から、コメントをいただきます。

アドバイザー／飯田商工会議所 柴田会頭

1時間半にわたりまして、たいへん興味のあるご意見をお聞きた感想を一言、お話したいと思います。

この230万圏域をこれから5年、10年、あるいはさらにその先に向かって発展をさせていくためには、「道」におけるインフラ整備がとても重要です。分科会に入る前の全体会では、「道」というと三遠南信自動車道やリニア中央新幹線に注目していましたが、広域的な視点で見ると、地域には横軸と縦軸の道があり、その道の先には港もあるということがよくわかりました。

しかし、現在の日本の経済状況の中、その整備はなかなか思うように進んでいかないというジレンマも、みなさんのご発言から感じました。

我々は、政治の力を借りながら、また、三遠南信サミットでさらに議論を進めていく中で、三遠南信自動車やリニア中央新幹線だけではなくて、様々な道路が早く有機的につながり、発

展の礎ができるように取り組んでいくことが大切です。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

それでは、まとめに入らせていただきます。

出されたご意見の中で、幾つかキーワードがあったと思います。

一つは、国への働きかけをどうするか。やはり国や国会議員のみなさんに理解を深めてもらうためには働きかけが重要で、現道活用区間の整備に関する課題の解決に向け、この地域として国へ提案できるように、そして地域全体で道路をどのように活用するかについて、さらに議論をしていくことが必要と考えます。

また、道路の活用については、三遠南信圏域全体でもっと情報共有をしていくことが必要です。そのために、それぞれの地域の交流をさらに進展させ、お互いに地域を見て、その理解を深めていくことも重要と考えます。

この地域にとって、東西軸の整備が進む中、これから不可欠になるインフラ整備としては、南北軸の三遠南信自動車道、浜松三ヶ日・豊橋道路、そして伊勢連絡道路といった道路の整備を早期に、かつ着実に進めていくことが必要ということをおみなさんと確認して、まとめさせていただきます。

4 「技」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

「技」分科会では、「産学官連携・農商工連携の推進と地域全体への拡大に向けて」と「地域が大学に求めるものと三遠南信地域の大学フォーラムの姿」をテーマとし、三遠南信地域における産業集積計画についての報告を踏まえて議論を交わすとともに、大学との連携に向けた意見交換を行った。

意見交換では、5つのクラスタープロジェクトを推進する中で、三遠南信地域の強みを生かし、地域が連携していくための新たな連携モデルの重要性が確認された。また、大学フォーラムにおいては、地域への大学のかかわり方をはじめ、大学間連携、産学官連携のあり方について今後も検討を進めることを確認した。

コーディネーター	静岡大学イノベーション共同研究センター	センター長	木村 雅和
アドバイザー	三遠南信クラスター推進会議	地域連携マネージャー	松島 信雄
	愛知大学	経済学部教授	岩崎 正弥
報告者	飯田市産業経済部	部長	糸原 和代
行政	湖西市	市長	三上 元
	豊橋市	市長	佐原 光一
	高森町	町長	熊谷 元尋
	阿智村	副村長	佐々木幸仁
経済	浜松商工会議所	会頭	御室健一郎
	豊川商工会議所	副会頭	日比 嘉男
	蒲郡商工会議所	会頭	吉川 敏夫
大学	愛知大学	理事長・学長	佐藤 元彦
住民	市民団体連携委員会	委員長	原田 敏之

(敬称略)

■はじめに 事務局

ただいまから「技」分科会を始めます。

本日は、「産学官連携・農商工連携の推進と地域全体への拡大に向けて」と「地域が大学に求めるものと三遠南信地域の大学フォーラムの姿」の2つのテーマを設け、2部構成となっていますので、コーディネーターもテーマごとにお願ひして、進めさせていただきます。

■テーマ1 「産学官連携・農商工連携の推進と地域全体への拡大に向けて」について

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長



ものづくりを中心とした産業によって、これ

からは、地域発展に必要な資金を稼いでいくことがとても大切です。年々激化していく国際間、あるいは地域間の競争に打ち勝っていくためには、外需を拡大して、地域外から稼げるような付加価値の高い産業をつくっていく必要があると思います。また、今、話題になっているTPPの議論などもありますが、三遠南信地域の特性上、農業などの一次産業の振興と高度化が必要不可欠であると思います。

三遠南信地域では、様々な産業集積が動いています。従来、市や県、経済団体等が単独で実施することが多かった事業ですが、大学が集積する遠州と東三河を中心に、産学官、あるいは金融を含めて広域連携が進んでおり、その成果が着実につつあります。

この「技」の分科会では、テーマ1として産学官連携、農商工連携の関連について、テーマ2として三遠南信地域大学フォーラム関連について、それぞれ議論をいただきますが、まず初めに、三遠南信地域における産業集積計画についてご報告いただきます。報告では、世界に通用する新産業の創出とその持続的な成長のための戦略についてお話いただいた後、地域資源の宝庫である三遠南信地域における農業関連を初めとした一次産業の高度化やブランド化等について活発な議論をお願いしたいと思います。その後、テーマ2の「地域が大学に求めるものと三遠南信地域の大学フォーラムの姿」について、議論をいただきます。

ここでご報告を受ける前に、前回のサミットの「技」分科会で行われた議論の内容について確認をいただきます。前回、東三河地域において2009年に開催されたサミット「技」分科会では、県境域の持続的発展に向けた産学官連携、農商工連携への期待をテーマとし、産業クラスター計画、三遠南信バイタライゼーションの事例報告があり、その後、地域資源の発掘と活用、業種間の情報交換、キャッチコピー等による情

報発信、さらに既存の産学官連携事業の三遠南信地域全体への拡大、そして連携から融合への転換について、その重要性、必要性を確認しました。

これらを踏まえ、今回は、三遠南信地域が持続的に発展を続けていくために、「人」「モノ」「金」のさらなる集積と、それを進めるために必要不可欠と思われる人材育成を図っていくために、一体的かつ発展的に取り組んでいく産業集積計画について、皆様から様々な御意見をいただきながら分科会を進めたいと思います。

それでは、「三遠南信地域における産業集積計画について」と題し、企業立地促進法三遠南信地域基本計画に基づく三遠南信地域産業集積活性化協議会の副会長を務められています飯田市から、糸原産業経済部長に事例報告をいただきます。

■報告

「三遠南信地域における産業集積計画について」

飯田市 糸原産業経済部長



改めまして、飯田市の産業経済部長、糸原です。4月から飯田市では金融政策室という新しい部署を立ち上げたことから、金融政策室長も兼務しています。ちなみに、明日は三遠南信しんきんサミットが開催されますが、飯田信用金庫さんは3年前から、今回の飯田市でのしんきんサミットの開催に力を入れてきました。当産

業経済部でも全面的にバックアップをして、この機会に、産業面で大きく金融機関さんとの産学官連携をさらに深めたいと思っているところです。それでは早速ですが、今、ご説明がありました三遠南信地域基本計画広域的産業集積活性化支援事業を活用した三遠南信地域における産業集積計画について、ご説明いたします。

改めてお話しするまでもありませんが、三遠南信地域は、遠州地域に、スズキ、ヤマハ、カワイ、ホンダさん等をはじめとする世界的な大企業を抱え、さらに東三河・南信州地域にも多くの中核的な企業が存在することから、日本のものづくりの産業を支えている地域であると言えます。また、多くの大学も存在しており、人材育成と産学官連携による研究開発が盛んな地域でもあります。

産業については、平成13年から国のクラスター計画に基づき、三遠南信地域における企業間のネットワークの拡大や次世代産業に向けた様々な産業振興政策について、連携して取り組んでいます。2008年からのリーマンショック以降、ものづくり産業における状況は非常に厳しく、構造変換を求められるなど、現在の円高等、不確実性が増しています。

この状況から、企業や自治体が単独で新技術、新産業を開拓し、展開していくことがたいへん難しくなってきたため、海外の大企業と肩を並べることができる地域クラスターを目指し、国際化の対応や新たなビジネスモデル・イノベーションの創出を目的に三遠南信地域産業活性化協議会を立ち上げました。三遠南信地域が一体的となって連携事業に取り組んでいくため、平成22年3月に三遠南信地域基本計画を策定し、4月に経済産業省から同意をいただきました。現在、様々なプロジェクトやアクションプログラム等を、県や関東経済産業局の所管も仰ぎながら進めているところです。

この三遠南信地域基本計画は、世界をリード

するものづくり基盤技術と先端・光電子技術等を生かして10年後の基幹産業化を目指し、輸送機器用次世代技術産業、健康医療関係関連産業、新農業、光エネルギー産業の4分野において新産業の創出を図るというもので、不況の影響を受けにくい多層的な産業構造の実現を目指し、知と産の融合、企業間連携、異業種・異分野融合等の加速や低炭素社会の実現を図るための各種のプロジェクト、そして人材育成、さらに事業環境整備等を三遠南信地域産業活性化協議会が広域的に進めます。

事業実施主体は、それぞれの中核となる産業支援機関の浜松商工会議所、豊橋商工会議所、(株)サイエンス・クリエイト、(財)飯伊地域地場産業振興センターで構成された三遠南信クラスター推進会議で、大学、金融機関等と連携して様々な事業を展開していきます。

現在、国内でも当地域と同様な広域連携による地域クラスターが誕生して活動が活発化しているところがあり、クラスター間の連携も行われています。例えば、中部地方の航空宇宙産業クラスター間の連携では、7月にイギリスのファンボローにおいて、全国の航空宇宙産業にかかわるグループなどを束ねたオールジャパンのクラスターとして、欧州のエアショーへ共同で出展しています。世界の航空機メーカーに対して、日本がこの三遠南信を中心に一体となって技術を売り込むような段階に到達するよう取り組みを進めています。

三遠南信地域におけるクラスタープロジェクトとビジョンでは、産業構造の転換について産学官が一体となり、従来の大企業中心の垂直統合型から、企業規模や業種にかかわらない水平連携型や多層複合型へ転換を進め、独自の三遠南信モデルを確立するとしています。

また、文部科学省の知的クラスター、あるいは経済産業省の産業クラスター等の国や地方自治体のプロジェクトを通じて、新分野などへの

進出を強力に進めており、まさにオール三遠南信株式会社といった運営体制で、高度な技術開発力や価値、創造力を生かして景気の波を打ち破る多層的な産業構造と新たな基幹産業の創成を目指すこととしています。

このプロジェクトでは、輸送機器関連次世代技術産業、新農業、健康医療産業、光エネルギーの4つの分野において、次の5つのクラスターに取り組んでいきます。

次世代輸送機器等、健康医療、光エネルギー産業については浜松、新農業については豊橋、航空宇宙産業については飯田が中心となり、シンポジウムやセミナー、協働によるマッチング交流、展示会出展等の活動を既に始めています。また、プロジェクトの推進にあたり、地域連携マネージャー、コーディネーター等を配置して、企業と企業、企業と大学、また企業と行政をつなぐ役割を担っていただく予定です。

続いて、4つの分野ごとにご説明します。

一つ目が、輸送機器用次世代技術産業ですが、次世代技術産業は自動車に限らず、次世代のビークル、航空宇宙産業、ロボット産業など、広く次世代の輸送機器について扱っていくというものです。大手メーカーや中小企業による次世代環境車の開発に加え、これらのコア技術となり得るセンサ技術のモジュール化やシステム化を産学官連携により進めてきており、信号機と車両との通信機能による管制制御の確立や高精度な衝突機能防止機能等の事業化なども進めています。なお、浜松では、地域産学官15機関で構成されたはままつ次世代環境車社会実験協議会を設置し、10月に車両走行実験をスタートしており、新たなビジネスモデルの確立や社会インフラの構築等を進めています。

次に、健康医療分野ですが、医学と工学、医療と工業の融合による医工連携を目指し、先端医療開発特区並びに地域産学官共同研究拠点整備事業等とリンクしながら、光・電子医療、医

療機器、光学機器、健康機器、福祉機器など、革新的な医療機器や診断技術等の開発を進めています。特に今般、海外からも引き合いが多い体内の健康状態を精密にモニタリングするPET等の開発、あるいはカーナビゲーションのように医師に危険箇所や進捗予測等をガイドする手術ナビゲーション、それから質量分析技術を生かした計測機器等の開発を行い、従来、経験やノウハウのみに頼ってきた医療現場において絶対的な安全・安心を担保し得る医と工が融合したシステムの開発とその導入を図ります。

その次に、新農業分野ですが、全国第1位の農業産出額を誇る田原市、第4位の浜松市、第6位の豊橋市など、農業が盛んな地域が連携して、IT農業、光農業、6次産業といった農商工連携に取り組み、高付加価値かつ安全・安心な栽培技術や加工、ブランディングなどを進めています。得意とする選果機や検査機器などに加えて、LEDやレーザー等の光源、IT制御技術を駆使し、光電子技術の利活用による植物工場等の産業化も進めます。産学官連携の一つの事例ですが、当地域においては、南信州特産の市田柿を生産する農家が中小企業、大学と連携しまして、衛生的で簡単に皮をむくことができる新たな皮むき機「楽柿物語」を開発しました。今後も、乾燥技術等の研究を行うなど、さらなる連携に取り組んでいきます。

最後に、センサ、レーザー、光源、電池、光学機器、計測機器等を主体とする光エネルギー（オプトロニクス産業）ですが、これは既に地元企業が開発しました宇宙線観測用の光センサがノーベル賞受賞に貢献するなど、人工衛星やPET装置のコアシステムとして活用されています。また、世界最高レベルの高強度半導体レーザーの産業応用については、新素材やプロセス改善が著しい自動車の製造現場でも加工用に導入が進みつつあります。さらに、知的クラスターで開発している人間の目の能力や従来のカメラ

の性能を超越するセンサやシステムは、いずれも国際優位性や独自性に優れていることから、オンリーワン技術を生かした世界への産業展開が進みつつあります。

以上、この4つの分野において、産学官、企業間の連携プロジェクトを広域的な視点で進めることにより、10年後に事業所数（従業員4人以上）を現在の7,215社から9,000社に増やす予定で、製造品出荷額（従業員4人以上）を14兆5,000万円から20兆円まで、さらに付加価値生産額（製造業1人当たり）を1,530万円から1,850万円まで押し上げる目標を立てています。グローバル化が加速する中で、世界とつながり、世界に売り込むことで、地域の持続的発展を目指していきます。

今後、ますます広域的な産学官の連携が求められ、各々のフェーズで世界のイノベーション先進地や経済成長の著しいアジアと密接に連携し、情報交換や交流を行っていくことが重要であると感じています。何よりも、国内、この地域における各分野が一体となり、新しい開発の芽を支える力と、そういったものを育てる仕組みをつくっていくことが重要と思います。



ご紹介いたしました基本計画は、浜松、豊橋、飯田の3市だけのものではありません。現在4つの分野を中心に様々な事業を展開していますが、他市町村の企業から参加したいという声があります。ぜひ自治体の枠や地域の枠を越えて三遠南信が一体となり、力を一つに合わせ、この計画を推進いただきますようお願いいたします。

ます。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

企業立地促進法では、様々な根拠を掲げて関係省庁と事前折衝し、特定の集積対象業種を定めることになっています。他の地域では一つの業種だけに絞って認定を受ける地域も多く、北陸地方では繊維産業、東海地方では航空宇宙産業のみが集積対象業種となっている事例がありますが、三遠南信地域はものづくり産業のメッカであり、あらゆる産業の基盤技術となり得る光電子産業が盛んなため、この地域のポテンシャルを際立たせています。

今ご報告があったように、4つの新産業の集積を加速化させて、国際優位性のある基幹産業化を実現していくことについて、国が大いに期待していると考えられます。

■議論・意見交換

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

先ほどのトップの対談、そして今の報告を受け、議論に入っていきますが、まずは産学官連携、新産業の創出、あるいはグローバル化を見据える中、先ほどの全体会において、新産業集積への取り組みとして、次世代環境車の社会実験等のことも含めてご発言をいただいた浜松商工会議所の御室会頭から、国内有数のものづくり地域である遠州地域の産業界のトップとして、国際競争にこれから生き延びていくために、新産業の重要性、産業のグローバル展開や雇用の展望を踏まえてご意見をいただきます。なお、本日は、話題に出た次世代環境車で、私も浜松から飯田まで来ました。

浜松商工会議所 御室会頭

やはり、三遠南信が持つ強みである輸送機器

用次世代技術産業、航空宇宙産業、健康・医療関連産業、新農業、光エネルギー産業を成長産業と位置づけ、地域に広がりをもつ新産業として育てていくことがたいへん重要で、経済界としても全力を挙げて取り組んでいきたいと思えます。ただ、一朝一夕には成果は出ないことも事実で、相応の投資が必要となるため、どちらかといえば中長期的な取り組みとならざるを得ないと認識をしています。よって産業振興のあり方としては、短期と中期と長期という時間軸を設けて考えていくことが肝要ではないかと思えます。



リーマンショック以降、地域経済が大きな打撃を受けた状況で、比較的短期的な視点に立って取り組んでいく必要があるのは、地域産業の海外展開、あるいは海外需要の取り込みではないかと強く感じます。大手メーカーなどの大企業は、既に海外マーケットで収益を確保するビジネスモデルを確立していますが、中小企業においても果敢に海外進出にチャレンジしていくことが、今後、この地域の発展に欠かせないと思えます。

少子高齢化で国内需要のパイ自体はどうしても縮小せざるを得ないため、既に海外マーケットを視野に入れ始めた企業が大分増えてきました。ただほとんどのケースで海外進出をしたくても情報、あるいは人材、ノウハウが不足し、どこから手をつけていいのかわからないというのが実態ではないかと思えます。

この三遠南信地域においては、既存産業、あ

るいは既存の企業で、世界と肩を並べ十分競争していく力を持つところが多いわけですが、海外マーケットの情報提供、あるいは海外での商談会、出展のサポートなど、海外展開への環境を地域として整える取り組みをしていくことが大切ではないかと思えます。

また、例えばSENAを一つの核として、地域中小企業と海外マーケットを結びつけるビジネスマッチング事業を開催し、この三遠南信地域全体でのグローバル展開に発展させていくことを提案させていただきます。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

続いて、浜松市と同じように輸送機器を中心として発展を遂げており、今春に新居町と合併された湖西市の三上市長に、地域の抱えている課題や今後の発展に向けた戦略について、ご意見をいただきます。

湖西市 三上市長

先ほどのトップ対談で御室会頭から、もしガソリンを使った自動車がゼロになった場合、浜松地域の自動車関連産業の出荷額が半分になるというお話がありましたが、湖西も同様の状況が考えられます。湖西にパナソニックとトヨタの共同出資でハイブリッドカー用電池製造会社のプライムアースEVエナジーという会社があります。今年、社名を変更したのですが、3年前に引退された前EVエナジーの社長を呼んで、「10年後の自動車はどうなっているか」というテーマで講演してもらいました。EVエナジーさんの公式見解ではなく、あくまでも引退した社長の自由な見解とのことですが、20年前、「何年後かわからないがハイブリッド車が主力になる時代が来るはずだと考えたのは、ホンダとトヨタ、その二つの会社だけだった」、今、それが当たりつつあり、「10年後の主力の乗用車は、ハ

「イブリッド車に間違いない」とおっしゃっていました。さらに、「その10年後、今から20年後というのはどうなるのかということまではわからない」とおっしゃっていました。10年後は、ハイブリッドが乗用車の主力となり、「電池の値段が300万円ぐらいから10分の1の30万円ぐらいになって100万円程度で電気自動車が生産できるようにならないと、10年後に電気自動車が主力になるのは難しい。また、10年では電池は10分の1の値段にならない。」と断言されていました。

私は6年前に初めて市長になりましたが、そのときの公約に「研究所の集まるまち」を掲げています。これは、日本では土地や人件費が高いため、最先端の部品か大変高価な部品を製造する工場以外は立地できないと考えたためです。当市にあるプライムアースEVエネルギーのように最先端の部品をつくらしている企業は10年後も20年後も健在だと思いますが、今後、他の自動車関連産業が半減してしまうことを心配しています。このような状況から、日本の四季が脳を活性化することを発信するなどして、日本こそ研究所の最適地と売り込み、世界各国から優秀な人材が集まる研究所を日本に集めたいと考えます。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

日本が研究所の集まるような国になれば、新しい展開があると思います。大学に身を置いている人間の立場からすると、日本は全くその逆の方向に向かっているように感じます。それは大学の責任でもあり、企業のみなさんにも考えていただきたいことです。人材育成という意味で、高度な技術、あるいは専門職の研究者を育てる日本の環境はどんどん悪化して、日本で高度な教育を受けているのは外国人ばかりというのが現状です。

次に、東三河地域で大きな港を抱え、光学機器や医療関連産業等の付加価値の高い研究開発型の製造業が盛んな蒲郡商工会議所の吉川会頭からご意見をいただきます。

蒲郡商工会議所 吉川会頭

今でこそ蒲郡には、海外へも展開している眼科医療機器の開発等を行う株式会社ニデックという優秀な会社がありますが、元々は、昭和30年頃に繊維の町として産声を上げました。昭和33年には、繊維業が800社ほどありましたが、中国などの影響もあって、現在は240社という状況で、大きく変革をしています。蒲郡の繊維は他と異なり、糸をつくって染色し、製品にした産元が販売するという仕組みで連携をしていましたが、蒲郡も大変疲弊をしてきたことから、商工会議所としても、三遠南信基本計画のとおり新産業の創出に目を向け、蒲郡の観光面でのどかな自然とおいしい食べ物で、癒しとアンチエイジングを進める活動をしています。

まだ事業化はされていませんが、蒲郡のミカン使った「みかんワイン」やボディソープを開発して商品化を目指しています。三河木綿にあっては、ミカンの葉っぱを利用してミカン色を出し、商品化する状況も出ています。

いずれにしても、産学官連携を強化していくことが重要であるため、遅れている中小企業の人材育成を強化し、講演会やビジネスマッチングなどの支援を進めていきたいと考えます。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

人材育成の部分は、どの地域でも大変重要な課題になっていると思っています。これは、この三遠南信の全体においても、今後の最重要課題ではないかと思っています。

次に、同じく非常に付加価値の高い産業分野をお持ちの豊川商工会議所の日比副会頭からご

意見をいただきます。

豊川商工会議所 日比副会頭



やはり豊川のイメージで、まず浮かんでくるのは、豊川稲荷だと思います。ご存じのとおり京都の伏見、佐賀の祐徳とともに日本の3大稲荷で、豊川の貴重な地域資源ですが、10年程前から、商工会議所の青年部を中心に、行政と一体になって「いなりずし」を全国へ広げるべくPRに取り組んでいます。最近ではB級グルメが注目される中、今年9月、厚木で行われましたB級グルメのイベント「B1グランプリ」へ初参加し、参加46団体中、第6位という成績を収めています。

この影響もあり、ピーク時の半分程度まで落ち込んでいた豊川稲荷の参拝客が、土日は当然のことながら、平日においても盛り返しを見せ、大変に賑やかになってきました。また、地元の「いなりフェスタ」では、正月以来の人出で、6店舗で800食も用意した「いなりずし」が、わずか3時間程で完売する状況でした。全国にPRできたことで町が変わった事例をご案内させていただきました。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

もともとの豊川稲荷という名前のブランド、そのブランド名をいかに利用するかが重要なことではないかと思えます。

次に、飯田市に隣接して精密機械加工関連の

企業も立地されている高森町の熊谷町長からご意見をいただきます。

高森町 熊谷町長

産業集積計画のような長期の計画により、将来の三遠南信地域のあるべき姿を掲げ、みんなで力を合わせて戦略を練りながら取り組んでいくことは、たいへん大事なことだと思います。

高森町のような人口1万3,500人の小さな町が、飯田市や豊橋市、そして浜松市のような大きな市と同じような取り組みがその中でできるかというとなかなか難しい面もありますが、役割をきちんと分担しながら町として責任を果たしていくことが大事ではないかと思えます。

最近の新聞に掲載されていた記事に、この南信州地域は、香川県に匹敵する面積の中に17万人程の人が住んでいますが、30年後には11万5,000人まで減少するという推計が出ていました。去年は1,470人と、年々この地域で人口が減っていますが、これから30年後に6万人も減っていくことを考えると、人口減少時代の中での産業振興をどのように図っていくのかをしっかりと考えていく必要性を改めて感じます。

小さな町では財源や人材、情報などが不足しますので、やはり大きな市にリーダーシップを発揮していただき、この地域全体の底上げを図っていただきたいと思います。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

続いて、まだご発言をいただいていない方からご意見をいただきます。

市民団体連携委員会 原田委員長

午前中に開催された住民セッションで話し合ったことをご紹介させていただきます。

三遠南信地域の住民が集まって話し合いをしましたが、比較的、中山間地域を中心に高齢者

の方々が多く集まったことから、話題は暮らしの中で抱える住民生活レベルの課題が中心となりました。自分たちの身の回りにあるものを中心に、地場産業や伝統工芸、山の仕事にしても、やはり自分たちの地域の技術を絶やすことなく、今までどおり受け継ぎ、ちゃんと暮らしの技術、生きていく技術、「技」というものをつなげて行こうという意見が多く出されました。まずは、自分たちでその環境づくりをして、しっかり技術を守って生きたいと思います。



コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

地域としては、やはり付加価値が高くてグローバル展開するものを求めていくことが必要で、そうでなければ地域として生き延びていくことはできないと思います。外貨を稼いで地域へ転換することが、中山間地域を抱えるこの地域の活性化のために必要だと思います。

さて、これまでの部分は比較的グローバルな展開をしようという議論をしてきましたが、企業、大学、自治体、地域や国際間の競争が激化していく中で生き残り、勝ち残っていくためには、三遠南信地域基本計画や地域クラスター、あるいは産学官連携拠点等の大きな取り組みを成功に導く必要があります。また、一つの会社だけ、あるいは一つの自治体だけといった自前主義的なものは捨て、県境を越えて連携するS E N Aの下、互いに得意分野を持ち寄って連携

し、さらに融合して世界と戦っていくような新しい取り組みをつくっていく努力が必要と思われます。

続いて、同じテーマ1の中で、中山間地域が多い三遠南信地域において、農林水産業の振興や農商工連携をはじめとする内需の喚起、あるいはそのブランド化という議論に入ります。

地域資源の活用、IT技術等を駆使した食農産業クラスターへの取り組み、あるいは一次産業の高付加価値化、広域な展開などについて、豊橋市の佐原市長にご意見をいただきます。

豊橋市 佐原市長

もう10年程前になりますが、東北で仕事をしていたときに、津軽のリンゴ農家の人たちと話をすることがあり、そこで、手間暇かけて自分たちがこれほど真剣につくったリンゴが1個100円でしか売れないのはおかしいという嘆きを聞きました。私たちは、中国へ持っていったら、もしかしたら1個1,000円でも売れるかもしれないと考え、価値で評価してくれる市場を探すことにしました。ちょうど東北大学の先生が、これに似た取り組みをされていて、地域の農政局と当時私が所属していた地方整備局、そして東北大学と一緒に中国へリンゴを持って行きました。値つけに困りましたが、妥協せず生産者が思った値段をつけて売ってみましたところ、最初は張りついていた新聞記者などが「1個800円、1,000円では売れない」と話していましたが、実際には、800円や1,000円であつという間に売り切れとなりました。

このことから、日本の市場を相手にするときは、生産者がちゃんとつくっているものは、正当な価格で評価されるマーケットにきちんと出すべきだと考えます。それがやはり私たちのブランド化の第一歩ではないのかと思います。

今、豊橋市では次郎柿、そしてお隣の田原市ではメロンを取り上げて、香港の市場でどうい

う評価をされるのか調査していますが、柿とかメロンは当然評価が高い状況です。その市場では、ミニトマトなどをオランダから輸入して売っていましたが、その味や値段から考えても、私たちがつくったものはもっと高く評価され、勝負ができるマーケットであることがわかりました。



また、中国市場で柿が一番高く売れる時期は春節、旧正月のときですが、柿は1週間から10日で傷んでしまう足が早い果物なので、これを5カ月もたせるための技術的なチャレンジもしています。

このように産業クラスターや農工商連携を使い、地域の持っている力と私たちが持っているテクノロジーという力を組み合わせて、良い商品をつくり、正当な値段で売れるマーケットをつくり出すよう取り組んでいます。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

続いて、地域資源の活用や農工商連携といった状況について、有名な温泉地を抱える阿智村の佐々木副村長からご意見をいただきます。

阿智村 佐々木副村長

グローバル展開、あるいは世界に通用する産業育成については、人口7,000人、高齢化率が30%後半の村にとってはレベルが高過ぎるというのが実感です。目指す方向性は良く、魅力ある計画ではあるものの、現在、リーマンショッ

ク以降の非常に厳しい経済情勢が、今やっと60~70%ぐらいまで戻ってきた状況では、まだ村内の企業にその力はなく、村もその支援が産業振興の実情といったところです。

村内には、昼神温泉という温泉郷がありますが、こちらも例外なく毎年数%ずつ、お客様の入り込み数が減少している状況です。最近では、遠鉄バスさんが1日1往復ずつバスを試験的に運行され、浜松の皆さんにご利用いただいておりますが、人に頼ってばかりはいられないことから、昨年から国の支援を受けて機能性食品の加工工場をつくり、6次産業に取り組んでいます。機能性食品は、栽培が簡単な上、血圧を下げる効果があるキクイモ、ニンニク、ヤーコンの3つで、村の遊休荒廃農地を活用して、現役を引退した団塊の世代の人たちが栽培をしています。食品加工の技術は、信州大学農学部と民間企業のお知恵を借り、栄養・効能分析は、地元の飯田女子短期大学に依頼しています。現在収穫中で、販売はこれからとなります。すでに加工は試験的に実施しているので問題ありませんが、課題はやはり販売で、昼神温泉でお土産として置くなど、企業等に働きかけをして、販売網を確立していきたいと考えています。

また、農業のブランド化では、阿智村の認証マークを農産物に貼る仕組みがあります。村にある堆肥センターの完熟堆肥を施し、栽培履歴が管理され、農薬等の使用が基準以下であれば、村から認証マークを出しています。認証マークが貼られた農産物の売れ行きは好調で、現在、村を通る中央自動車道の阿智パーキングエリアに開設した販売所の「野菜村」や名古屋の生協、知多の市場でも販売しています。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

続いて、第1のテーマについて、アドバイザーのご意見をいただきます。

アドバイザー／松島地域連携マネージャー

高度な話から身近な課題まで様々な意見が出ましたが、地域の特長、強みをどう生かして、どのように地域を活性化して、世界で通用する地域にしていくかが、三遠南信全体で考えなければならないポイントです。

そういう観点から、まず第1に、やはり世界のマーケットは一つだと考えて臨む必要があります。我々が途上国とか後進国と考えていたところが、今は逆に彼らが発注者となり、我々が仕事をもらう場面が多くなっていることから、競争相手は決してお隣の会社でもなければ、お隣の地域でもなく、世界だと認識することが重要です。そして、地域の強みが何かを見つけ出し、それを磨き上げ、広域で連携していくべきと考えます。

航空宇宙プロジェクトに取り組む飯田地域では、精密加工業の集積度がたいへん高い状況ですが、残念ながら航空機の部品やエレメント、ユニットをつくるには精密加工だけでは不足です。今、大手では単品の加工外注はあまり出さず、一つのユニットをまとめて発注する形に変わってきているため、これに対応していくためにも、広域連携の必要性が増しています。

世界を一つのマーケットと考えるとき、言葉の壁に当たりますが、一步世界に飛び出してみると、その壁はそれほど高くはなく、ヨーロッパでは、EU全部が一つの国のように国境さえも感じません。また、海外で活躍するのは大企業だけと思われませんが、決してそんなことはなく、従業員数20人、30人という規模の企業が世界の舞台で立派に活躍しています。さらに、海外からは数十人の規模で歴史も新しい企業のバイヤーが、単体のオイルフィルターだけを売り物にして日本マーケットまで乗り込んで来ていることから、世界を舞台にマーケティング展開をしている姿を日本の中小企業も見習うべきです。

さて、この地域の強みである4つの産業クラスターから5つのプロジェクトをつくり上げていますが、このクラスターを推進する中で、地域の連携、産学官の連携と同時に、最も付加価値の高い研究開発部分で集積が少しでも進められればなと思います。フランスのグルノーブルが、山岳の小さな町にも関わらず、世界中の研究者が集まり、学術研究都市として世界から注目されるまちづくりをしていることから見れば、三遠南信地域でも同じことができるのではないかと思います。

農工商連携についても、豊橋地域の大葉が100億円産業となるなど、三遠南信地域は価値の高い資源が多く、無限の可能性があることから、地域の価値あるものをもう一度見直していくことが大切です。例えば、飯田のリンゴは、信州のリンゴや青森のリンゴよりも味が良く、高品質と言われますが、ブランド化ができておらず、単なる南信州のリンゴとして出荷されています。

一方、市田柿は、東京のスーパーで一般の干し柿の1.5倍で売られています。飯田市にある「かぶちゃん農園」は、高品質で味の良いものを厳選し、さらに付加価値をつけてブランド化しています。やはりマーケティングをもう一度足元から見直していくということが非常に重要ではないかと思います。



**■テーマ2 「地域が大学に求めるものと三遠南信地域の大学フォーラムの姿」について
コーディネーター／愛知大学経済学部 岩崎教授**

残り時間が10分となりましたので、「地域が大学に求めるもの」に集約をして、大学に対して期待したいことについてご意見をいただきます。

この「技」分野の重点プロジェクトの一つとして、「三遠南信地域大学フォーラムを設置」が掲げられています。これは「技」に限らず、ほかの分野にもかかわることではありますが、今年度、その検討を進めるための準備として、関係者が集まり意見交換をしています。

まずは、そのメンバーの愛知大学佐藤学長から、その経過と状況についてご説明をいただきます。

愛知大学 佐藤学長

三遠南信地域連携ビジョンの「技」分野の重点プロジェクトに、「三遠南信地域大学フォーラムの設置」が掲げられています。また、サミット資料集の101ページのSENA組織体制では、現在の姿と目指すべき姿が表されていて、将来的には、SENAの枠の外側にある三遠南信大学連携が、新・連携組織への移行などで枠内に入り、SENAの総会などに参加していくイメージになっています。

このことから、「三遠南信地域大学フォーラムの設置」の具体化に向け、三遠南信地域連携ビジョン策定にかかわった静岡文化芸術大学と豊橋技術科学大学と愛知大学から代表が1名ずつ出席して、SENA事務局を幹事に、これまで非公式の協議を7月28日と9月28日の2回、開催してきました。

その協議の中で、行政、経済界、住民団体の皆様に、このことに対してどうお考えか。また、どういう点を期待するのかについて伺うこととなり、その具体的な事業イメージの事例の中で「特にどういう点を重視すべきか」、また「事例

以外の事業として考えるべきものは何か」などについて、ご意見をいただく機会を設けさせていただいたというわけです。

コーディネーター／愛知大学経済学部 岩崎教授

それでは皆様から、イメージも含めて意見をいただければと思います。私もこの5年ほど、地域連携にかかわってきましたが、連携という言葉で一致しているようでも、地域が期待している大学との連携と、大学が地域に求める連携にはかなりそごがあることが明らかになってきました。そこを詰めていくことで、組織が一人歩きして形骸化してしまうことがないようにしたいと考えます。

せっかく地域の代表の皆様が一堂に会しているわけですから、ぜひとも今日は、地域が何を大学に求めているのか、ぜひそのあたりをお聞かせいただければと思います。

市民団体連携委員会 原田委員長

三遠南信地域大学フォーラムという構想があるということですが、大学として、実際にどんなことをやって、どんなふうに地域に踏み込んできていただけるのかというところがすごく気になります。私どもは、市民団体連携委員会を組織し、その事務局を愛知大学三遠南信地域連携センターに担っていただきながら、三遠南信地域の住民団体の交流や連携を進めていました。残念ながら、現在、連携センターの機能変更により事務局はなくなってしまったわけですが、大学フォーラムでは、研究に留まらず、積極的に地域へ出ていただける動きが大事ではないかと思います。また、愛知大学では、新しく地域政策学部ができるそうですが、研究あるいは教育のほか、地域とのかかわりをしっかり形成されることを期待したいと思います。

コーディネーター／愛知大学経済学部 岩崎教授

今、お話に出ました地域政策学部については、5つのコースで地域連携を積極的に行うこととしており、地域貢献力をこの学部ではキーワードにしています。学生が単にフィールドワークや調査、報告会をするだけでなく、積極的に働きかけをして一種の社会実験をしていくようなことを、教育プログラムの中に組み込みながら、地域と深い連携を取っていきたいと考えています。他にご意見をお願いします。

会場から／飯田商工会議所 萩本副会頭

地域産業を論ずるときに、ここは「技」分科会ということもあって、「技」が強調され過ぎるきらいがあります。地域産業の弱みは何かといえば、マーケティングです。技があっても、マーケティングがなければ、地域産業にはならないことをもっと意識するべきです。マーケティングをもっと地域に、そして生産者に対してきちんと位置づけていく活動が必要と思います。その上では、大学フォーラムの役割は大変に重要だと思います。技に身を置くものとして一番私自身を感じていることは、マーケティングで、流通業界に結果として搾取されている今日の経済構造が、そういう状況になってきていることをもっと意識しないと、生産者自身が犠牲者になりかねないということを申し上げておきたいと思います。

コーディネーター／愛知大学経済学部 岩崎教授

最後にまとめということにさせていただければと思います。

愛知大学 佐藤学長

大学と地域の連携はもちろん、大学間の連携をどうするかについて、地域がどうお考えかをお聞きしようと思いましたが、今回は時間がありませんので、改めて時間を取らせていただき

たいと思います。

それから、大学間連携をこの三遠南信という枠組みで考えるときに、厳密な意味で三遠南信に限定する必要はないと考えています。例えば信州大学農学部や静岡県東部へも広げて考えていくことがあってもいいのではないかと思います。それから、先日、飯田女子短期大学へ直接訪問していろいろと勉強させていただきましたが、飯田女子短大は、短期大学部以外に、4年制大学で卒業すると与えられる学士のプログラムを実は持っています。南信州には大学があるのかというような議論が一部ではありますが、多分それは考えなくて済むと考えています。

それから、大学フォーラムの話は、人づくりとの関係においては、大学や大学院だけの問題ではなく、高校、中学校、小学校との連携という視点も必要であると考えます。三遠南信教育サミットが開催されていますが、教育サミットと大学フォーラムがどうかかわっていくのか、そういうことも今後検討していかなくてはならないと思います。

今、どういう角度で、どういう検討がなされようとしているのかの一端を最後に紹介させていただきました。

コーディネーター／静岡大学イノベーション共同研究センター 木村センター長

それでは、前半の部分でまとめを簡単にさせていただきます。

三遠南信地域の新産業から既存産業まで、また、一次産業から六次産業という話がありましたが、多様な産業が集積している地域であることから、キーワードとしては、マーケティング、ブランド化、ネットワーク化、人材育成、そしてサプライチェーンマネジメントなどが出されました。地域としての自立性を創り上げていかなければならない中で、この地域が持っている強みである技術のポテンシャルを生かしてい

くためには、広域で新しい産学官連携のビジネスモデルなどを確立し、それを推進するための三遠南信における県境を越えた新しい体制をつくっていくことが大切です。

1年後の新しいSENAの体制は、こういうものを大きく進められるような新たな体制であるべきではないかということで、まとめとさせていただきます。



コーディネーター／愛知大学経済学部 岩崎教授

一つは、やはり地域に対して大学がどの程度踏み込むのかということは今後詰めていく必要があるということが1点。

もう一つは、技、産業創出においては自然科学系の大学の役割がとても大きいものの、それをいかに売っていくかで重要となるマーケティングへの大学のかかわり方、あるいは文化とか暮らしといった産業を支えている基盤、土台の部分の連携については、とりわけ人文社会系の大学の役割ではないのかなと考えます。

三遠南信地域大学フォーラムの設置に関しては、大学間連携はもちろん、教育サミットとの連携も含めて、今後、あり方をさらに検討していく必要があるということでまとめさせていただきます。

「風土」分科会では、「三遠南信の地域資源を活かした連携事業の推進と歴史風土の保全」をテーマに、秋葉街道信遠ネットワークの取り組みや三遠南信地域社会雇用創造事業の取り組みについての報告などを踏まえて、意見交換がなされた。

三遠南信地域にある貴重で多様な資源を再認識し、それらをどういった区分や切り口で発信し、どのような手法やしくみを用いて活かしていくべきかについて議論がなされた。

コーディネーター	財団法人 阿智開発公社	理事長	羽場 睦美
アドバイザー	特定非営利活動法人三遠南信アミ	理事	三宅 淳子
報告者	秋葉街道信遠ネットワーク	会長	木下 利春
	三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA)	事務局長	内藤伸二郎
行政	浜松市	市長	鈴木 康友
	田原市	市長	鈴木 克幸
	設楽町	町長	横山 光明
	根羽村	村長	小木曾亮弐
経済	中東遠地区商工会連絡協議会 (磐田市商工会)	会長	野寄 宏之
	長野県商工会連合会下伊那支部広域協議会 (泰阜村商工会)	会長	秦 和陽児
住民	三遠南信地域を学ぶ会	会長	仲井 政弘
	祭り街道の会	事務局	伊東 直幸

(敬称略)

■はじめに

事務局

ただいまから、第18回三遠南信サミット 2010 in 南信州「風土」分科会を開会いたします。「風土」分科会のコーディネーターは、財団法人阿智開発公社理事長の羽場睦美様、アドバイザーはNPO法人三遠南信アミ理事の三宅淳子様です。まずは、本日まで出席されている皆様から、議論を始める前に一言ずつご発言いただきます。

浜松市 鈴木市長

先ほど全体会で各テーマのポイントについてそれぞれご議論がありましたので、分科会ではそれを少し掘り下げて議論をしたいと思います。

この地域は、資源が豊富な地域ですので、それをどうみんなで生かしていくかが大事ではないかなと思います。



田原市 鈴木市長

田原市は、駒ヶ根市の隣の宮田村と友好提携

をしています。そのため毎年この近くを通りますが、田原市からの距離を実感するたびに、三遠南信自動車道の開通が待ち遠しいと感じています。



設楽町 横山町長

設楽町は愛知県東三河の旧津具村と合併して根羽村のお隣の町となりました。今日は、車で来ましたが、1時間30分程で飯田市へ到着しました。県境を越えて、各地域を勉強し、一緒に連携ができるといいなと思います。

根羽村 小木曾村長

長野県の最南端にある根羽村は、設楽町や豊田市、岐阜県恵那市のお隣で、小さい村ですが、村にある資源を利活用しながら、雇用の拡大や新しい産業の創出などに一生懸命取り組んでいます。

磐田市商工会 野寄会長

磐田市商工会の野寄です。中東遠地区商工会連絡協議会の会長もしていますが、天竜川東岸、大井川以西からの参加は当商工会だけです。きょうみなさんにいろいろ教えていただき、しっかり商工会のみなさんに報告をするつもりです。

長野県商工会連合会下伊那支部広域協議会 秦会長

長野県商工会連合会下伊那支部広域協議会会

長を務めております泰阜村商工会長の秦です。今日は、リニア将来構想検討委員会のメンバーとして、いろいろ勉強してきたことを、生かせればと思っています。

三遠南信地域を学ぶ会 仲井会長

三遠南信で歴史を見て歩く活動をしています。平成13年に豊橋で発足し、現在90名ぐらいの会員がいます。今朝、豊橋を6時に出発して、国道151号を通り、ここまで車で3時間10分かかりましたが、以前に比べて整備が進み、スムーズに来ることができました。

祭り街道の会 伊東事務局

祭り街道の会は、阿南町の一番端っこの愛知県境の新野を拠点に活動しています。国道151号を「祭り街道」と名づけ、街道沿いに点在する国の重要無形民俗文化財の祭りを線でつなげ、祭り文化を発信しながら地域振興に取り組んでいます。祭りが疲弊していくことは地域の疲弊にもつながりますので、何とかこういったものをみんなで支えて、いい地域づくりをしたいと考えています。

秋葉街道信遠ネットワーク 木下会長

今日は、事業報告をさせていただきますが、やはり文化や歴史がなぜ消えていくか、広域に物事を広めるにはどうしたらいいか、民間と行政の役割分担、若い人の世代にどういう形で伝えていくかなどが課題と考えます。

三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA) 事務局 内藤事務局長

本日はトップ対談の中でも少し言及がされましたが、SENAが取り組んでいます内閣府事業の三遠南信地域社会雇用創造事業についてご報告をさせていただきます。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

たいへん広域で様々な資源を持った三遠南信地域の風土について、本日は、2つのセッションに分けて話を進めていきます。最初にご報告をいただき、その後、三遠南信の自然、文化、人材、風土などの地域資源をどのように生かして事業を推進し、資源を保全していくかについて、ディスカッションします。それから、三遠南信地域の雇用創出のプロジェクトについてご説明をいただいて、意見交換をさせていただきます。まずはじめに、昨年度の「風土」分科会の要旨について確認させていただきます。

事務局

昨年のサミットの「風土」分科会における議論の要旨ですが、まず1点目に連携事業における住民と行政の組み合わせ、役割分担、バランスを図ることが重要。2点目に伝統芸能の継承のあり方、連携や交流による課題の克服、地域内における伝統芸能の本来の形の保全について、もっと知恵を出していくことが必要。3点目に身近な地域資源を積極的に活用すること、あるいは既に取り組んでいる活動を進めていくことが重要という3点でした。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長



先ほどのトップ対談では、佐原豊橋市長さんから、風土に関して、地域における文化の交流、

お祭りの交流、人の交流、様々なものを支えている「絆の道」があるという発言がありましたが、三遠南信自動車道や国道、天竜川や鉄道等を通じて私たちは絆を深めていて、そこには歴史や文化、観光資源があるということを感じました。また、牧野飯田市長さんからは、遠山郷の霜月祭り、飯田の一本桜あるいは天龍峡などの資源を活かした取り組みにより、豊橋や浜松から観光に訪れてくれるという話がありました。このセッションでは、各地域の様々な交流や地域資源の活用などのご発言などを期待します。それでは、まず、木下様から、現在の活動、それから展望等についてご報告をいただきます。

■報告

「秋葉街道信遠ネットワークの取り組みについて」

秋葉街道信遠ネットワーク 木下会長

実は秋葉街道信遠ネットワークの始まりはそんなに古いものではありません。一昨年、伊那市長谷のみなさんが長谷から秋葉神社まで、2泊3日で昔の道をたどって歩いたのがきっかけです。私は秋葉街道沿いにある小川路峠の整備事業に10年ぐらい携わっていたことから、この試みを知ることとなり、伊那と浜松の中間の飯田でまとめ役をお受けしている状況です。そこから様々な活動が始まりましたが、街道の整備をはじめ、1年かけて伊那から浜松までの全区間の踏破もしました。

信遠ネットワークの目的は、秋葉街道をよく知り、知ることによって秋葉街道を愛して、仲間を愛し、愛することによって秋葉街道沿線を開くというもので、先人がつくってくれたものをもう一回見直して、その中で得られるものなどを次の世代に伝えていくことを目指しています。街道で生きてきた人たち、街道を守ってきた人たち、それから、街道が本当に好きな人たちが出会って、志や心のつながりから自分たちで活動を広げ事業化していくことから、ど

ちらかというツールは口伝えが基本です。

信遠ネットワークが目指すところは、中山間地域の素材を活かした産業づくりと中山間地域の価値を再認識してもらうことで、地域に住んでいる人自身がここに住んでいてよかったと認識してもらえるように、地域資源を知ってもらえるような事業の実施や、埋もれている資源に光が当たるよう、情報発信をしていきたいと思っています。

昨年は、長野県から元気づくり支援金をいただき、三国街道の高遠から、秋葉神社までの公図の調査をしました。古道を探す地道な作業に1年かかりましたが、行政区を越えてつながり、しっかりネットワーク化して取り組んだことで、埋もれていた地域資源に光を当てることができました。



信遠ネットワークは、伊那市高遠から、長谷、大鹿村、飯田市、浜松市天竜区までの秋葉街道沿いの地域の個人や団体による官民協働のネットワークです。関係図としては、秋葉街道信遠ネットワークの各地域の事業者には賛助会員的な役割を果たしてもらいながら、ツアーの企画を手掛ける起業者や事業者とも同じ価値観を持ち、秋葉街道を活かしていくために情報発信をしていくというもので、秋葉街道でのツアーを通して地域へお金を落とすとしていく仕組みづくりをしていきたいと思っています。この官民協働による取り組みについては、やはり官と民の強みを生かすことが必要と考えます。民の柔軟性とスピードと人のつながり、官の公共性や情報発信力を活用していくことが大切です。民間の役割

と行政の役割を分担していくことで、各地域の疲弊を防ぎ、地域をつなげていく活動ができるのではないかと思います。

続いて、これまでの活動ですが、街道全区の調査のほかに、各地域でウォーキングツアーなどを実施しています。今、自然や癒し、山歩きがブームで、先週開催した大鹿村でのウォーキングには参加者が80人ぐらい集まりました。地域資源を認識してもらうとともに、地域の人たちが道を歩くことで道をつくってくれています。

また、街道整備のツアーでは、ちょうど今月の27日と28日に水窪で、みんなが一緒になってつるはしを振って道づくりをします。それから、秋葉街道夏期大学では地域資源などの勉強会を行っています。

さらに、ホームページの立ち上げ、街道PR用のDVDの作成、秋葉街道にちなんだ映画の第1弾の制作もしました。20歳代から30歳ぐらいの若い人たちが1年間、秋葉街道にかかわりながら街道の魅力を若者の視点で発信する映画をつくりました。タイトルは「アンバマイカ」秋葉街道で、上映時間は1時間15分、伊那市、それから大鹿、水窪、遠山郷と、4ヶ所でライブツアーとともに映画上映会をしていきたいと思っています。

それから、遊休農地を活用した芋焼酎づくりの支援では、長野県から元気づくり支援金をいただき、地元の酒蔵喜久水さんで5,000本の芋焼酎を作ります。この焼酎に使う芋は、秋葉街道沿線の関連団体の遊休農地を使って育てた芋をブレンドしていますので、ぜひご購入いただきたいと思っています。

また、全地域での一斉ウォーキングを実施しています。イチ、ニ、イチ、ニと歩くことから「イチニイチニの日」の12月12日に長谷から水窪の間で4ヶ所に分かれ、ガイドについてもらいながらウォーキングをしています。

以上で報告とさせていただきますが、秋葉街道のホームページに活動内容が出ていますので、

ぜひご覧ください。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

まだスタートして間もないということですが、すばらしい活動をされていて驚きました。ここから、意見交換を行います。

田原市 鈴木市長

今、街道のお話が出ましたが、実は田原も太平洋側の表浜に国道42号、三河港側の内海に国道259号があり、渥美半島の菜の花浪漫街道として日本風景街道の登録を受けています。

また、2年前から渥美半島の国道沿いなどにある22軒の飲食店が、地元の豚肉や海産物を使ったオリジナルどんぶりを開発し、そのどんぶりを食べながら半島を巡る「どんぶり街道スタンプラリー」を実施しています。販売数は1年間で10万食を超え、1店舗当たり平均500万円の売り上げとなったほか、波及効果もかなりあったのではないかと思います。道路と地域資源をうまく活用することが大切と感じました。

この三遠南信地域の全体を見ますと、本当に地域資源が山積していると思います。トップ対談で飯田市長さんも桜や祭りの話をされましたが、花であれば、渥美半島には1月から始まる菜の花まつりがあります。この三遠南信地域は南北に細長いことから、花のシーズンや見頃に合わせてクイズラリーをしたり、四季折々の祭りのマップをつくったり、それから地域グルメの紹介をするなど、目的ごとの情報発信を三遠南信全体でできれば、おもしろく広がっていくかなと感じています。

また、三遠南信には渥美半島から御前崎までの遠州灘というすばらしい砂浜があります。この貴重な財産をどういう形でみんなに親しんでもらうかも重要です。渥美半島にはいくつかの自転車道がありますが、海岸端を走るコースを他地域の自転車道や観光地とつなげるなど、的

を絞った工夫と情報発信により、もっと親しめる地域になるのではないかと思います。

浜松市 鈴木市長

いろいろある資源をどういう切り口で、どのように売り出していくか、そこがとても大事ではないか思います。秋葉街道あるいは古道といったように、道の中で焦点を絞ってコンセプトを決めていってもいいと思います。

浜名湖の北に引佐地区というところがありますが、ここには、臨濟宗の大本山の方広寺、庭園のすばらしい龍潭寺、そして宝林寺、摩訶耶寺、大福寺というお寺が5つあることから、これらの観光資源を「湖北五山」と名付けました。それぞれのお寺は全く変わっていませんが、この観光資源を湖北五山という切り口でまとめ、全体として売り出していこうということです。

このことは、今まであった資源をさらにパワーアップしていく一つの切り口だと思います。やはりこのように知恵を絞っていけば、材料はたくさんある地域ですので、様々な取り組みができる気がします。

祭り街道の会 伊東事務局



今年の4月、阿南町に滞在型市民農園が20棟できました。「祭りの里にあなたの農園を」をキャッチフレーズに売り出しましたが、たいへん人気があり、都会のみなさんが喜んで生活をされています。地域のお祭りにも参加いただき、祭りの文化をみんなと一緒に楽しんでもらう取り組みをしています。町へ来られた人は、す

がすがしい風と温かいもてなし、地元の人との会話がすごく楽しいとおっしゃっています。また、私たちが当初に見込んでいた1年間の総滞在日数は、わずか4ヶ月でクリアするほどの利用状況で、やはり都会の人たちは、田舎での自然や人との触れ合い、ゆったりと過ごす時間を求めているのではないかと感じました。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

地域を結ぶ道路なども重要ですが、やはり人はそれだけで生きていけないのではなく、地域の豊かな自然や水、空気、そして、温かな人情などもなくてはならないと思います。また、この三つの地域をつなぎ合わせると、海から山まですべての地域資源が揃います。やはり私たちには、これらを守っていくべき役割があると感じました。

ここで、アドバイザーから一言いただきます。

アドバイザー／三遠南信アミ 三宅理事

午前中の住民セッションでは、「中山間を生きる」をテーマにした分科会に参加しました。多くの方から、地域のいろいろな話をお聞きしましたが、歴史風土、自然風土というのは地域の誇りであるということを感じました。歴史風土は、人々の五感で享受をされ、第六感の感性で磨き上げられて、ますます光り輝く地域の誇りや個性となることから、これらをどのように生かしていくかを産官学に住民を交えて検討していかなければならないと思いました。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

続いて、三遠南信地域社会雇用創造事業の報告いただき、さらに議論を深めたいと思います。それでは内藤様、よろしくお願いたします。

■報告

「三遠南信地域社会雇用創造事業の取り組みについて」

三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA) 事務局 内藤事務局長



SENA事務局から、三遠南信地域社会雇用創造事業の取り組みについてご報告します。

この事業は、内閣府が所管する事業で、SENAが国の募集に応募して採択されたもので、全国から53の事業者の応募があり、そのうち12団体の提案が採用されています。

事業費は7億円で、事業期間は平成22年3月から24年3月末までですが、実質的には平成22年度、23年度の2ヶ年の事業です。事業目的は、自然資源を活用した雇用創造分野、地域づくりによる雇用創造分野、安心安全を確保するための雇用創造分野の3つの分野において、社会起業インキュベーション事業と社会的企業人材創出・インターンシップ事業を行うことで、雇用創造のネットワーク・システムを構築し、社会的企業による継続的な雇用創造を図ることです。社会的企業というのは、内閣府では、「少子化や環境被害あるいは地域の衰退など、そのような社会的な課題について、事業性を確保しながら自主的かつ積極的に取り組むNPO法人等」という定義をしています。

SENAは、「3県にまたがる県境地域の一体化、250万流域都市圏の創造」を三遠南信地域連携ビジョンに掲げていますが、一昨年秋のリーマンショック、あるいは昨今の円高等により、製造業を取り巻く環境が激変をしている上、三

つの地域の県境が接する部分の中山間地域においては、高齢化や過疎化といった問題を抱えていることから、これらを課題と認識し、その解決のために社会雇用創造事業を実施することによって、県境を越える雇用創造のネットワークをつくっていこうと事業に応募しました。

具体的な事業の一つがインキュベーション事業です。現在お勤めの方が企業の中から起業、大都市にお住まいの方を対象としたふるさと起業、あるいは当地域内にお住まいの主婦や学生の方などを対象に社会的企業の起業を支援し、2年間で90人の方の起業を目標としています。

また、もう一つの柱がインターンシップ事業です。現在の経済環境下により職に就いていない方、あるいは学生、シニア層などを対象に、NPO法人などで職場体験研修を行い、社会的企業への就業の支援を行うもので、2年間で研修修了生800人という目標を掲げています。

次に推進体制等ですが、この事業はSENAが実施しているものですが、SENAの内部に、SENA社会的企業人材育成委員会を組織した上で、インキュベーション事業では、コーディネート機関として3地域の産業支援機関に一部事業を委託して実施しており、南信州では飯伊地域地場産業振興センター、東三河ではサイエンス・クリエイト、そして遠州ではテクノポリス推進機構にご協力いただきます。

また、インターンシップ事業では、コーディネート機関を置き、森林に関するNPO法人などの様々な団体のご協力の下で研修生を受け入れていただき、事業を進めているところです。

インターンシップ事業の詳細ですが、1期の研修日数を30日間とし、2年間で6回開催します。それぞれ研修は約3ヶ月の期間内において30日間実施していただきます。研修生を受け入れていただいた機関には、研修を修了した研修生一人につき13万5,000円をSENAから交付します。なお、研修の受講料は無料となっています。

資料集の研修生受入機関の状況、研修生の状況については、若干変更がありましたので、訂正表をご確認ください。研修生受入機関の状況では、全域の第1期は18機関23コース、全域の計は50機関59コース、遠州地域の第1期は7機関7コースが正しく、研修生の状況では、第2期の遠州の申込者77名、第2期の合計の申込者173名が正しい数値です。

次に、社会起業インキュベーション事業の詳細ですが、事業内容は、新たな雇用を創出するために、この地域において社会的企業の創造・事業化を目指す方を支援するものです。具体的にはプラン・コンペティションを実施して優秀な事業計画を提案された方を選定し、その事業計画の策定者に対して、起業研修講座の開催、あるいは中小企業診断士等の企業アドバイザーをご紹介するなど、起業までの支援をしていきます。具体的な支援金額は、法人登記をした段階で、上限220万円を起業支援金としてSENAから提供いたします。

スケジュール等ですが、22・23年の2ヶ年で全体を4期に分けた上で、22年度8月に第1期と第2期の募集をしており、23年度5月に第3期と第4期の募集をする予定です。

このインキュベーション事業ですが、応募の要件は、三遠南信地域における地域内の課題やニーズに対応した社会的企業を起業し、かつ企業性を持つこととしているので、一時のボランティア活動ではなく、継続的に事業が展開できることを条件として、事業提案をいただいているところです。第1期の状況ですが、3地域の合計で26人の方から事業提案をいただき、2次審査を通過した方が現在16人という状況です。

このような形でSENAが内閣府の事業を23年度までの2ヶ年で実施しますが、今後の展開としては、今回の事業が、SENAとNPOなどの研修生受入機関との人材育成のための連携であり、SENAと社会的企業の起業家との連携であることから、こういった活動を2年間進

めていく中で、継続的に三遠南信の流域都市圏を支える雇用を創造するネットワークの構築を考えています。そして、2つ目として、現在、国において検討が進められている新しい公共の担い手として、内閣府の事業が終了した後も、人材あるいは社会的企業に対する育成や支援をこの地域の課題として対応していかなければならないと考えています。

**コーディネーター／財団法人 阿智開発公社
羽場理事長**

それでは、ここからは、活発な議論を期待し、多くの方からご発言をいただきたいと思います。

田原市 鈴木市長

インキュベーション事業ですが、具体的に、こういった事業なのか、例を挙げてください。

三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA) 事務局 内藤事務局長

インキュベーション事業は、自然資源や地域づくり、安心・安全という分野に限られています。1期の16の提案を見ますと、農業の関係などが複数見られたことから、農業の関係が一番特徴的かと思います。また、インターンシップ事業では、やはり中山間地域における森づくりの関係で東三河や遠州の研修生受入機関が多いと感じています。

田原市 鈴木市長

具体的な事業展開は、例えば農業ですと法人組織で立ち上げることになりますか。

三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA) 事務局 内藤事務局長

農業の従事者になりたいという方はインターンシップ事業に多い印象です。インキュベーション事業は、自ら業を起こす形になりますので、1次産品も含めた地域の特産品で事業化し

ようという提案がありました。

**長野県商工会連合会下伊那地区広域協議会
秦会長**

起業を目指している方の平均年齢はどのくらいでしょうか。

三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA) 事務局 内藤事務局長

正確な数字は持ち合わせてはいませんが、インキュベーション事業では、主に30代から50代の方が多かったと思います。

田原市 鈴木市長

田原市は、農業産出額日本一のまちということもあって様々な農業を展開しています。今、田原の35～36歳の若者が設楽町の名倉という地区の荒れた遊休農地を借りて開墾し、5町歩くらいで高原キャベツを生産しています。そこには小屋を建て、シーズンには4人ぐらいの従業員を置いて仕事をしていますが、今年の生産状況は大変好調だったようで、農地を拡大してコーンもつくろうかと考えています。

そもそものねらいは、高価で品質の良い高原キャベツの生産ですが、同時に、この山間地域での生産がうまくいくことで、農地を離れた地元の人たちが帰ってきて、これらの生産に携わるような動きになればうれしいという思いも持っています。この高原キャベツの生産が順調なのは、高原野菜の作り方を地元の農家のみなさんから教えてもらいながら生産をしたためです。田原のキャベツの作り方は知っていても高原キャベツのノウハウはなかったため、高齢の農家の方から教えを請いました。また、このような動きから、田原の若い人たちはかなり行動的になり、作手にも田原の若い人が1人入り込んでいますし、従事者には農業未経験者やブラジル人もいる状況です。今回、農業に必要な水の確保に当たり、井戸の掘削において、地元の

設楽町から多くの補助金をいただけたことは、この取り組みが順調に展開した大きな理由と思っています。一つ参考事例をご紹介します。

設楽町 横山町長



今、田原市長から紹介がありました。元々、設楽町では、地域の人たちが標高900mから1,000mくらいの土地を開拓して、高原キャベツをつくって成功していました。ところが高齢化が進行したことで農業を続ける人がいなくなり、農地は荒れてしまいました。そこに田原市から販売ルートやノウハウを持つ人たちが入り、設楽町で高原キャベツの生産をはじめました。農地は荒れ放題でジャングルのような状態でしたが、田原の若者が、毎日、毎日、日が暮れるまで一生懸命開墾し、きれいな農地を取り戻しました。ただ、高原と温暖な田原ではキャベツの作り方が違ったため、地元の人たちがやる気のある田原市の若者に教え、できあがったキャベツは田原の若者が販売する形を整えてきました。今、ちょうど3年目を迎えたところです。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

まさにマーケティングと高原野菜のノウハウ、人情等がうまく融合したモデルです。

他にもご意見をいただけますでしょうか。

根羽村 小木曾村長

今、人口1,200人の根羽村には、140人のIターン者が来ています。村の面積90平方kmの92%が

森林であるため、林業を中心に、森林を生かすしか村の生きる道はないと考え、新しい産業を創出し、雇用の拡大に取り組んでいます。消防団を退団する人はいますが入団する人はいないという状況から、何とか若者定住を目指そうと「青空のもとで働いてみませんか」というキャッチフレーズで就業者を募集し、200人程の応募者の中から10人を採用しました。

森林林業において、住宅と設計士、工務店、そして製材工場が一体となって「伊那谷の森で家をつくる会」をつくり、設計士から要求・要望のある用材を生産するなど、お互いに情報を交換しながら製材を始めました。国から「緑の雇用」という応援をいただきながら、全く素人の若者たちが3年間取り組んでいます。毎年、新しい青年たちが村へ住民票を異動してくれるようになり、消防団も60人の定員のところ75名まで増えてきました。このことから、住宅と就職先、そして給料の確保がしっかりしていれば都市部からでも若者が来てくれることを実感しています。



また、村には矢作川の水源があることから、下流域の豊田、岡崎、安城、刈谷、さらに117キロ先の太平洋の一色町まで、「流域は一つ、運命共同体」を合言葉に、上流、中流、下流の流域連携や交流の仕組みができています。大正3年から、下流の企業、自治体、住民のみなさんに上流の水源涵養林を持っていただいております、企業のみなさんからは、森林整備のために、毎年100万円ずつ応援をいただいております。さらに、

森林整備や村の植樹祭の際には、下流域の住民、自治体、企業のみなさんが約300人も村を訪れてくださり、たいへん感謝しています。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

たくさんの方が入ってきたということですが、村のお祭り、自治会や組合等への参加状況はいかがでしょう。

根羽村 小木曾村長

採用条件として、住民票の異動、消防団活動や地区の自治会、組合、町内のおつき合い、祭りにすべて参加することとしていて、それができる人しか村には来ていただかないことにしていますので、うまくいっています。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

今、限界集落などの様々な課題がありますが、冠婚葬祭、地域とのおつき合い、あるいはお祭りの継続が、若者が入ってきたことで持続可能な形で、再生産されていると理解してよろしいのでしょうか。

根羽村 小木曾村長

全くそのとおりです。今では、祭りの笛や太鼓も、昔から生まれ育った青年たちと同じようにできるようになってきました。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

住民のみなさんや経済界のみなさんから、いかがでしょうか。

三遠南信地域を学ぶ会 仲井会長

午前中に開催された住民セッションで、「祭りと伝統文化」の分科会へ参加しました。その中で、東栄町の太鼓のプロ集団「志多ら」の話が

ありました。「志多ら」のみなさんは、東栄町の御園の学校跡に本拠地を置いて10年になります。今は、若者ばかり18人が住んでいますが、これまでに、地元嫁いた方たちもいて、その子どもたちが大きくなったおかげで、地元の小学校が廃校から免れたという事実もあります。



「志多ら」の太鼓のリズムと地元の花祭りのリズムは全然違うようですが、「志多ら」のみなさんも地元の花祭りに参加して、花祭りの太鼓を叩き、今では子供たちも子供の舞を舞っているそうです。東栄町では別の形で新しい住民が増えたという事例を紹介しました。

磐田市商工会 野寄会長



磐田市は、三遠南信地域の東岸で、輸送機器のウエイトが高い地域です。現在、昨今の円高などの影響もあって、輸送機器関連企業がどんどん外へ出ている状況があり、当商工会会員の2次請け業者や3次請け業者は、大きな危機感を感じています。また、新たなものをこれから模索していかなければならないという課題もあり、日々悶々としております。

私は磐田市の竜洋町という天竜川の一番川下

に住んでいます。天竜川のすばらしい水で我々は生まれ育ったわけですが、我々の先人たちは、諏訪湖から天竜川の河口まで80里、さらに江戸まで80里というちょうど中間に位置する地域で、天竜川の上流のスギ、ヒノキをいかだで下流に運び、それを昔の掛塚港というところから廻船で江戸へ運んで、たいへん繁栄をしたそうです。今、お祭りでは掛塚まつりに力を入れており、このごろ県の無形文化財をいただきました。そんな歴史や資源を持つ地域ですが、この景気の曲がり角に、この三遠南信の中から、ぜひ雇用のチャンスであるとかアイデアをいただき、この苦難の時代を何とか切り開いて頑張っていきたいと思っています。

浜松市 鈴木市長



それぞれみなさんがいろいろな取り組みをしていますので、それをこれからどう生かしていくかということが大切です。この地域には価値ある資源が豊富ですが、地域の中にある自分たちが気付いていないものもあると思います。私は浜松市文化審議会の委員をやっていますが、委員のみなさんは、この地域に文化的財産が多いことをたいへん高く評価されています。ただ、そういったすばらしい財産があるものの、まだまだ生かし切れていないなと感じます。

やはり、こうした様々な資源を今後どういう切り口でどのように生かしていくかがとても大事になってくると思います。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

それでは、最後にアドバイザーからまとめの発言をいただきます。

アドバイザー／三遠南信アミ 三宅理事



住民セッションの「中山間に生きる」をテーマにした分科会において、北遠地区の方が、「自分たちはいわゆる厳しい条件の中で中山間に生きる専門家集団だ。そういう気概を持って、自分たちは様々な地域資源の魅力を発信していく。」という前向きな発言がありましたので紹介しておきますが、この分科会でも、上下流域での農業の連携や、上流域の人に対して下流域の人が感謝して協力してくれていることがうれしいというお話、さらに資料集で紹介されている南信州観光公社の地域資源を活かした体験型観光の取り組み、それから今後も継続して保全していく古道、歴史街道を生かした取り組みなどがあることを知りました。こういった事例や取り組みなどから、この地域では、地域に散在している歴史風土や地域資源を組み合わせ、三遠南信における新しい観光交流型の仕掛けをつくり、三遠南信地域ならではのニューツーリズムを生み出していくことができると思います。

また、住民セッションの中で「地域で自分らしく、生き生きと暮らしたい。」という発言が繰り返されましたが、地元から地域の魅力を掘り起こし、それを体系化させて発信していくことで、三遠南信地域でも、地域外の人が暮らしてみたいと思うような暮らしのブランドというか、

他の地域にはない優位性を持った地域のブランド化ができるのではないかと思います。

今回の「風土」分科会のテーマには、歴史風土の保全もあります。三遠南信地域連携ビジョンの風土分野のプロジェクトに挙げられているとおり、地域資源を生かすには、その保全も重要となります。私たち三遠南信アミでは、県境を越えて人と地域をつなぐということで、情報発信や連携あるいは交流事業に取り組んでいますが、地域にある民俗芸能など記録はビデオや写真集などに保存されてはいるものの、喪失や劣化してしまう前に、また情報化社会の中で情報発信していくためにも、早急にデジタル化が必要です。

SENAやNPOなどが協働して、地域の誇りを次代へ継承するといったマインドを持って、活動を拡充していかなければいけないと思います。

コーディネーター／財団法人 阿智開発公社 羽場理事長

三遠南信自動車道のように大きな道もあれば、古道の秋葉街道、あるいは遠州街道、あるいは中馬街道のような、消えてなくなりそうな道もあります。風土が対象とするところは、まさにその歴史、自然、文化、また人情であると思います。三遠南信自動車道やリニア中央新幹線等は、しっかりつくっていく努力をしながらも、一方で人々の心にある三遠南信地域に伝わる文化を大切に、そして決してなくしてしまわないように、みなさんと力を合わせて取り組んでいかなければならないという結論でまとめさせていただきます。

みなさま、大変ありがとうございました。これにて閉会とさせていただきます。

「山・住」合同分科会では「流域定住の推進に向けた体制の構築と安全・安心な地域づくりの実現」をテーマに、議論が進められた。

「浜松市消防ヘリコプターの広域運用について」、「松川町空き家情報バンクによる定住促進」、「東三河シニアリフレッシュ事業による中山間地域への移住・定住促進について」の3つの報告を踏まえて、三遠南信地域の広域連携による安全・安心の確保とその重要性、また、各地域、あるいは広域的な定住施策の必要性について、意見が交わされた。

コーディネーター	豊橋技術科学大学	建設工学系教授 地域協働まちづくり リサーチセンター長	大貝 彰
アドバイザー	社団法人東三河地域研究センター	常務理事	戸田 敏行
報告者	浜松市消防局警防課消防航空隊	隊長	前川 士朗
	松川町	町長	竜口 文昭
	東三河広域協議会	事務局長	鷺坂 浩孝
行政	新城市	市長	穂積 亮次
	平谷村	村長	小池 正充
	売木村	村長	松村 増登
	豊丘村	村長	吉川 達郎
	大鹿村	村長	柳島 貞康
経済	鳳来商工会	会長	片桐 幸信
	喬木村商工会	会長	市瀬 成夫
住民	特定非営利活動法人がんばらまいか佐久間	事務局長	河村 秀昭
	天龍村柚餅子生産者組合	組合長	関 京子

(敬称略)

■はじめに

事務局

本日、「山・住」合同分科会のコーディネーターをお務めいただくのは、豊橋技術科学大学建設工学系教授で、地域協働まちづくりリサーチセンター長の大貝彰教授です。それでは、ここからは大貝教授に分科会の進行をお願いします。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授



豊橋技術科学大学の 大貝と申します。今、豊橋で、この三遠南信地域を対象にした環境問題

や中山間地域問題に関する様々な研究を進めていることもあって、コーディネーターを務めさせていただきます。

初めに、本日のこの合同分科会の進め方について簡単にご説明を申し上げます。

最初に、前回の第17回サミットの議論を確認した後に、まずは浜松市の消防航空隊の前川士朗隊長より「浜松市消防ヘリコプターの広域運用について」ご報告をいただきます。続きまして、松川町長の竜口文昭様より、「松川町の空き家情報バンクによる定住促進について」ご報告をいただき、最後に東三河広域協議会事務局長の鷺坂浩孝様より、「東三河シニアリフレッシュ事業による中山間地域への移住・定住促進について」報告をいただきます。議論といたしましては、この三遠南信地域の安心・安全について、そして中山間地域対策のための連携体制、あるいは流域の定住の促進、さらに、それに向けた情報の一元化など、この連携体制に焦点を当てて議論をしたいと思います。まずは前回、第17回の三遠南信サミットの「山・住」合同分科会において議論された内容について、事務局から報告をいただき確認をしたいと思います。

事務局

要旨として次の3点がまとめられていますので、報告します。まず1点目ですが、広い三遠南信の中で情報を得られない状況にあるが、広報紙、情報誌等で問題解消になる。また仲介という形態の交流促進の方法がある。2点目ですが、定住を促進していくには、働く場、企業の活動や県境を越える緊急医療といった各地の機能を決めて定住を図っていくことが必要である。3点目は、県境を越えてデータを集め、政策を立てることが必要である。SENAの先見的な要件であり、構想から計画への政策実施機関としての期待がとても高い。県境を越える政策主体となることがSENAの役割ではないか。以上です。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

それでは早速ですが、浜松市消防航空隊前川士朗隊長より、「浜松市の消防ヘリコプターの広域運用について」ご報告をいただきます。

■報告

「浜松市消防ヘリコプターの広域運用について」

浜松市消防局警防課消防航空隊 前川隊長



浜松市消防局警防課消防航空隊隊長の前川と申します。それでは、浜松市消防ヘリコプターの広域運用についてご説明します。まず、浜松市消防ヘリコプター「はまかぜ」ですが、平成17年7月に12市町村との合併により拡大した市域の消防力の充実と強化を目的に導入されました。機体はフランス・ユーロコプター社製のAS365N3型で、座席数は14。最大巡航速度は時速286キロメートル、最大航続距離は850キロメートルです。

消防航空隊は、平成22年4月に仮運用を開始し、5月から正式運用を始めました。活動は、林野火災の空中消火、遠隔地からの救急搬送、高度な治療が必要な傷病者の広域搬送、山岳遭難、水難事故の捜索救助などのほか、ヘリコプターテレビ伝送システムを活用した情報収集活動などです。現在、10月18日から車の車検に当たる耐空検査でドックインしていて、ヘリコプターは大阪にあります。仮運用を開始した4月から10月17日までの約半年の出動件数は、72件を数えます。内訳は、救急45件、救助18件、

火災8件、その他1件です。このうち救急では簡易ショックの必要な傷病者を京都まで搬送した事例、救急車の搬送では病院まで1時間以上かかってしまう状況で出動し、約10分で搬送した事例などがあります。また、ドクターヘリを運行している聖隷三方原病院との協定により、ドクターヘリが出動中に浜松市内で、現場に医師が必要な救急事案が発生した場合には、医師を搬送することになっているため、これまでに7回ほど出動しています。さらに、山岳の救助では7月末に天竜区水窪町黒法師岳付近で発生した遭難事故に出動し、消防の山岳救助隊員の投入と捜索を実施し、無事、遭難者を救助しています。

次に、航空消防応援協定についてですが、これは「はまかぜ」を三遠南信地域の災害時に県域を越えて活用するもので、各市町村と協定を結び、平成22年7月1日から実施しています。なお、航空消防に関して、県域を越えて市町村が協定を締結するのは全国に例がありません。この協定の内容ですが、ヘリコプターが必要な災害が発生した市町村は、その地域を管轄する県の防災ヘリコプターを第一に要請することとなりますが、県防災ヘリが点検中や他の災害で出動中など要請に応じることができないとの通報があった場合、また、県防災ヘリだけでは災害を防除することが困難な場合、さらには県防災ヘリが対応できない活動を要請する場合には「はまかぜ」を要請することが可能となります。次に経費負担ですが、これは要請側の負担となります。その額は、ヘリコプターの燃料費、隊員の手当などの直接経費で、具体的な額としては、1時間30分の活動を実施した場合には、概算で燃料費6万1,500円、隊員5人分の出動手当1,000円となります。

次に、今までの実績ですが、今のところありません。ただし、協定を結んだ後に、各消防本部から提出された事前計画により、着陸場所の調査を実施し、ルートや現地の地形等の把握に

努めています。また、平成22年7月30日には、三遠南信地域の13の消防本部が浜松市に集まり、三遠南信地域消防連絡会を開催しました。この会は、基本的に毎年1回、浜松市で開催しますが、開催希望消防本部がある場合はそちらを優先することとしました。なお、事務局は開催市とし、基本的には浜松市に置くことになりました。

続いて合同訓練ですが、これまでに2回実施しています。1回目は、10月3日に浜松市北区三ヶ日町において、林野火災を想定した長距離送水訓練を実施しました。参加機関は、4機関です。2回目は10月13日に天竜区佐久間町において、集結訓練と佐久間ダムを災害地点とした図上訓練を実施しました。いずれも消防ヘリ「はまかぜ」が参加しています。

最後に、浜松市消防ヘリポートからの所要時間ですが、最大巡航速度時速286キロメートルでの各地域までの飛行時間について、資料に表しています。この地域はとても近く、実際にヘリポートから飛び立つと、東三河、南信州の山々がすぐそこに見えます。有事の際にはお役に立てるよう、浜松消防としてしっかり準備をいたします。以上でご説明を終わります。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

続いて、松川町の竜口町長より、「松川町の空き家情報バンクによる定住促進について」ご報告いただきます。

松川町 竜口町長

みなさん、こんにちは。松川町長の竜口でございます。「松川町空き家情報バンクによる定住促進」と題し、現在の取り組み状況について、事例報告をさせていただきます。

松川町は、南信州地域の一番北に位置し、産業は、果物を中心とした果樹農業、精密機器や電子部品などを中心とした製造業によって発展し、現在に至っています。人口は1万3,600人余

りで、人口減少と少子高齢化の波を受けている中山間地域です。この人口の減少は、住民生活の活力の低下や地域コミュニティの弱体化を招くばかりか、地域経済や財政基盤へも大きな影響を及ぼし、地域の存立にかかわる深刻な問題となっています。そこで当町では、人口の流出や減少を極力抑制して定住化を進めることを目的に、平成20年に産業振興課内に定住対策室を設置しました。現在、職員2名を配置し、定住並びに人口増対策に関して、役場内の各課にわたる取り組みを進めています。そんな中で、当町は空き家情報バンクを平成20年12月に開設し、現在、空き家の登録件数が16件となっています。開設以降、利用の成立から移住に至った実績は4件となっています。空き家情報バンクの詳細な状況については、担当の米山産業振興課長からご説明いたします。

■報告

「松川町空き家情報バンク」による定住促進について

松川町産業振興課 米山課長



松川町産業振興課長の米山忠章です。空き家情報バンクの取り組み状況について、ご報告をさせていただきます。空き家情報バンクについては、全国あるいは長野県、それから、この南信州地域の幾つかの自治体でも同様の取り組みをされています。松川町が特段、この制度に関して特別な取り組みを行っているわけではありませんが、実績や課題、あるいは今後の取り組

みなどについて説明いたします。

松川町は、南信州地域の北部に位置し、南と中央アルプスの両アルプ스에 囲まれ、リンゴ、ナシ、近年ではサクランボ栽培など観光果樹農業が盛んな地域です。今の時期はリンゴの「ふじ」の最盛期に入っており、町内の観光農園では一年で一番忙しく、賑やかな時期を迎えています。明日の三遠南信グルメサミットでは、特産のリンゴ、ナシ、それから、新しい名物の「ごぼとん井」も販売します。また、町の観光資源には、来年で開業20年目を迎える町営の温泉宿泊施設「清流苑」があり、入湯、宿泊など、年間およそ20万人から22万人にご利用いただいています。果物観光とともに町の交流活動の一翼を担っているこの施設は、今年度に第2号源泉の掘削に成功し、平成22年11月末に新しい温泉でのリニューアルオープンを予定しています。このように、町にある地域資源を求めて多くの方が松川町へ観光に訪れています。また、近年人気が高まってきたワーキングホリデーや、南信州観光公社との連携による学生の農業体験ホームステイも農家のみなさんの協力を得て積極的に行っています。さらに、農業における後継者の就農状況については、この南信州地域の中では特に定着率が高い状況で、若手後継者のグループの活動も盛んに行われています。地域連携では、町の農業振興と観光交流の拠点施設の農村観光交流センター「みらい」という施設を中央自動車道の松川IC近くに平成20年6月に開設しました。営農支援センターの活動と町の観光案内所、さらに南信州地域の北部5町村の観光案内も行っており、今後も施設の機能の充実を図る予定です。

さて、本題の空き家情報バンクの取り組みですが、当町では、平成20年に定住対策室が設置され、定住と人口増対策を進めてきましたが、I・J・Uターンや田舎暮らしを考えている方への案内として、町のホームページに設けた定住支援サイトで情報発信を行ったところ、定住

を考えているみなさんなどから、空き家に関する情報を求める問い合わせがたくさんあったことから、受入体制の確立のために、平成20年12月に松川町空き家情報バンクを開設しました。

この空き家情報バンク制度は、空き家の所有者で賃貸または売買を希望者する方と、空き家の利用を希望する方の双方の登録を行った上で情報提供を行い、当事者間において交渉から契約を行っていただくものです。現在の空き家所有者の登録件数は16件で、内訳は町外の所有者の方が10件、町内在住の所有者が6件です。現状の課題としては、潜在的な物件が多いことが予測されるものの、その特定や情報の把握が難しいことや、空き家の所有者が不在で所有者へ直接呼びかけることが難しいことなどが挙げられます。そこで、本年度は固定資産税の納税通知書の中に空き家情報バンクのチラシを同封してPRをした結果、登録が9件増加しました。一方、現在、賃貸や購入を希望する方の利用者登録は41人で、そのうち県外の方が29人です。年齢構成は、30代から40代が22人で最も多くなっています。また、情報発信活動として、田舎暮らしの情報誌への掲載等を積極的に行った結果、問い合わせ等が増え、希望者の現地確認のために担当者は、土曜、日曜、祝日の対応をしている状況です。

なお、現在までの契約成立件数は4件で、いずれも賃貸契約です。4世帯のうち、特に若い方の移住の際には、働く場の相談もあったことから、この空き家情報バンクとともに、無料の職業紹介事業を行っており、町内の事業所への就職実績も出ています。また、最初に移住をされた方は、既に移住から1年が経過しますので、近く個別に面談をして、感想などをお聞きする予定です。

今後の取り組みについてですが、移住や田舎暮らしを考えている多くの方の候補地として、信州という地は大きなウエイトがあると感じていますが、その中でも南信州地域については、

降雪量が少ないということや、比較的暖かいということから、魅力的な移住先の一つと位置づけられているようです。空き家の有効活用により、移住や定住が促進され、町内の活性化につながるよう、今後もこの空き家情報バンクとともに、無料職業紹介所の事業等も充実を図っていきたいと考えます。以上で、松川町の空き家情報バンクの取り組みの事例報告とさせていただきます。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

ただいまのご報告について、何かご質問はございますか。

新城市 穂積市長

固定資産税の納付書にチラシを入れたところ9件の登録があったということですが、応募された方は、それまで情報をご存じなかったということでしょうか。

松川町産業振興課 米山課長

町外在住の方もおられることから、詳細は把握していません。全部に情報を入れさせてもらい、返事が返ってきたという状況です。

天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

空き家の問題は天龍村にもあります。普段は空き家でも、盆や正月、お祭りには帰って来て使うため、貸してもらうことができません。ただ、そのまま置いておくと、どんどん傷んでしまうので心配です。松川町では、空き家を部分的にお貸ししているのでしょうか、それとも1軒丸ごとでしょうか。

松川町産業振興課 米山課長

敷地から丸々1軒貸していただくのが主流です。それから、私たちも物件を見て、完全に空き家だと思って所有者に当たりますが、おっしゃるとおり、荷物を置いてあるとか、使いた

いということで、お断りされるケースが多くあります。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大員教授

それでは、続きまして、東三河広域協議会鷺坂事務局長より、「東三河シニアリフレッシュ事業による中山間地域への移住・定住促進について」ご報告いただきます。

■報告

「東三河シニアリフレッシュ事業による中山間地域への移住・定住促進について」

東三河広域協議会 鷺坂事務局長



豊橋市の広域推進課の鷺坂と申します。

私は、東三河の8市町村で構成する東三河広域協議会という組織の事務局長もしており、今日はその立場でご説明をさせていただきます。

東三河広域協議会は、東三河の8市町村で構成しており、賛助会員には商工会議所、商工会の皆様に加わっていただいています。平成5年4月に設立して以来、広域交流活動を進めていますが、ちょうど2005年に開催された愛知万博の終了と同時に少し方向を転換して、東三河の広域的な課題を勉強・研究し、その課題の解決をしていこうということで、広域地域医療、広域消防、広域合併・道州制、三河材の活用、東三河の将来像といったものを研究してきました。現在は、「東三河のシニアリフレッシュ事業」に取り組んでいますが、団塊の世代をどう地域へ取り込んでいくかに視点を当てるとともに、どう中山間地域を活性化していくかの研究を進め

ています。

事業の背景ですが、東三河は、南部は海に面し、北部は山を抱える地域で、南部と北部とも互いに協力し合って地域づくりに取り組んでいます。しかし高齢化がかなり進んでいるのが現状です。また、国立社会保障人口問題研究所などが想定した25年後の2035年人口では、平成17年国勢調査のときの8市町村合計人口の91.2%ぐらいまで減少するとされ、人口構成においては年少人口が62%程度に減少し、65歳以上は50%以上に増加するということが想定されています。こうした人口減少や高齢化により、地域産業である伝統産業の喪失や衰退が進むことが考えられます。一方で、都市部には、多くの団塊の世代の人たちが生活していますが、こういった都市部のシニアの豊富な経験や技術ノウハウの有効活用や生きがい作りも課題となっているほか、生産年齢人口の減少による労働力不足も懸念されています。

こういった背景の下、シニアリフレッシュ事業を展開していますが、まずは、都市部のシニア層を東三河の中山間地域に呼び込んで、心身ともにリフレッシュしてもらうことを目的に、滞在型の体験プログラムを実施します。次に、都市部の体験と違った非日常的な体験などの地域体験や職業体験の機会を提供し、新しいライフスタイルを提案します。それが生きがいへと変わるなど、新たに就業に意欲を示すシニアの発掘も行います。この取り組みにより、二地域居住や移住、定住に結びつき、地域の活性化が図られることを期待しています。

続いて、定住促進のための事業イメージですが、まず前段として3泊4日程度の地域体験・職場体験により、伝統産業の魅力を感じてもらいます。そしてファーストステージにおいて、長期滞在のメニューとして、酪農や林業などに親しんでもらいます。その中から、もう少し地域で深くかかわってみようという人が現れた段階で、セカンドステージの二地域居住に取り組

み、最終的なサードステージでは、移住・定住に結びつけるというものです。こういった仕組みで高齢者の雇用の創出をしながら、伝統産業の復興をしていくことが、中山間地域の自立モデルとなることを期待しています。

この事業は平成19年度から取り組みをはじめましたが、山梨県北杜市、九州や山陰地方、南信州の事業などを参考に勉強し、20年度は地域資源と地元住民や都市部のシニアの意識調査を行い、その可能性を模索した上で平成21年度に調査モニター事業を実施しました。この調査モニター事業は3泊4日程度の短期事業でしたが、今年度は短期事業に加えて、長期滞在型の地域産業支援プログラムを実施しています。このプログラムは1週間から1ヶ月程度の長期的な事業で、60歳の定年を迎える前の50歳代の方に参加していただき、東三河の自然に触れてリフレッシュしてもらい、そこに楽しみを見つけ、少し長い期間滞在しながら、少しの収入を得るようなところを目指しています。そして、都市部のシニアの方たちが現役時代に培った技術やノウハウを地域で活用していただけることを期待するものです。実際には、都市部のシニアの方は、「以前、私たちはこういう山間地に住んでいて、そこで炭焼きなどもやっていた。子供のときにやった過去の体験をもう一度実現化するのは、とてもおもしろい。」とおっしゃいました。こうしたことから、酪農型の楽しい農業や、森林といやしの再生体験モデルなどを実施しながら、事業を進めていきたいと考えています。もちろん東三河の効果としては、奥三河の地域経済、地域産業の活性化につながることを期待しますが、都市部のシニアの方たちが、こういうところで暮らしてみたいという思いを実現できるように地域と結びつけていきたいと考えています。また、そのシニアの方たちが第二の生産年齢人口となって、地域の生産年齢人口の減少を抑えることに期待したいと思います。

次に、事業内容をご紹介します。都市部のシ

ニアの方に奥三河まで来ていただくために、まずは奥三河のいろんな名人を探しました。炭焼きの名人、酪農の名人、山菜とりの名人、蜂追いの名人などの人たちとコミュニケーションを取りながら、3泊4日程度の楽しい体験事業を行い、そこを入り口として参加者の関心と満足度を高めることにしました。現地では、林業や酪農、炭焼きなどの体験プログラムを組み、東三河の南部では、東京の寅さん記念館や新城市の軽トラ市などでの事業のPR、報道機関へ積極的に露出するプロモーション活動を実施しました。その結果、21年度に組んだ5種類のプログラムで定員の50名を満たすことができました。最終的には、突然の体調不良により3名の方がキャンセルされ、47人となりましたが、参加された方の満足度がとても高く、アンケートでは、全員が「また参加したい」と回答しています。

22年度は、3泊4日程度の体験プログラムに加えて、少し長く滞在をしてみたいという方をみつけるために、1週間から1ヶ月程度の長期滞在型の地域産業支援プログラムを組んで、開催しています。短期プログラムでは炭焼き、森の中での蜂追い、川魚の養殖などを体験していただき、長期滞在プログラムでは、新城市の大東牧場での酪農体験で1週間以上のプログラムを組んだところ、6人ほどの申し込みがありました。また、林業体験は、30日間しっかり働きたいという人たちが3人集まり、既に体験をしています。

続いて、都市部のシニアの方たちと地元の受け入れ側の意識のマッチングについての調査では、都市部のシニアの方たちは、賃金はなくても、プログラム内容によって参加するという意見が73%とたいへん多く、体験の満足度に関心があることがわかりました。また、受け入れ側の奥三河北部の事業者42人からは、「恒常的に活用してみたい」、「繁忙期に活用してみたい」、「検討してみたい」という前向きな回答が46%あったことから、地域産業とシニア人材をうまく

マッチングさせていくことで、地域産業の支援につなげることができることがわかりました。

最後に、今後の課題ですが、事業を効果的、継続的に運営するための体制が必要と思われます。東三河広域協議会は8市町村の団体ですが、行政であることなどから、様々な課題があり、継続的な事業の実施が厳しい状況です。また、今後は、企業のCSR活動、社会貢献活動との協力体制を構築して、企業の退職者へのセカンドライフを提案していきたいと思います。さらに、都市部のシニア層へのPR、プロモーションについても試行錯誤する中で取り組んでいきたいと考えます。東三河は温暖な気候で、日本の中央に位置することから利便性もよく、名人がたいへん多い地域ですので、できるだけ地元を巻き込んで事業を展開し、地域の一体感を高めながら、「極・奥三河」というキャッチコピーの下、このシニアリフレッシュ事業を進めていきたいと考えています。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

ただいまの報告についてご質問をお受けします。ちなみに、愛知県外からの参加者はどれくらいですか。

東三河広域協議会 鷺坂事務局長

愛知県内が大変多い状況ですが、去年の実績では、47名中、豊橋が10名、名古屋が9名、浜松が3名、また、兵庫県宝塚市の方、静岡県静岡市の方、長野県長野市の方もいらっしゃいました。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

三遠南信地域以外の参加者が割合としては多い状況ですね。

東三河広域協議会 鷺坂事務局長

プロモーション次第なのかもしれません。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

それでは、トップ対談、3つのご報告を踏まえながら、特に、流域定住、あるいは安心・安全という視点から議論を進めたいと思います。

まずは、最初の消防ヘリの広域運用に関連して、この地域の安心・安全な地域づくりについて、どういった視点を持って、何に留意しながら取り組んでいくべきか、それぞれの立場でご意見いただきます。



売木村 松村村長

南信州の売木村村長の松村です。実は昨日、売木村へ浜松の聖隷三方原病院からドクターヘリに来ていただきました。消防からの連絡が入り、村役場の駐車場に降りてもらいましたが、当村では、2例目になるかと思います。これも三遠南信の取り組みの中、浜松市さんのご協力とご理解によるもので、たいへん感謝しているところです。そんな中、山間部に位置する当村の道路状況を考慮し、空路搬送の充実を図るため、近々ヘリポートの建設に伴う入札を行なう予定で、村の中心部から5分の場所に、大型ヘリコプターも離着陸できる2,300平米のヘリポートを用意する予定です。

新城市 穂積市長

新城市長の穂積です。浜松市消防ヘリの話がありましたが、ドクターヘリ等については、当地域も浜松市側に大変お世話になっており、これまでに命を救われた事例もたくさんあります。

それと密接に関連をしますが、当市で来年6月、市内に公設の助産所を設置することになりました。これは聖隷三方原病院との県境を越えた連携契約関係の中で設置するもので、全国的にも珍しいと思います。

設置の背景についてですが、全国的な産婦人科不足の中で、総合公立病院の新城市民病院でも平成18年から産婦人科を休診せざるを得ない状況となったため、新城から北設楽郡4市町村で形成する愛知県の東三河北部医療圏の中に分娩可能な病院がなくなってしまいました。年間約350件の分娩実績があり、多くの新城市民と北設楽住民、さらには佐久間や水窪などの北遠の住民も利用していましたが、分娩する場所が圏域内にないことから、圏域の妊婦は、数時間かけて豊川、豊橋、岡崎、浜松の産婦人科にかからなければならない状況となり、豊川市では産科体制もパンク寸前という状況となっています。

こうした中、新城市民病院の看護師の中に、助産師の資格を持っている者がいることから、公設で助産所を設置して、出産経験のある妊婦で正常分娩の方を受け入れることとしました。数年にわたる研究結果では、新城市民病院に院内助産所をつくるのが理想とされていましたが、現状では困難なことから公設の助産所を設置して、カバーすることとしました。一方、医療法において、助産所には必ず嘱託の産婦人科の医師を置き、いざというときは30分以内で駆けつけられなければならないという規定があることから、聖隷三方原病院の中の公設助産所「たんぼぼ」に当市の助産師を研修として派遣するなどの連携を行いながら、県境を越えて聖隷三方原病院と嘱託関係を結びました。なお、助産所の場所は、聖隷三方原病院から30分以内の場所となることから、鳳来地域としました。これで、北設楽も含めた奥三河のみなさんにもご安心をいただき、少しでも負担を少なくすることができるかと思えます。結果がこのような連携となったのは、新城市民病院には浜松医科大か

ら院長を送っていただいていることもあります。やはり三遠南信の中でいろいろな協議をしてきたこと、我々の行政側に心理的な壁がほとんどなかったということが大きかったと思います。今後は、住民の心理的な壁が取り払われていくことによって、もっと実質的な連携、協力というのができてくるだろうと思います。また、この事例を参考に重点プロジェクトの一つである「医療分野の県境を越えた連携の促進」が図られ、さらに協力関係が深まることを期待します。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

移住や定住には、やはり安心して安全が条件で、医療、教育、あるいは子育て環境の充実が基本だと思えます。そのため、必要に応じて県境を越え、あるいは自治体間で連携する動きが、少しずつ、この三遠南信の中でも進んできているのかなと感じました。

そのほかにご意見などいかがでしょうか。

天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

天龍村は長野県の最南端で、三遠南信の県境に位置しており、隣は浜松市天竜区水窪町、愛知県豊根村ということから、いざというときは浜松からへりで助けに来ていただけるということは、中山間地域の住民にとってたいへん安心です。また、村には、都会からの移住や若い人たちの定住の希望がありますが、産院がないことや病院が遠いといった理由で実現していませんでしたが、このような連携がうまく広がれば、移住や定住につながると思われれます。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

続いて、移住や定住について、議論をしたいと思えます。松川町では「空き家情報バンク」を活用して定住を進めていく取り組みの中で、物件の登録と利用者の登録などに課題があるとの報告がされました。そして、東三河では、「シ

ニアリフレッシュ事業」により、段階的に移住・定住に結びつける取り組みの中で、これからどのように事業を継続し、企業との連携や情報発信をしていくかなどの課題があったかと思いますが、これらの課題などに焦点を当てながら、移住や定住について議論したいと思いますが、いかがでしょうか。

豊丘村 吉川村長



豊丘村村長の吉川です。このような交流や連携が進んでいますが、当村へ移住された方を見ますと、圏域の中で浜松や豊橋などから来ていただけない状況で、こちらから出ていく方が多いようです。この原因には、やはり道の問題だけでなく、気候の問題もあり、高齢になると子供が住んでいる暖かい浜松へ行くという事例が多いようです。また、豊丘村においては、河岸段丘により形成された海拔420メートルから約750メートルまでの地域に集落が点在している状況から、若い人が結婚しても海拔の低い地域や他町村へ移住してしまうことも課題となっています。集落が過疎化あるいは高齢化することで、地域活動、区や自治会の運営などにおいて一人ひとりの負担が増しています。行政としても均等な助成をするなど不便にならないような手当をしていますが、若い人たちを留めるまでに至らないのが悩みです。

大鹿村 柳島村長

大鹿村長の柳島です。当村でも松川町と同じように情報を流し、過去に何人か転入された方

がいます。シニアに限らず、若い方もいましたが、若い方は昨今の農薬などによる食の危険性や電磁波等の問題から希望を持って村へ来られる方もいますが、いざ住んでみると村内に職場がないために定住してもらえない状況です。村には、工業的な職場が一切なく、農林関係に限られますが、これも厳しい仕事であり、なかなか夢のようにはいかないのが現実で、当村から、天竜川流域市町村への通勤では、距離や道路環境の課題も抱えています。また、当村では、県の防災ヘリ、ドクターヘリが月に平均2回ほど救急出動していただいています。今までには、山梨県や静岡県からも来ていただき、たいへん感謝しております。ただ、ヘリは天気の良い昼間であることが条件ですので、やはり、大鹿村の場合は道路整備が欠かせないと考えます。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

やはり働く場がないことが、若い人に来てもらえない大きな課題という話でした。また、働く場が集積している地域まで通勤するためや救急医療環境の整備のため、道路整備が必要ということでした。一方で、三遠南信は豊富な森林資源があるので、森林保全の必要性と林業における雇用の場をつくることもこれからの大きな課題と思いますが、このあたりについて、ご意見いかがでしょうか。

鳳来商工会 片桐会長

鳳来商工会長の片桐です。当地域の地場産業は昔から林業、木材業ですので、木材が復権すれば地域は活性化します。それには、国あるいは地方公共団体、そして自治体が内地材をしっかり使う体制をつくる必要があると考えます。一方で、地元事業者のうち、小売業者が特に困惑しているのが消費人口の減退です。報告にありましたシニア世代が地域へ入り、定住できなくても週のうち2、3日滞在してもらえれば消費は違ってきますので、鳳来の別荘などを活用

して、山の仕事や炭焼きなどの楽しみを見つけていただくのは大変いいのではないかと思います。また、シニア世代には、奥三河に昔から伝わっている民俗芸能などの行事にも参加いただき、村に溶け込むこと意識を持ってもらうことが大切だと思います。それから、当地域では、独身者が多いことから、農協や商工会の青年部が中心になって若い人たちのミーティングの機会を増やし、少しでも人口を増やす取り組みも行っています。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

企業連携という点について、ご意見ございませんか。

売木村 松村村長

企業連携に関連して事例を紹介します。売木村へ進出していただいた企業のことですが、当地域へ進出する際に「60歳以上の方を雇用します。給料は、年金がもらえる世代ですから、多くは支払いません。それでよかったですら行きましょう」という条件を出されました。地域が農林業ばかりに頼ることは難しい現状から、兼業により所得を確保することを一つの道として選択しましたが、このような動きも中山間地域の新たな雇用の形態となり、地域を守る力となるのではないかと思います。昨今の経済状況により、生産拠点を海外に移す企業が多い中、団塊の世代はまだ現役で働けるため、今後はこのような企業との連携を図っていくことも大切と考えます。

また、林業においては、何年前に当地域の森林組合で2人の方を新規採用し、地域に定住して林業に従事いただきました。今、1世帯は離れましたが、やはり技術を習得するまでの所得保障をきちんとすることが重要と考えます。だれでも最初は農林業に従事してもプロ並みの仕事はできるわけではありませので、新たな雇用の仕組みとして、三遠南信地域から国の施策

となるように働きかけるなどの活動も必要と考えます。林業などに従事し、地域の伝統産業を受け継ぎ、伝えていくためにも、長期的な視点で地域連携を進めていくことが重要だと思います。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

まだ、ご発言されていない方から、ご意見をいただきます。

特定非営利活動法人がんばらまいか佐久間 河村事務局長



私たちは、浜松市が大合併するときに佐久間でNPOを立ち上げ、現在6年目となります。原点は「みんなで汗をかこう」ということで、基本的にボランティアにより運営しています。会員数は約3,000人、活動を支える活動会員の登録数800人弱ありますが、なかなか活動を支えてくれる方が加入しないことが悩みです。団体の活動では、都市部から地域へ移住してもらうため、ボランティアで空き家の紹介をして、3年目に入っています。100軒、200軒という空き家があるものの、実際調査してみると住めないものやかなりの補修が必要なものが多い上、住める場合でも、先ほどの報告と同様に家財道具があるとか、盆、暮れに帰って来たいといった声がある状況です。そこで、住める状態の家で家財がある場合は、家財を特定の部屋にまとめてもらってから家を貸していただき、時々戻際には部屋が使えるというしくみを作り、家主と借りる側に「共生」をお願いしています。これにより、この2年間で6世帯11人が移住されま

した。中には、家主が家財を全て撤去してくれた例もありましたが、お互いに共生を図りながら移住されています。また、浜松市の教職員住宅の空き家を市から借りて、佐久間で空き家を探す方に一定期間、提供しています。昨年の8月から始めて、2世帯の移住につながるなど、悪戦苦闘しながらも、日々、活動をしています。

平谷村 小池村長

平谷村は、全国の中でもたいへん人口が少ない村です。当村でも移住施策を計画的に実施していますが、なかなか思うようにいかないのが現状です。1年に1、2件は子供を連れた家族が転入しますが、自然条件が厳しいことなどもあって、同じぐらい転出してしまうという状況です。一方、村が15年ほど前に掘り当てた温泉が、年間約30万人の日帰り温泉客が訪れるほどの人気であることもあってか、定年退職されたシニア層からの問い合わせが多く、シニア層が売れそうな住宅を購入され、改築して入居していただくケースが増えています。

また、村は7,700町歩ほどある面積の97%が山林であるため、以前は山林で生計を立てていましたが、現在は森林組合の作業員5、6人が山に携わっている状況です。従業員のほとんどは、IターンやUターンで村に定住していただいた方なので、たいへん喜ばしいところですが、やはり山仕事になれるまでに4、5年の時間が必要なことから、他の地域と同様に、それまでの所得の保障が課題となっています。

喬木村商工会 市瀬会長

喬木村商工会の市瀬です。喬木村も人口7,000人を維持しようと頑張っていました。数年前から7,000人を下回り、人口減少と高齢化が進んでいます。喬木村にも空き地や空き家があるため、都会の方から、空き家と宅地、それから附属する農地も一緒に買いたいという希望がありますが、宅地は買っても農地は農地法によりす

ぐに所有できないことから、仕方なく農地を借りている状況が見られます。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

最後に、アドバイザーの戸田様から、ご意見をいただきたいと思います。

社団法人東三河地域研究センター 戸田常務理事



みなさんが実際に直面している課題を、すぐに解決するようなアドバイスをすることは難しいですが、一つ言えるのは、県境を越えたSENAの枠組みの中で、これら課題の次の展望を見出していくことができるということです。

去年の分科会のまとめでは、SENAが県境を越える政策主体となれるかということでした。今年は、トップ対談の議論にあったSENAの次の形となる広域連合、あるいはそのほかの実施主体において、これまでのような包括的な議論ではなく、一歩踏み出し、今、具体的に何に取り組むかを定めるべきではないかと考えます。それには、地域が生きていくため、また、持続していくために、これを今やるべきだといったご意見をなるべく早い段階でみなさんから出していただく必要があると考えます。

移住や定住の取り組みでは、一歩踏み込んだ情報の提供、あるいは行政同士の連携強化が三遠南信の中では必要です。所得保障などの課題も個々の市町村だけで解決するのではなく、230万人という三遠南信の枠の中で考えていけば、可能性を見出していくことができるのではないかと感じました。

二地域居住や中長期滞在などでは、今後増加するシニア層などに中山間地域で豊かに過ごしていただくため、都会とは違う価値を三遠南信が提供し、生活全体の豊かさをどう表していくかが重要であると思います。

農家が減少していく中で、農家の担い手が地域へ入ってきて、指導者の数が減っていて、これを定着させることができない状況がある。そこで、地域の産業に応じた受け入れ体制の整備、対応が重要なのではないかと考えます。

SENAは、全国から注目される県境地域連携のモデルで、国においても様々な取り組みをしようとしています。SENAでは、より具体的な事業に取り組みながら、自らの問題として考え、その答えを出していかなければならないと思います。

天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

今日の住民セッションにおいて、南信州地域に「南信州交流の輪」という住民連携組織が設立しました。この会には、熱心な若い人たちも加わり、様々な活動をしていくこととなりましたので、ご紹介をさせていただきます。私ももう高齢ですが、若い人たちにこれまで学んだことをお伝えしていく大事な役目があると思って参加しています。どうかみなさんも若い人たちに応援いただきますようよろしくお願いいたします。

コーディネーター／豊橋科学技術大学 大貝教授

それでは、最後に今日のご意見等をまとめたと思います。

最初の安心・安全という分野では、特に中山間地域の生活の持続と、その基盤となる生活をきちんと守るための地域づくりが必要で、その手段として県境を越えた連携というものが大事であることが確認できました。

また、定住・移住という分野では、それぞれの地域で、その促進に必死で取り組まれている

ことが、よくわかりましたが、やはり課題は、空き家のデータベース化と利用者側の需要をうまく掘り起こしてマッチングさせていくことで、そのための情報発信の必要性を感じました。

私の考えですが、それぞれの自治体などで頑張っていることをSENAの枠組みに拡大し、スケールメリットを生かす連携体制の構築について検討していく必要があるのかなと思いました。

また、移住希望はあっても働く場所がないという状況は極めて重要なポイントになるため、やはりこの地域の最大の資源である森林を生かすことがどうしても必要で、そのためには、林業の再生はもちろん、そのための新たな施策を圏域で検討していくことが、いわゆる流域の定住を推進するためのポイントになるということを確認しまして、「山・住」分科会を閉会させていただきます。

7 三遠南信地域住民セッション

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

第13回三遠南信サミット2005in 遠州の際にはじめて開催されて以来、今年度で6回目の三遠南信地域住民セッションとなる。三遠南信地域の住民をはじめ、住民団体やNPO法人、大学や行政の関係者が集い、交流や連携に向けて議論を重ねてきた。

今年度は、南信州における住民団体等のプラットフォームとなる「南信州交流の輪」の設立とともに「祭り・伝統文化」、「食文化」、「中山間に生きる」、「交流・往来をつなぐ」の4つのテーマで意見交換がなされた。



■開会あいさつ

南信州交流の輪代表世話人 関 京子 様

リニア高速移動時代に備え、日本のど真ん中にある特色ある素晴らしい地域に大きな夢を抱くとともにそれらを学び、誇りを持って全国に発信していく。この輪を徐々に大きくし、次世代、東三河、遠州に伝えたい。

■南信州交流の輪 設立宣言

南信州交流の輪代表世話人 木下利春 様

それでは、まず開会に先立ちまして、南信州地域における住民連携組織の立ち上げを記念して、この場をお借りして設立宣言を行わせていただきたいと存じます。既に遠州及び東三河地域では、三遠南信地域の住民団体等のプラットフォームとなる「三遠南信市民連絡会」の形成に向けた連携組織等の環境が準備されていますが、南信州地域では今年に入ってから、住民連携組織の設立に向けた準備を進めてまいりまし

た。三遠南信地域の交流連携を実のあるものにしていくため、本日この三遠南信サミット2010in 南信州を契機に、本組織のビジョンや今後の具体的な取り組みについて、皆様にお知らせするとともに、遠州、東三河地域の住民組織と一層の連携を図り、三遠南信地域の交流連携を前に進めていきたいと思っております。

それでは、南信州地域の住民連携組織「南信州交流の輪」の設立宣言文を伊東直幸代表世話人より朗読させていただきます。

■南信州交流の輪 設立宣言文 朗読

南信州交流の輪代表世話人 伊東直幸 様

(宣言文の内容は78ページのとおり)

■東三河地域代表あいさつ

市民団体連携委員会委員長 原田敏之 様

三遠南信市民団体連携委員会を4年前の三遠南信サミット in 東三河の際に立ち上げた。その際には、遠州と南信州からも参加いただき賛同いただいた。

しかし、残念なことにその時作った連携組織は、三遠南信サミットの中で他地域とお付き合いする程度のものにしかならず、十分に動けるものに育たなかった。また、愛知大学三遠南信地域連携センターに事務局機能をお願いしていたが、大学の組織改革によってセンターでの事務局機能がなくなり、更に活動が停滞する状況

になっている。

現在「南信州交流の輪」のみなさんが持っている思いに対し、当時、私どもが目指してきたものも非常に近い考え方を持っていたつもりでした。ただ、ここまで明確な形で文章化するという作業までは追いついていなかった。このような形で内容を整え、整理した形で組織的にもここまで進められたことは、我々にとっても大いに励みになる。そういう意味では、南信州の大きな活躍のもとで、東三河地域としても協力を惜しまない形で参加させていただきたいと思う。

◆次の分科会において意見交換を実施

- 「祭り・伝統文化」分科会
- 「食文化」分科会
- 「中山間に生きる」分科会
- 「交流・往来をつなぐ」分科会

個々のテーマにおいて、それぞれの最近の活動状況を報告いただき、今後、変わりゆく三遠南信地域の生活環境にどのように向き合い、「今、我々がすべきこと」について意見を交わした。



■分科会意見交換内容の報告

<祭り・伝統文化>

コーディネーター

三遠南信地域を学ぶ会 河合清江 様

地域の祭りを何とかしなければならぬという人達が集まって意見交換を行った。

例えば、東栄町の花祭り。太鼓の音がうるさ

いと言われ、名古屋の街中で練習ができず、20年前に東栄町に移り住んだ設楽（したら）という太鼓集団がある。移り住んだ東栄町はたくさんの伝統文化があり、とても素晴らしい所だったが、最初はその伝統文化に関わっていいものかすごく心配した。しかし、祭りで太鼓をたたく以外にも、舞子として、また、お囃子や生演奏で参加するなど、祭りや伝統文化には多様な関わり方があった。今では、新たにそこで生まれた子ども達も祭りに参加している。



続いて、阿南町の新野の盆踊り。後継者不足でどうしようもない状態だったこの祭りでは、子ども達の音頭取りを始めたところ、子ども達も伝統文化に対して、真面目に付き合うようになった。クラインガルテン（滞在型市民農園）に来ている域外（名古屋等）のみなさんも、これほどの活気がある祭りを見て驚いている。子ども達が参加する事で活気が出てきたという地域の事例が紹介された。

まずは、この地域にどのような祭りがあるのか、どのような芸能があるのかを知り、参加することが重要。神事は氏子に任せるとしても、芸能部分は、保存会という組織で、別の人が入ってもいいのではないか。そのように区分して関われば、元々あったものを大きく壊さずに伝えていくことが可能である。世襲制で役が続いている伝統芸能もあるので簡単には広げられないかもしれないが、多くの人が関わる方法を検討していくことが必要である。

今回、祭り・伝統文化のグループに参加して感じたことは、皆が守ろうとしているというこ

と。また、伝統文化と普通の祭りとは異なるということを知った。

<食文化>

記録者

南信州広域連合事務局 一柳和宏 様



各地域の豊かな食文化に関心を持つ住民団体等が参加して意見交換をした。

地域を知ってもらうこととお互いに地域を知ることが大切である。三遠南信地域の人が“食”を通して行き来することが必要である。

既に、三遠南信”炊き込みご飯の素”という山の幸、海の幸がコラボし商品開発が進められているように、三遠南信地域における食の融合という形は発展性がある。

また、パッケージの裏に地域の紹介を入れたり、商品PRする関係者の人脈(人的ネットワーク)の形成等が必要である。

そういう意味では、「食べること」を通じて人が集まる場や3地域の住民団体が情報交換を行う場が1年に1回だけの机上の会議で終わるのではなく、継続して定期的に交流し、更に現地でもどう活かしていくかについて議論する場が必要である。

今回話し合ったことをそれぞれの組織のみなさんに伝えてもらい、引き続き交流の輪を広げていきたい。

<中山間に生きる>

コーディネーター

NPO 法人三遠南信アミ 三宅淳子 様

福祉、森づくり、農業、地域間交流、エコ(地域環境)の分野から参加いただいた住民団体等によって意見交換した。

中山間地域は、様々な課題を抱えている地域である。

特に「個人や個々の自立をどう促すか」が重要で、地域の理解を得ながら中山間地域が抱えている課題解決に取り組む必要がある。

また、中山間地域の宝物を村づくりに活かすことの重要性についても意見が出された。これは、言い換えれば、地域資源を活用してどのように経済効果を生み出すかということで、住民が意識を持って取り組むべきである。



また、それぞれの活動分野に携わるみなさんから意見をもらった。

中山間地域に生きることは、山に生きる専門家集団でもある。これに対しては、もっと誇りを持つべきである。山は資産であるという意識を持つ必要がある。山の専門家集団として、多様な業種と連携して環境商品を生み出したり、森林情報を提供するなどの活動により、新たな雇用や価値を創出することが大切である。

そういう意味では、来年、三遠南信の住民セッションを売木村でやろうという意見もあった。

<交流・往来をつなぐ>

コーディネーター

愛知大学 平川雄一 様

交流にはどのような形があるか、ということについて議論を重ねた。

今までは見に来るだけだった観光が、徐々に

祭りやイベントに参加してもらって進める形ができあがってきている。

また、イベントを行うだけではなく、後に何か形に残るものを生み出す交流が大事である。更には、来訪者に対して何か価値を見つけてもらう、来た人に対して喜びや楽しさを感じてもらってもてなし、世代間交流、同世代交流が必要なのではないか。

それから、前から言われていることだが、この地域のファン作りが必要。実際にそのような活動をしているグループもいる。

このような交流を進めていくには、情報の発信が不可欠である。インターネットや紙媒体等の様々なツールがあるが、まだまだできていない。そのためには、情報発信のベースとなる基地が必要である。



また、年に1回の住民セッションだけ交流するのではなく、何か別の機会を作り、情報の発信をする必要がある。そういう意味で、先程「中山間に生きる」グループからも報告があったように、来年の売木村での交流会開催の提案についても、大いに期待をするところである。

■まとめ

南信州交流の輪代表世話人 木下利春 様

みなさんの共通認識として、この地域を何とかしていかなくてはいけないということをそれぞれお持ちだと思ふ。今回の住民セッションを最終的にどのように活かしていくかということが大事なことである。

三遠南信地域での交流や連携は、大きな力を

生み出すきっかけになる。これからもご協力をお願いしたい。

■開会あいさつ

次回開催地域代表 松田不秋 様



住民セッションを開催して6年目。住民セッションが大きく変わった。最初はプラットフォーム論に議論が偏り、どうやってその枠組みを作っていくかという形式論に忙殺された。

今回、初めて本音で語り合う住民セッションとなった。いよいよ幕が開いたと感じており、大きな期待を寄せている。

来年は浜松での開催となることから、今回の思いをそのまま持っていきたいと思っている。

浜松は合併があり、現段階では皆が同じ土俵で議論できる状況にはないが、徐々に変わりつつある。

浜松へは、今回のセッションをそっくりそのまま持ち運んでもらいたい。

■「南信州交流の輪」設立宣言文

宣 言 文

私たち「南信州交流の輪」は、東三河・遠州・南信州の「三・遠・南信」の地域が、いかなる歴史や特性をもって、今日を築いているかを学び、お互いの地域間の交流を深め、未来を築いていきます。

「三・遠・南信」地域は、古くは道を通して、県境を越えた交流が文化・経済とも盛んであり、また日本のどまんなかという主要な位置から、大きく七つの特性を持っています。

- ひとつ、この地域が日本のどまんなかにあることから、日本の約70%の多種多様な植物があること。
- ふたつ、かつては東西南北交通の結節点にあり文化・経済の集積地であったこと。
- みつつ、群雄割拠の時代にはこの地域が主要な位置にあったこと。
- よつつ、県境の村々に受け継がれる祭り文化が日本古来のものであること。
- いつつ、食が豊かであること。
- むつつ、時間がゆっくり流れていること。
- ななつ、結いの精神に代表される支えあう暮らしがあること。

私たちは、この七つの特性を全国に誇ることのできる宝と考え、そのために自らの目で地域を見て体感し、県境を越えた地域間の連携を確認するとともに、この地域ならではの物語を創造し、付加価値をつけて全国に発信してまいります。

近い将来、この地域にリニア中央新幹線が通ると、生活空間は大きく変貌していきます。その時に、ここに住む人たちが、この地域の文化を誇りとして語ることができ、当地域の産業や風土が全国に注目されるように、明確なビジョンをもって活動をしていきます。

具体的には、

- 一、 会員は「学び、体験し、交流する」プログラムを作成し、それに参加します。
- 二、 会員は東三河と遠州の会員と協力し合い「三・遠・南信」の魅力を学んでいきます。
- 三、 会員はそれらの基礎的学習を通して、何をどのように全国に向けて発信していくか、中長期スパンのプログラムを作成します。
- 四、 それらの活動は毎年開催されるサミットにて報告し、目標を再確認していきます。

本日十一月十二日を、私たち「南信州交流の輪」の活動開始の記念日とします。

平成二十二年十一月十二日

南信州交流の輪 代表世話人 関 京子
伊東 直幸
木下 利春

8 報告会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

報告会では、各分科会のコーディネーターがそれぞれ議論された内容を報告し、飯田市長がサミット宣言を行った。また、浜松市長が、次回開催地域を代表してあいさつをした。

■「道」分科会

コーディネーター 飯田市長 牧野光朗

「道」分科会では、まず3人の方々から、ご報告をいただきました。

まず、中部地方整備局浜松河川国道事務所の森谷所長様から、「平成22年7月豪雨が住民の生活に与えた影響と三遠南信自動道の整備と効果について」のご報告をいただき、続いて、飯田市企画部の木下参事から、「リニア中央新幹線・飯田駅を見据えた地域づくり」という視点で、国や南信州地域の取り組み状況、また、このリニアが三遠南信地域に与える影響について報告がありました。

それから、3番目に豊橋市の野崎副市長様から、「三遠南信地域の物流拠点港湾」というテーマで、この地域だけでなく、国にとってのゲートウェイとしての重要性から、港湾とセットで三遠南信自動車道あるいは広域幹線道路の充実をさせることが重要との報告をいただきました。



これらの報告を踏まえ、テーマ「地域基盤整備による地域活性化への期待」に基づき議論を活発にさせていただきました。

さまざまな皆様からいただいたご意見としては、リニア中央新幹線や港湾整備といった、こ

うした地域にとって不可欠なインフラ整備は早期に行っていく必要があるわけではありますが、特に、こうしたものを三遠南信圏域全体で最大限の効果を出していくためには、やはり今、脆弱と思われます南北軸の道路整備、これを早期かつ着実に進めていくことが必要というものでした。

また、そうした道路整備を進めていくために、特に、この三遠南信自動車道あるいは浜松三ヶ日・豊橋道路、三遠伊勢連絡道路等の早期整備を図っていくためには、国への働きかけをどうするかということが大変重要であるということでご意見をいただきました。

これは前回の報告でもあったところではありますが、国会議員や国への働きかけというのをこれからもしっかりと考えてやっていく必要があるということでもあります。

特に、この三遠南信自動車道につきましては、青崩峠道路、あるいは浜松市側の現道活用区間、こうしたところをどのような形でこれから進めていくかということに課題を持っているということでありまして、やはり地域にとりまして、この道路をどのようにこれから活用していくか、地域の中でしっかりとまた議論を進め、そして、地域全体でこの活用について、国を始めとした関係機関への提言を継続して行っていくということが必要であります。

また、交流をより進めることによりまして、お互いの地域を知っていくことで、こうした情報共有もさらに高めることができるのではないかと考えておりました。

以上をもちまして「道」分科会の報告とさせ

ていただきます。

■「技」分科会

コーディネーター 静岡大学イノベーション
共同研究センター長 木村雅和 様

「技」分科会の前半部分、1番目のテーマ「産学官連携・農商工連携の推進と地域全体への拡大に向けて」に基づく議論について報告させていただきます。



まず、この分科会の前半の部分では、三遠南信地域における産業集積計画に関する事例報告に関しまして、飯田市の糸原産業経済部長様にご報告をいただきました。

その後、報告及び全体会のトップ対談の結果に基づき、活発な議論がなされました。

その中では、この地域には新産業から既存産業、あるいは一次産業から六次産業まで、多様な産業が集積しているのが三遠南信の地域である。また、この地域には非常に多くの資源の宝庫がある。

こういったものを生かして、国際優位性のある技を駆使して、地域活性化に必要な資金を世界からいろいろな形で稼いでくる、そういった地域イノベーションを確立していくことが必要であるといったご意見が出されました。

そのためには産業界、大学、自治体が一体となって戦略的に進めていくこと。また、都市部あるいは中山間地域が多いこの地域の地域産業の振興も両立させながら、広域化、国際化を進めていくことが、この地域の未来を決めると

言っても過言ではないといった議論がされ、重要なのは「自立」と「グローバル化」であることを確認しました。

そして、そもそもこの地域には地域ならではの強みがあり、それがこれからどのように活用されるのが問題であって、今後、地域がもともと持っている本来の強みを生かしていくための産学官による連携で、他の地域にないようなビジネスモデルを確立することこそ、三遠南信のこれからの課題ではないのかということが議論されました。

その中で出てきた幾つかのキーワードには、「ネットワーク化」、「ブランド化」、「人材育成」、これはグローバルという言葉に限らないですけれども「マーケティング」があり、これが非常に重要だろうということも議論されました。

まとめとして、先ほどトップ対談の中でありましたけれども、これからこの三遠南信、SENAが次の形に向けて一歩前へ出るときに、これらを達成するような組織になっていくことが重要ではないかというように結論づけられました。

以上、「技」分科会、前半部分の報告とさせていただきます。

■「技」分科会

コーディネーター 愛知大学経済学部教授
岩崎正弥 様

「技」分科会の後半部分、2番目のテーマ「地域が大学に求めるものと三遠南信地域大学フォーラムの姿」に基づく議論について報告いたします。

実は、前半部分のテーマでかなり議論が白熱しまして、残り10分ほどの時間の中、当初予定していたことができなかつたというのが現状でございました。

「技」の中では、「三遠南信地域大学フォーラムの設置」が重点プロジェクトの一つとして掲げられています。

これに関しまして、メンバーの一人でありま
す佐藤元彦愛知大学学長より現状を報告いた
だき、それに関して意見をいただく予定で
したが、初めに申し上げましたように、紹
介が中心で終わってしまったという状況で
ございます。



ただ、その中で2点ほど、地域が大学に求
めるものということで意見が出されました。

1点目として、この間、いろいろな大学が
地域連携に取り組まれておりますが、その
中には、その目的などからやむを得ず行
き違いが出ています。

原因の一つとして、地域の側から見たとき
に、大学の地域への踏み込み方が、まだ
甘いのではないかといったご意見でした。

それから、2点目として、産学官連携とい
うことで、とりわけ理系の大学では、こ
の間、連携を進めてまいりましたが、人
文・社会系の大学においても関わりを強
くしてほしいというご意見で、三遠南
信地域には人文・社会系の大学が多々
あるものの、愛知大学もその一つです
が、産学官連携における関わりが薄か
った現状を踏まえ、前半部分で議論さ
れた「マーケティング」の部分でもぜひ
連携し、人材育成に関わってほしいと
いうものでした。

このような意見や要望が出されたとい
うことで、報告に代えさせていただきます。

■「風土」分科会

コーディネーター 財団法人阿智開発公社理
事長 羽場睦美 様

「風土」分科会では、テーマ「三遠南信の地

域資源を活かした連携事業の推進と歴史風土の
保全」に基づくとともに、トップ会談にお
ける佐原豊橋市長さんの地域文化、お祭
り、人の交流を支える「絆の道」のお話、
牧野飯田市長さんの南アルプスの辺境の
地に、それこそ三遠南信のお仲間がた
くさん集まって、私たちの地域固有の文
化を体感されたお話が紹介されたことに
触れるとともに、昨年度の「風土」分科
会でまとめられた事項を確認しながら、
議論を交わしました。

まずは、秋葉街道信遠ネットワークの木
下利春様からご報告をしていただきました。

まさに伊那市からずっと遠州までつな
がっている民間のネットワークで、田原
市長さんも途中で取り組まれたそうで
ございますが、沿線の関係者を中心に
秋葉街道を修復し、保全と活用して
いく内容でしたが、一方で、三遠南
信自動車道では日本の最高の技術を
集め、巨額を投じて道がつくられる
なか、歴史と文化を残す道、そこに
価値があり、あるいは大事なものが
あるというご報告でした。

これを受け、出席者の皆様からご
意見等いただきました。

浜松市では、地域内の5つのお寺を
「湖北五山」と名付けて、共通する
観光資源全体でPRする新たな手法
に取り組んでいる事例を挙げ、三遠
南信でもそういった工夫ができるの
ではないかというご意見をいただき
ました。

また、田原市と設楽町では、田原
市の若者が設楽町の標高の高い遊
休農地を開拓して、地元の農家の
指導の下で高原キャベツをつくり、
田原の販売ルートやマーケティング
技術を活用して販売し、雇用も生
み出せる新たな試みがなされている
事例の報告がございました。

さらに根羽村では、地域資源の根
羽杉の生産から加工、そして販売
を住宅の設計士や工務店と連携し
て行う新たな産業を創出して雇用
を生み出し、Iターンの若者が多
く定住している事例。特に、村に
定住する人には、ただ定住する

だけではなく、地域のお祭り、組合や消防団に参加することを条件としていて、一緒に地域の文化を守っている事例のご報告もありました。



全体として、その多様性から一つにまとめるという段階にはまだ至っていないことをみなさんに了解をいただき、塩の道エコミュージアムとして、着地型のニューツーリズムの地元発信の文化など、多々ある地域資源を大切にしながら、これから徐々にそれを育てていこうということでみなさんの合意がとれたのではないかと思います。

それから、もう一つは、三遠南信における地域社会雇用創造事業で、内閣府から7億円の交付金を受けて事業に取り組んでいるというご報告がSENAからありました。

事業は平成22年度からスタートしており、23年度までインキュベーション事業で起業者を90人、インターンシップ事業で研修修了生を800人の数値目標を掲げています。

これには大いに関心を持っていただきまして、NPO法人、あるいは自治体関係者等も積極的にご参加いただきたい。

まだまだいっぱいある宝が観光に結びついて、これが産業にまでは至っておりませんが、大きな可能性を秘めているということで会を閉じさせていただきました。

以上、報告とさせていただきます。

■「山・住」合同分科会

コーディネーター 豊橋技術科学大学建築工学系教授・地域協働まちづくりリサーチセンター長 大貝彰 様

それでは、「山・住」分科会の報告をさせていただきます。

今回は、「流域定住の推進に向けた連携体制の構築」と「安全・安心の地域づくりの実現」の二つのテーマについて話し合いをしました。

事例報告では、まず、浜松市消防ヘリコプターの広域運用について、浜松市消防航空隊の前川さんから報告いただきました。

そして、定住に絡んで、長野県松川町の「空き家情報バンク」による定住促進について、さらに、東三河広域協議会が取り組む「シニアリフレッシュ事業」による中山間地域への移住・定住の促進についての報告をいただきました。

続いて、出席者の皆様からご意見をいただき、たいへん中身の濃い議論ができましたので、ご報告します。

まず「安心・安全な地域づくり」についてですが、安心・安全ということは、特に中山間地域での生活を維持し、さらには移住・定住を促進していくためには欠かせない生活の基盤であります。それをどう構築していくか、確保していくかというのは極めて重要なテーマです。

これは、医療、教育、さらには防災といった面で不可欠な要素で、やはり県境を越えて連携体制を構築していくことが極めて重要であるということを確認しました。

それから「定住・移住」というテーマですが、これについては、本当に各市町村で様々な努力、取り組みがなされています。

松川町の「空き家情報バンク」の話がありましたけれども、この空き家情報をうまくデータベース化して空き家の所有者に登録してもらい、利用者のアクセス数を増やしていかないと、なかなか定住に繋がらない状況です。

中山間地域を抱えている市町村では、共通す

る課題を持っていることから、やはり情報をいかに一元化して、それをうまく発信していくことが重要で、個々の市町村の取り組みから、今後は三遠南信全体で連携し、三遠南信というスケールメリットを生かして、情報発信力を強めたいところです。



また、定住を促進させたいが山に働く場所がないという重要な問題に関して意見をいただきましたが、やはり三遠南信の最大の地域資源である森林を生かすしかないという意見が多く、雇用の場を確保するためには、林業の再生というのが今後の重要な政策課題と確認しました。

なお、アドバイザーの戸田さんからは、流域定住を進めていくためには情報発信力を高めていくことが必要で、インターネットだけでなく、チラシやパンフレットでも情報が地域の至るところで、いつでも得られるような環境がつけられることが望ましいのではないかと述べられました。

それには、この地域の公共施設などを三遠南信交流センターとしてSENAが認定して、そこを三遠南信地域の情報源としても活用し、情報を発信していこうという提案をいただいた。

以上、報告といたします。

■サミット宣言 飯田市長 牧野光朗

第18回三遠南信サミット in 南信州では、「地域主権時代における県境地域連携モデルの推進—融合に向けた自発的な地域づくりの実践—」をテーマとし、トップ対談において地域の目指すべき姿を語り、「道」「技」「風土」「山・住」の各分科会において、自発的な地域づくりについて議論を深めてまいりました。

私たち三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、今回のサミットでの議論を踏まえ、次の事項に重点を置き、地域主権時代における県境地域連携を自負と責任を持って先導してまいります。

- 1 圏域の背骨となる三遠南信自動車道の早期開通をはじめ、リニア中央新幹線の早期開業と圏域北部の玄関口となるリニア中央新幹線飯田駅の設置を目指すとともに、東西南北高速移動時代に備えた浜松三ヶ日・豊橋道路等の整備、三遠伊勢連絡道路の実現に向け、三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）を中心とした強固な連携の下、地域一丸となって提言活動を進めます。
- 2 新産業の集積と基幹産業化、既存産業の再成長に向け、産学官金連携を一層強固にし、次世代輸送用機器、農商工連携、医工連携、光エネルギー環境分野の取り組みを加速させるとともに、海外市場も見据えながら広域的な展開を図ります。
また、三遠南信地域の大学・研究機関等の連携を促進する三遠南信地域大学フォーラムの設置に向けた取り組みを進めます。
- 3 三遠南信地域の塩の道エコミュージアムを構成する歴史的・文化的な地域資源の情報の一元化と発信体制の強化を図ります。
また、三遠南信地域社会雇用創造事業を通して社会的企業を支える人材の育成や社会的企業の起業支援に取り組み、三遠南信 250 万流域都市圏を支える雇用創造ネットワークの構築を目指します。
- 4 安全・安心な地域づくりの実現に向け、地域住民の生命、身体、財産等を災害から守るために県境を越えた広域防災連携を推進します。
また、中山間地域における定住促進や流域定住推進モデルの形成に向け、情報の一元化と圏域内外への発信体制の整備に取り組みます。
- 5 三遠南信地域の融合に向けて、広域連合など平成 24 年度からの新・連携組織への移行について準備を進めます。

これらの取り組みを、ここに集うすべての主体が確認し、第18回三遠南信サミット 2010 in 南信州のサミット宣言といたします。

平成 22 年 11 月 12 日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット 2010 in 南信州

○次回開催地域あいさつ

浜松市長 鈴木康友



それでは、皆様、大変お疲れさまでございました。

来年開催予定地であります遠州地域としてごあいさつをさせていただきます。

今回、第18回の三遠南信サミット2010in 南信州の開催にあたり、この飯田を中心とした南信州地域の皆様に本当に大変お世話になりました。また、ぐっと踏み込んださまざまな議論が行わ

れたというように思います。

先ほど宣言文にもありましたように、24年度に向けまして、新たな連携に向けた組織を考えていこうということで、広域連合を視野に入れた準備を進めるという、今までにない新しいステップに入ったかなという感じがいたします。来年の19回目は、いよいよ7巡目に入ることをごさいますて、新しいステップに入ったこの三遠南信地域連携ビジョンの実効性ある取り組み、あるいは議論がなされるように、私達も頑張ってまいりたいというように思います。

来年、浜松は市制百周年を迎えます。百年の一つの区切りの年というようになりますので、百周年記念の三遠南信サミットでもごさいます。ぜひ多くの皆様のご参加をお待ち申し上げております。どうぞよろしくお願ひします。ありがとうございました。



9 交流会

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

交流会では、三遠南信「地酒」サミットが行われ、三遠南信地域の酒蔵から集められた地酒が振舞われたほか、三遠南信地域の観光連携の一環として浜松市・豊橋市・飯田市の特産品の試食・試飲や販売が行われた。

また、「合唱団カネト」による合唱劇と「御花泉」による和太鼓の演奏が披露された。

■ 交流会の様子



■ 三遠南信「地酒」サミット



■ 観光連携事業（浜松市）



■ 観光連携事業（豊橋市）



■ 観光連携事業（飯田市）



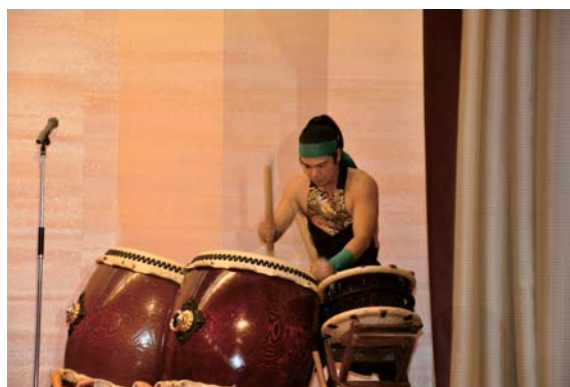
■ 観光連携事業



■ 「カネト合唱団」による合唱劇



■ 御花泉（ごかせん）の和太鼓演奏



■ 御花泉（ごかせん）の和太鼓演奏



■ 御花泉（ごかせん）の和太鼓演奏



《シャトルバスの運行について(飯田文化会館 ↔ シルクホテル)》

飯田文化会館とシルクホテルとの会場移動用のシャトルバスを下記のとおり運行しますのでご利用ください。

◆全体会終了後の会場移動

飯田文化会館 → シルクホテル

※①全体会終了後(15:00~15:45)に、飯田文化会館から、分科会会場のシルクホテル行きのシャトルバスを運行します。シルクホテルまでの移動時間は3分。(徒歩の場合は10分程度かかります。)
分科会の開始時間は、15:45です。

◆分科会終了後、報告会終了後、交流会終了後の会場移動

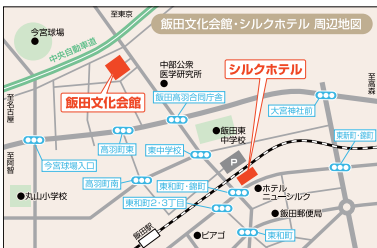
シルクホテル → 飯田文化会館

※②分科会終了後(17:30~18:00)、
③報告会終了後(18:30~19:00)、
④交流会の終了後(20:00~20:30)に、シルクホテルから飯田文化会館行きのシャトルバスを運行します。飯田文化会館の駐車場にお車を駐車された方は、このシャトルバスをご利用ください。
飯田文化会館までの移動時間は3分。(徒歩の場合は10分程度かかります。)

シャトルバス時刻表

区分	運行時間	乗車場所	降車場所	対象(目的)
①	15:00~15:45	飯田文化会館	シルクホテル	サミット全体会参加者(分科会会場への送迎)
②	17:30~18:00	シルクホテル	飯田文化会館	サミット分科会参加者(飯田文化会館への送迎)
③	18:30~19:00	シルクホテル	飯田文化会館	サミット報告会参加者(飯田文化会館への送迎)
④	20:00~20:30	シルクホテル	飯田文化会館	サミット交流会参加者(飯田文化会館への送迎)

※飯田文化会館の発着所は、第2駐車場です。(飯田文化会館に向かって右側の駐車場)
※シルクホテルの発着所は、シルクホテルの正面玄関前です。



テーマ
地域主権時代における県境地域連携モデルの推進
―融合に向けた自発的な地域づくりの実践―

第18回 三遠南信サミット 2010 in 南信州

平成22年 11月12日(金)

会場/飯田文化会館(飯田市高羽町5丁目5番地1)
シルクホテル(飯田市錦町1丁目10番地)

主催
三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA)

共催
三遠南信地域交流ネットワーク会議
三遠南信地域経済開発協議会
三遠南信地域整備連絡会議

後援
国土交通省・経済産業省・農林水産省
長野県・静岡県・愛知県

Program

10:00 ↓ 12:00	三遠南信地域住民セッション	会場: 飯田文化会館 1階 展示室1~3 2階 会議室1~4
13:00 ↓ 15:00	全体会 ▶トップ対談 テーマ/「地域主権時代における三遠南信地域の目指すべき姿」 パネリスト/浜松市長、豊橋市長、飯田市長、 浜松商工会議所会頭、豊橋商工会議所会頭、飯田商工会議所会頭 コーディネーター/(社)東三河地域研究センター 常務理事 戸田敏行氏	会場: 飯田文化会館 ホール
15:45 ↓ 17:30	分科会 ▶「道」分科会 テーマ:「地域基盤整備による地域活性化への期待」 コーディネーター: 飯田市長 牧野光朗氏 ▶「技」分科会 テーマ①:「産学官連携・農商工連携の推進と地域全体への拡大に向けて」 コーディネーター: 静岡県大学イノベーション共同研究センター長 木村雅和氏 テーマ②:「地域が大学に求めるものと三遠南信地域大学フォーラムの姿」 コーディネーター: 愛知大学経済学部教授 岩崎正弥氏 ▶「風土」分科会 テーマ:「三遠南信の地域資源を活かした連携事業の推進と歴史風土の保全」 コーディネーター:(財)阿智開発公社 理事長 羽場睦美氏 ▶「山・住」合同分科会 テーマ:「流域定住の推進に向けた体制の構築と安全・安心な地域づくりの実現」 コーディネーター: 豊橋技術科学大学建設工学系教授 大貝 彰氏 地域協働まちづくりサードセンター長	会場: シルクホテル 2階 錦織 (にしき) 会場: シルクホテル 4階 飛天 (ひてん) 会場: シルクホテル 3階 瑞雲 (ずいうん) 会場: シルクホテル 5階 飛翔 (ひしょう)
18:00 ↓ 18:30	報告会 ・分科会報告 ・サミット宣言	会場: シルクホテル 4階 飛天 (ひてん)
18:30 ↓ 20:00	交流会	会場: シルクホテル 2階 錦織 (にしき)

会場: 飯田文化会館

会場: シルクホテル



三遠南信サミットでは、県境を跨ぐこの三遠南信地域(愛知県東部の東三河地域、静岡県西部の遠州地域及び長野県南部の南信州地域)を一体的に振興するため、地域住民、大学・研究機関、経済界、行政が一堂に会し、それぞれの活動状況を共有するとともに、今後の三遠南信地域の展望について議論します。平成5年度から、東三河、遠州、南信州の3地域で順番に毎年度開催し、この間、広域的な交流・連携を深めてまいりました。今回は、この三遠南信地域の取り組みを、地域主権時代における県境地域連携モデルとして推進するため、平成20年3月に策定した「三遠南信地域連携ビジョン」に基づく自発的な地域づくりについて意見を交わします。

三遠南信地域住民セッション
10:00～12:00

全体会
13:00～15:00

分科会
15:45～17:30

報告会 18:00～18:30

交流会 18:30～20:00

会場への交通アクセス

飯田文化会館 1階 展示室1～3・2階 会議室1～4

南信州地域の住民団体の交流・連携組織「南信州交流の輪」の設立を契機として、三遠南信地域の更なる交流と連携の発展に向けて前進します。

飯田文化会館ホール

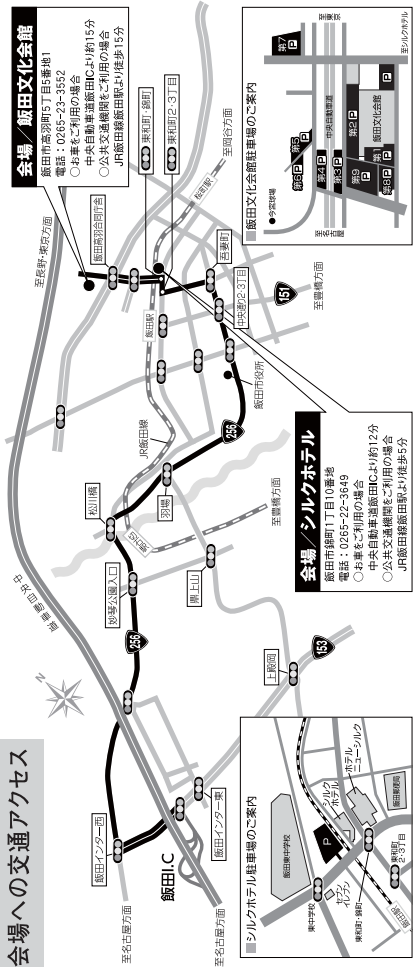
◆トップ対談 テーマ:「地域主権時代における三遠南信地域への目指すべき姿」
浜松市長、豊橋市長、飯田市長、浜松商工会議所会頭、豊橋商工会議所会頭、飯田商工会議所会頭による対談

シルクホテル2階～5階

「道」分科会 テーマ:「地域基盤整備による地域活性化への期待」
「技」分科会 テーマ:①「産学官連携・農工商連携の推進と地域全体への拡大に向けて」
②「地域が大学に求めるものと三遠南信地域大学フォーラムの姿」
「風土」分科会 テーマ:「三遠南信の地域資源を活かした連携事業の推進と歴史風土の保全」
「山・住」合同分科会 テーマ:「流域定住の推進に向けた体制の構築と安全・安心な地域づくりの実現」

シルクホテル4階 各分科会の報告・サミット宣言

シルクホテル2階 参加費 5,000円/人



《交流会参加者専用》参加申込書 [平成22年11月8日(金)必着]		住所	所属
氏名			
電話番号		メールアドレス	

※任意セッション・全体会・分科会・報告会に参加される方については、お申し込みは不要です。
 ※交流会へ参加される方のみ、参加申込と参加費5,000円が必要で、交流会へ参加される方は、住所・氏名・所属、電話番号・メールアドレスをメールで送信していただくか、上乗せで封紙にて送信してください。
 ◆なお、参加費5,000円(税込)以上で入金の手配が完了するまで、お申し込みはできません。
 ※振込口座: 静岡銀行 浜松支店 普通口座 149923 三遠南信地域連携ビジョン推進会議 会費 浜松市長 鈴木康夫
 ※既得した個人情報は、三遠南信サミットの運営に関する業務にのみ使用し、その他の目的での利用はいたしません。

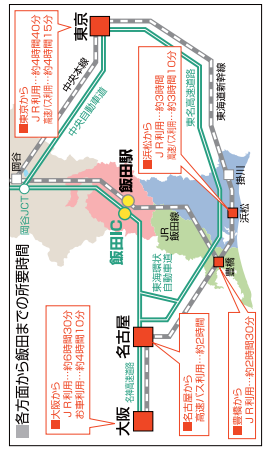
テーマ
地域主権時代における県境地域連携モデルの推進
「融合に向けた自発的な地域づくりの実践」



第18回 三遠南信サミット 2010 in 南信州

平成22年11月12日(金)
会場/飯田文化会館(飯田市高羽町5丁目5番地1)
シルクホテル(飯田市錦町1丁目10番地)

一般公開・どなたでも参加できます。
主催 | 三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA)
共催 | 三遠南信地域交流ネットワーク会議
三遠南信地域経済開発協議会
三遠南信地域整備推進協議会
後援 | 国土交通省・経済産業省・農林水産省・長野県・静岡県・静岡県・愛知県



＜三遠南信サミットの開催概要一覧＞

回数	年	開催日	テーマ	開催地
1	1994	H 6. 2. 10 (木)	三遠南信地域に今、21世紀の風が吹く *「三遠南信サミット&シンポジウム」として開催	浜松市
2	1994	H 6. 11. 21 (月)	交流がつくる三遠南信の未来	豊橋市
3	1995	H 7. 10. 11 (水)	次代に向けて動く三遠南信 ～地域を変える交流の創出～	飯田市
4	1996	H 8. 11. 22 (金)	三遠南信地域の新たな連携と共生に向けて	浜松市
5	1997	H 9. 11. 17 (水)	三遠南信地域の新たな連携 ～循環型社会の構築と新たな活力の創造～	豊橋市
6	1998	H10. 10. 8 (木)	三遠南信の新たなステージをめざして ～交流から参加と連携へ～	飯田市
7	1999	H11. 7. 23 (金)	人が、物が、そして地域が動く *「三遠南信サミット」と名称変更	雄踏町
8	2000	H12. 7. 26 (水)	絆、そして融合 ～三遠南信地域の明日をめざして～	豊橋市
9	2001	H13. 11. 8 (木)	交流の新たなステージへ ～21世紀 三遠南信地域住民交流の創出～	飯田市
10	2002	H14. 7. 24 (水)	快適空間・三遠南信 ～元気な観光・交流の新たな創出～	浜松市
11	2003	H15. 10. 27 (月)	まるごとミュージアム・三遠南信 ～魅力再発見からもてなしのまちづくりへ～	豊橋市
12	2004	H16. 11. 25 (木)	新たな歴史の扉を拓く ～三遠南信からの発信～	飯田市
13	2005	H17. 11. 4 (金)	三遠南信・新たな時代の幕開け ～夢街道いよいよ実現へ～	浜松市
14	2006	H18. 10. 23 (月)	三遠南信・圏域の創生をめざして ～つながる 広がる 躍動する～	豊橋市
15	2007	H19. 11. 14 (水)	将来(あす)への展望 ～今、三遠南信地域の新たな協創のとき～	飯田市
16	2009	H21. 2. 10 (火)	三遠南信 250万流域都市圏の創造に向けた挑戦	浜松市
17	2009	H21. 11. 13 (金)	日本の県境連携モデルの構築 － 三遠南信地域連携ビジョンの実現に向けて －	豊橋市
18	2010	H22. 11. 12 (金)	地域主権時代における県境地域連携モデルの推進 － 融合に向けた自発的な地域づくりの実践 －	飯田市

○三遠南信サミットは、歴史ある地域同士の深い絆のもと、県境地域の一体的な地域振興のため、平成5年度から開催している。将来に向かっての議論を重ね、交流から連携、さらに融合へと地域住民や大学、経済界、行政が一堂に会し、共に結束して連携ビジョンの推進を図ってきた。参加者は、三遠南信地域の31市町村の首長、議長、48商工会議所・商工会の会頭・会長、国・県関係者、住民団体、一般参加者等。

○東三河、遠州、南信州の3地域の輪番制で開催し、平成22年度で6巡目、18回を数える。

第18回三遠南信サミット2010 in 南信州
平成22年11月12日開催
三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA)

SAN-EN-NANSHIN

